第二十年第十號
十月一日發行

REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行明治卅八年十月一日

奇書新刊豫告

有磯逸郎著

明治闇黑史

十一月發賣

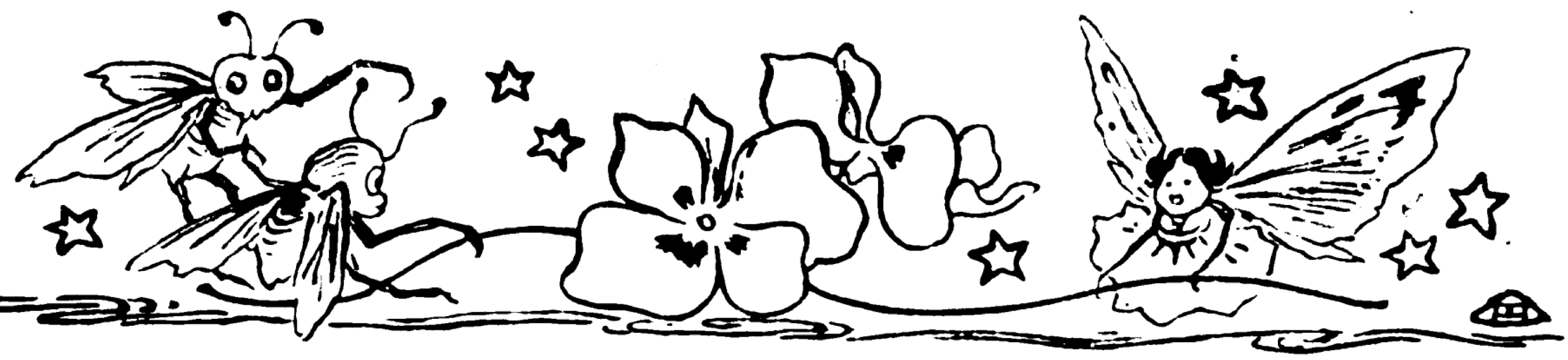
紙數約四百頁

『明治闇黑史』は來る十一月を以て正に讀書社會に出でんとす

今春以來、中央公論誌上に、二三の陰謀談を掲ぐるや、大に世人の鑑賞を博したり、然れども是れ僅に陰謀史上の一談片のみ。明治維新以來、爰に三十八年、其の進歩の跡を見れは、彩華燦然として、前古未だ曾て其の比を見ず。然かも明治の歷史に坦々たる足跡を以て、單純に今日の進歩を起せるものにあらず、其の半面には常に秘密の計畫は行はれ、大陰謀は企てられし也。之を明治の初年に見ん乎、攘夷思想を繼ぎ、保守の感情を懷ける公卿愛宕道旭等は、時の外務卿澤宣嘉を謀主に戴き、竊に久留米侯と結び、熊本、柳川、久留米、小倉、長門、越後及秋田等の反政府者と連絡を通じて、新政府顛覆の陰謀を企てたるが如きは、世間に知る者尠しと雖も、最も著名の事實なり、然かも普通の歷史は、僅に其の名將を記るせるのみにして、詳細の消息は未だ之を語らるざるなり。其の間に大村益次郎の襲擊あり、廣澤眞臣の横殺あり、長州奇兵隊の暴動あり、丸山作樂等の朝鮮計畫に至りて、漸やくにして終局を告ぐ。明治六年、征韓論の破烈後、歷史の暗潮は、西郷隆盛、江藤新平、前原一誠等の人物を中心として、更に一層の勢力を逞ふせり。武市熊吉の岩倉大臣要擊の如き、千屋歸一等の增上寺燒拂の如き、長岡久藏の思案橋事件の如き、其の暗流の外部に露はれたる一流沫のみ。西郷隆盛の擧兵に至りて、全國に充滿せる反政府者をして擧げて擾亂の中に入らしめたり。斯くて民權時代に入るや、自由黨組織後、僅に一年、河野廣中等の福島事件起り、宮部襄等の郡馬事件生じ、加波山事件、秩父事件、相繼いて生じ、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等、其の間に點綴して、四方に秘密結社の類、計畫せらる。而して後藤象次郎の對韓陰謀破れ、大井憲太郎等の大坂事件に入りて、爰に民權時代の暗潮の一段落を告ぐ。三大事件の建白運動、起るや、政界の暗潮、波を捲いて揚り、遂にクーデターに等しき保安條例の發布を見るに至る。然かも普通の歷史は、其の斯くの如くのみにして、裏面に蘊まれたる驚くべく悲むべき消息に及ぶ者なし。嗚呼、我讀書社會は、外面を說き皮相の歷史を以て足れりとすべき乎。

本書は此の不完全に激して成る者　側面より筆を擧けて、觀察を時代の推移と人物の活動とに加へ、明治初年より憲法發布に至る二十年間の暗潮を擧げて、四百頁の冊子に縮め、之を讀者の前に出さんとす、其の事、恠奇、其の文、靈活、啻に歷史を喜ぶ者の一讀に値するのみならず、亦社會狀態の推移に注意を置ける者の再讀に値す。蓋し明治文壇の一奇書也。昨今東京燒拂の景動に驚ける世人は、本書に就て動亂の來る因由を探れ、本書は、斯くの如き案調に對して、靜かに警戒と教訓を與へつゝ有り、敢て江湖に推薦す。

發行所　東京本鄉區西片町　反省社



（次號）

中央公論

二百號

▲第二十年第十一號は二百號に達せるを以つて紀念として紙數を倍加し、釘裝を美にし、材料を精選し、以つて江湖に見えんとす▲其如何に諸君に滿足を與ふべきかは發賣の上ならでは知るべからざれども、蓋し雜誌界の一大異彩たるべきは編輯同人の誓つて斷言する所也▲略々其内容を示す爲めに今日迄に寄稿を依囑せし名家を左に掲ぐべし（中には題名の既に決定せるもあれど、凡て之を秘す）

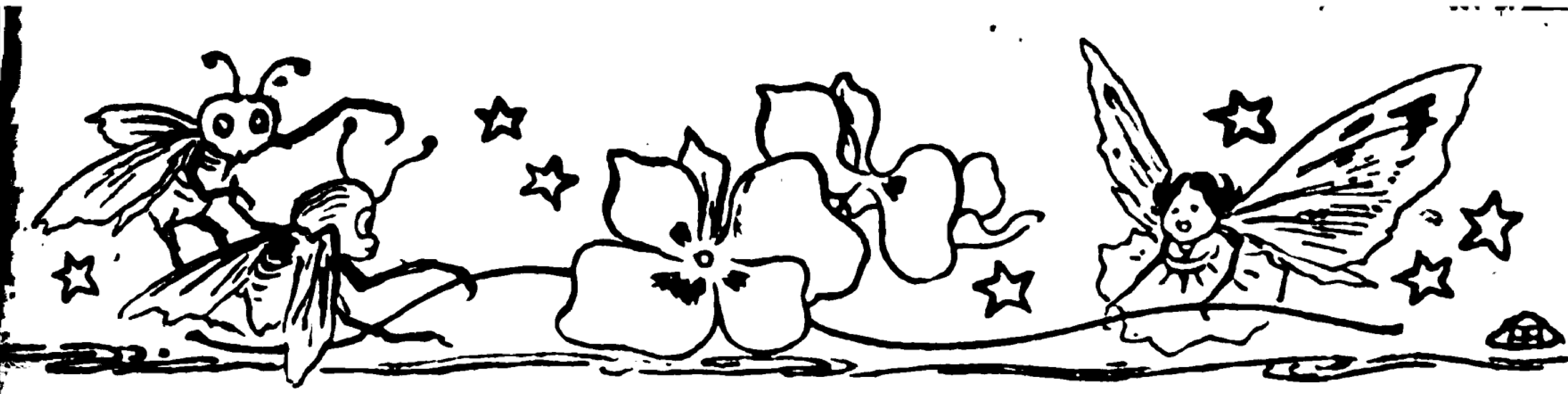
幸田露伴氏（小說）　登張竹風氏（文藝論）
夏目漱石氏（小說）　土井晩翠氏（新體詩）
福本日南氏（外交論）　中村進午氏（外交論）
巖谷小波氏（交際論）　山路愛山氏（題未定）
上田万年氏（敎育論）　上田敏氏（文藝批評）
泉鏡花氏（小說）　高田早苗氏（題未定）
三上參次氏（史談）　山根正次氏（時局談）
綱島梁川氏（隨筆）　中村春雨氏（小說）

其他今日以後依囑すべき名家十餘氏あり

▲二百號は十一月一日發行す▲定價は本號に限り二十六錢郵稅共

▲編輯及び廣告〆切十月十五日

（豫告）



本號目次

中央公論



第二十年
第十號

講和の眞利害

講和問題は我が國民の頭上に掛れる極めてシリアスなる問題なり、故らに政府のために曲庇し、曲護するもの、及び諸種の器略を以て、若くば皮想淺膚の見を以てする者の論議の如きは千言万語と雖も顧みるに足らず、將た一時の激情に由て徒らに悲憤し慷慨すべきものならず、要は冷靜に中外の形勢を洞觀し參照し打算して以て眞利害を判斷するに在り、吾人は暫らく本條約の正文に接するまで卑見を陳述するを控へ、先づ此の極めてシリアスなる問題を解決すべき要點を摘出して、以て江湖君子の研究を促がさんとす

抑も日露戰役は我が官民の意料外に逸したるもの也、初め某博士は二億七千万圓の軍資あらば以て能く戰ふべしと言ひ、某新聞記者は三億圓あらば幾んど足らんと言へりき、蓋し日清戰役の軍資一億九千万圓なりしに徵して斯く計算したるなるべし、彼等は世界の强大國たる露國と戰ふを以て幾んど淸國と戰ふと甚だしき差違無しと思料せる也、僅かに七個師團の陸軍を用ゐたる日清戰役と多くの逕庭あらずと豫想し居たりし也、而して政府者は約八億の資金を要すとし、之を得るに苦心したりといふ、然れども記せよ、我が軍費として内外に募集したる公債のみも既に十二億を超えしにあらずや、既に動かしたる陸軍は幾んど日清戰役の四倍以上ならずや

且つ彼の三國干涉ありし後。我が參謀本部の打算したる處によれば、西伯利亞鐵道全通するも露國陸軍の東亞に輸送し得るもの十五万のみ多きも二十五万に達すると無しとせり、日清役後陸軍經營の十三個師團の

案は實に此の打算に基けり。然れども露國が開戰以來常に戰線に配置せる兵力は二十五万を超え。三十五万を超え、今や實に四十五万に達せり、是啻だ然るのみならんや、奉天役に受けたる損害二十万を補充するよ實に至難なりと認められしに拘らず、爾後五ヶ月ならざるに之を補充したる後。更に大に兵力を增加したり、我が兵力財力の官民の意料外に强大なりしと同時に、露國の東亞に於ける陸軍力も亦豫想以外に出づ、民間者よりも比較的形勢に通曉せる政府者にして、尙ほ斯の如し。況んや彼の博士氏記者氏をや、又況んや此の博士氏記者氏以下の一般民衆をや

而して講和條約も亦甚だしく民衆の意料外に出てたり、曾て海陸軍の連戰連勝に狃れたる我が民衆は『清國よりすら旣に軍費實額以上の償金と臺灣と遼東半島とを得たり　況んや露國よりをや』とて。多くの償金を得、樺太は勿論、沿海州をもまた容易に之を獲べしと豫期したるが如し。然るに事實は僅かに樺太半部を得たるのみ。民衆は多く其の收穫の意料外なりしに驚ろくと共に、彼の多くの記者氏憂世愛國家氏の悲壯淋漓たる言論を聽くに及んで、轉た激越憤慨せり。吾人は實に之を諒とす、然れども此の激越憤慨すべき講和條約は之を破棄すべき乎、之を破棄して更に露國と戰端を啓くべき乎、嗚呼是れ極めてシリアスなる問題ならずや、徒らに政府の皂隷となりて之に佞事するもの、若くば、諸種の器略よりして、若くば皮相淺膚の見を以てするもの丶說を聽きて而して之を決すべけんや

茲に於て吾人は吾人の旣に得たる中外の資料に基づき、左の諸問題を提げて切に江湖君子の研究を俟つ、江湖君子平和條約の本文と參照して之を硏究せば、則ち更らに妙ならん

（第一問）今日は講和の時機なりや否や。

（一）リネウイチ將軍の有する四十五万の兵を擊破し、進んで哈爾賓を略取し、浦鹽斯德を完全に包圍するまでには、三十八個師團の兵を今一ケ年間の日子と軍資約十八億乃至二十億を要すべし

（二）此の大兵と軍資とは我が力能く之を辨すべし、

然れども若し哈爾賓を略取し浦鹽斯徳を攻畧するも、露國尚ほ頑然として降伏せざるが如きとなきや否や、假令何等の手段に由て講和を成立せしむるも彼れ我が費したる三十億乃至三十五億の軍費を賠償せざるが如きと無きや否や

(三)露國果して哈爾賓と浦鹽斯徳とを失はゞ、其の國内の革命運動彌よ激烈となり、其の皇位或は簒奪を見るとなきも亦測る可らず。但し是れ未知數なり、假令既知數なりとするも、彼れ斯の如くならば、我れ誰と交渉して軍資賠償を得るや、

(四)露國滅亡せば、我れ啻だ沿海州のみならず、西伯利亞全部を占有するとも亦甚だ難からざるべし、但だ知らず日本忽然として斯く膨脹せば、歐洲列國果して之を默止すべきや否や

(五)我れ西伯利亞の大部又は全部を故障なく領有するとしても、既に三十五億以上の軍費を負擔したる上、果して十分に之を經營すべき資力ありや否や

(六)今日講和すれば、我が軍隊引上の費用を併せて約二十億圓にて事足らん、若し更らに續戰せば、向ふ一ヶ年の後には我が費す所實に三十八億乃至四十億圓となるべし、和戰の利害果して如何

(七)向ふ一ヶ年間更らに續戰して三十八億乃至四十億圓を費したる後、我が滿韓經營及び戰後諸般の經營果して如何

(八)今勉強して講和を成立せしめ、列國の同情を得たるに乘じて韓國に於ける我が保護權を十分に行使して以て牢乎たる基礎を立て、併せて滿洲開放前、清國と協商して我が優越なる利權を得ると、更に戰爭を繼續して、頗ぶる列國の畏怖と多少の嫉妬とを來したる時に、之を爲すと其の便否及び利害果して孰れぞや

(第二問)講和せざる時、列國の向背如何

(一)米國大統領講和の仲介者となり、而して大統領の背後に獨逸帝あり、英佛兩國亦暗に之を幇助せるに拘らず、講和條約成立せざる時、列國の形勢

如何に趨向すべきや

(二)獨逸帝がバルチック海巡航の序を以て突然露帝と會見したるは、日本に取て果して不利の兆候ならざりしや否や

(三)講和談判を破るもの日露孰れなるにせよ、之を列國會議に附するが如き事絶無なりしと做すべきや否や

(四)我が同盟國たる英國は、斯る場合に於て其の歐洲政略の必要より枉げて列國會議に賛成するとなきや否や

(五)若し日露の講和を列國會議に附せられたる場合には、其の決定の條件果して小村ウイッテ　間の協定以上なるべきや否や、現に韓國問題の如き十分に我が保護監督權を認めしめ得るや否や

吾人は尚ほ江湖君子が講和條件の大體をも公平に觀察せんことを促がす、蓋し此の條件を政府に佞事するものゝ如く過大に計量する斷じて非也、同時に過小に計量するも亦齊しく不可也、吾人は猶ほ秤器の如く公平に其の眞分量を示さゞる可らず

僅かに樺太の南半部を得たるが如きは洵に拙也、而して又餘りに名譽にもあらず、且つ軍費の幾分をも補還せしめざりしも、亦外交上巧手と稱する能はず、隨つて之に不滿足なるは恐らくば天下萬衆の異言なき處なるべし、然れども世の論者の如く之を千古の屈辱と稱する理由は如何

大體に就ていへば、既に占領せるアレキサンドロフ、ルイコフを併せて北樺太を露國に返還せしは。幾んど樺太軍の戰功の一半を無にしたるもの也、然れども滿洲軍の戰果に至ては能く之を失墜せざるを得たりと謂はざる可らず、旅順は大連灣を我が有とし、長春以南の東清鐵道を我に領有し、露國をして其の殘有せる東清鐵道を軍用に供せざるを約せしめたるが如きは、戰前に於ける我が滿韓問題の主張を貫徹したる外、露國の東亞に對する大野心の一半を取挫ぎたるもの也、彼が東洋に於ける唯一の不凍港を奪ひ、其の重要なる策源地を顛覆して、再び之を浦鹽斯德に追籠めたる也、

而して是れ皆忠勇なる我が海陸軍將士の賜也、我が外交頗ぶる幼弱拙劣なるも幸ひにして此等戰果を失ふには至らざりき、故に我が外交の拙劣なるを攻撃して其の條件を不滿足なりとするは當れり、之がため海陸軍の戰果を無にしたるが如くに言做し、甚だしきは忠烈なる戰死者を以て犬死したるものと做すが如きは、全く僻論也、其の意茲にあらざるも其の言や幾んど我が軍人を誣ゆるものと爲すも過言にはあらず

我政海の思潮

戰勝國たる我が日本の首都には、人民を斬殺する警察官出で、官署を襲撃し放火する人民出で、竟に臨戰地又は包圍地に適用すべき戒嚴令の發布を觀るに至れり、海陸軍外に在て連戰連勝し、講和條約亦調印されしと同時に、其の本國の首都は却つて臨戰地か若くは敵軍に包圍されたる場所と急變せし也、奇なる哉、而して又陋する哉、世人動もすれば講和條約を以て千古の屈辱とす、奚ぞ知らん、是れ却つて千古の汚辱なることを

吾人に不幸にして身自から此の狀態を目擊し轉た慨嘆に耐えざるものあり、熟々其の根本を案ずるに、是れ我が政海の思潮の極めて不健全なる反映也、詳かにいへば、官民共に未だ立憲政治の本義に通ぜず、所謂立憲的精神乏しくして、非立憲思想の尙ほ全く擺脫せざるの致す所也

第一紛擾の發端たりし八月五日の國民大會に對し、警察は其の四日夜半を以て禁止の命令を發したり、

政略上よりいへば斯く命令せるは強ひて民論を抑へんとする愚策にして、其の精神や實に輕々しく言論の自由に檢束を加へんとする也、首都警察の任に在る者の措置としては幾んど愚ろくに耐へたり、而かも法律上よりいへば此の命令は適法なり、然るに國民大會の發起者會衆等は、此の適法の命令を無視して強ひて其の大會を開けり、是れ法令を犯せる不法行爲也、眞に立憲の本義を解するもの何ぞ斯の如くなる可けんや、立憲の要は官民共に國法の範圍を嚴守して敢て或は之

を侵犯せざるに在り、警察の命令詢に非立憲的ならば、之を彈劾し之を矯正せしむる自から其の道あり、之を無視し之を侵犯するに至ては、是れ暴を以て暴に代る也、否、範疇を浸越したる也、寧ろ非立憲の甚だしきもの也

警察も亦此の禁止を破りたる國民大會の發起人會衆を命令違犯者として檢擧し、相當の司法處分に附するを當然とす、事玆に出でず、却つて公衆の悠遊すべき公園を閉塞して滿都の市民を駭かし、事を解せざるものをして徒らに其の壓制を憤慨せしむ、是れ法によりて爲すべきを爲さずして、便宜上爲す可らざるを爲せし也、亦自から法を重んぜざる非擧たるを免かれず、而して官民共に立憲の本義に外れたるは一也

第二警察官は何故に先づ内務大臣官邸前に於て人を斬りたるや、紛々たる群衆が官邸に木石を投じて頗ぶる危險なりしは事實なるべし、彼等が老人青年者若くば婦女子の背後に出沒して盛に木石を投じ、老人青年者若くば婦女子をして時に木石を投ぜしめたるも亦恐らくは事實なるべし、然れども此の場合に於て警察官は何故に斯る暴行の卑劣にして不法なることを說かざりしや、何故に老人青年者若くは婦女子に諭すに斯る危險界を立去るべきことを以てせざりしや、群衆中時に演說して他を激昂し教唆したるものあり、警察官獨り此の說諭を爲し得ざるの理はあらじ、然るに劍を揮つて群衆中に飛び入り、少からざるの人民を殺傷して、眞の暴徒に則ち却て之を逸したり、而して滿都の士民をして惴々焉として警察官を恐怖し憎惡せしむ、其の非曲幾んど言語に絕せりと謂べし

第三市民が警察官の過激なる措置と人民を殺傷せることを憤慨する實に當然のみ、然れども憤慨の極、官署を襲擊し放火するを是認するの理はあらず、官署を襲擊し放火するが如きは、兇徒の所爲にして良民の爲すべき所に非ざれば也、果して襲擊者放火者は、不良の博徒無賴漢と惡書生にして、青年客氣紛騷を好むもの之に雷同したるのみ、良民は一人ても與からず、然るに多くの新聞紙は幾んど一齊に此の襲擊者放火者を志

士といひ、國民公憤の發する所全く當然の處置なりとせり、甚だしい哉新聞紙の輕卒なるや、夫れ新聞紙は總ての場合に於て理非曲直を明斷し、醇良平正なる議論を以て國民を指導せざる可らず、國民如何に憤慨するも、之を善良なる方向に指導して敢て官署を襲擊し放火するが如き犯罪行爲を曲庇す可らず、随て紛擾の場合に在ても、能く其の眞相を看破するの明斷あるを要す、何事ぞ却て博徒無賴漢惡書生を志士といひ、青年客氣紛騷を好むものを以て國民の公憤者と做せるや、政府に佞事して曲辯至らざるなきもの素より卑むべしと雖も、理非曲直を忘れて亂民に媚ぶるもの亦吾人の與せざる所也、而して是れ亦憲政智見に於て缺くる所あるの一證ならずんばあらず、

第四新聞紙中尙ほ立憲責任の本義を解せざるものあり、此の紛擾に關して警視總監の依願免官となるや、二三の新聞紙は曰く『警視總監責任あり、宜しく懲戒免官とすべし、依願免官と爲すは責任を曖昧にするなり』と、然れども思へ、懲戒免官とせんには文官分限令によりて懲戒委員の裁判に附せざる可らず、而して斯る場合には文官分限令の法文は如何に之を決定せしむべきや、法律問題として懲戒委員の裁判に附する結果や知るべきのみ、寧ろ之を政治問題として全然更迭するに如かず、即ち總監をして任意に責任を引きて任意に辭職せしむること寧ろ責任を明かにする所以なりとす、二三の新聞紙未だ之を解せず、畢竟ずるに法律問題と政治問題とを混同せしのみ

第五警察官既に威信を失墜して首都の治安を維持するに足らずとせば、軍隊の助力を求むると亦已むを得ずとせざる可らず、既に軍隊をして治安維持の任に當らしむる以上、戒嚴令の發布また餘儀なしと諦めざる可らず、若し之を否定せば、今の警察の威信尙ほ能く首都の治安を保持するに足るの事實を認めざるを得ざれば也、然れども戒嚴令に由て新聞紙の發行を停止するや、其の措置果して公平なるや否や疑はしきものあり、事實を擧ぐれば、新聞紙の調子の激昂せる時事新報、東京朝日新聞(及び大阪朝日新聞)萬朝報、報知新

聞、二六新報、都新等皆同一程度にあり、少くも萬朝報、二六、報知の三新聞は軒輊す可らざる間にありき、然るに當局の先づ發行を停止せるは萬朝報、二六、都のみ、朝日は遲れて停止されたるも時事は報知と共に全く免れ首相桂氏が民衆を惡傾向に煽動せる證據物として提示せる大阪朝日新聞の如きも却つて後に至て停止されたり、法を秉ると果して公正なりといふべき乎、或は曰ふ、行政處分には手心を要すと、吾人亦之を認む、而も同一調子の新聞紙にして甲には停止を命じ、乙には然らず、知らず以て何の手心ぞや、其れ新聞紙の發行停止は、新聞紙存廢の大問題也、其の刑罰の性質たる實に重大也、之を用ふる豈公不公ある可けんや、之あるは則ち立憲の本義に反す、立憲政治は法治政治にして、法の實施には素より厚薄寛嚴の差違ある可らざれば也

我が官民の立憲政治に慣熟せざる實に斯の如し、思想淺薄なる政客記者等毎事他を呼ぶに非立憲を以てして却て自家の非立憲を悟らず、而して官民動もすれば相凌轢し相紛爭す、嘆ずべき哉

男女學生交際論

文學博士　三宅雄次郎

男女學生の交際が善いか惡いかといふことは一概にはいへぬ。其人の性質にもより、其家庭にもより、又後に就くべき職業にもよる。生れ付自然に取締のつく樣なのがあるが、これ等は先づ害を受けぬ方である。家庭も自然に取締のついて居る所もあるが、さういふ所ではさう多くの害を受けぬ。又職業の中でも人氣商買といふので裏口から這入り込むといふのがあるが、さういふのは餘り六つかしいとよりは男女相對して自由に話の出來るといふのが都合のよいことがある。素より一概にはいへず、又必ず總て斯くなければならぬといふ事はいけぬが、全體の上で男女學生の交際を奬勵すべきであるかどうかといふに、奬勵せぬが當然である。世の進むと共に成熟の期が遲くなるべきである。身體の成熟の期に大いなる差がないとしても其腦力の成熟に著しい違ひが起る。朝鮮では男が十三四て女を娶るのは珍らしくない、他の男は己れの然るを得ざるを耻とするのである。彼等が子供の時に怜悧人を驚か

すのであるのに年老る程愚になるといふのはいろ〳〵の事情もあるのであるが、先づ早く成人するといふのが其主なる原因である。

我國で學生の年齢は高くて二十五である、其れ以上三十位で學生になつて居るものもあるが此等は境遇の爲めであつて順當のものではない。又學制が今一層整へば年齢が今少しく下るのであらう。其れ位の年齢は己れ一身の修養に專らであつてよいのである。素より修養というてもたゞ書物を讀み、器械をあつかふといふことと丈けではない、成る丈け人格を圓滿に發達せしむる素を作るのであつて交際振りなども心得べきである。併し男同志の交際もさう輕々しいものではない。男同志で交つて砌磋琢磨するといふのが主となつてよい。女性に就ては家庭の姉妹、又は親族の間で止まつて差支ない。女學生と交際するなどゝいふことは餘計の事である。未だ男學生との交際をも全うするに足らずして女學生と交際すべきではない。併し人に種類があつて獨立經營して如何なる困難をも自分で排して進まうといふのもあるし、又何か有力なるものにからみついて世を渡て行かうといふのもある。松の一本立に蔦のからまつて居る樣なものである。一本立に立つには成る丈け意志の強くなるやうにすべきである、脇目も振らず自分の目的とする所に向ふのはよいのであるが、有力者にからみついて行かふといふのにはさう骨節が堅くては圓く行かぬことがある。却て女らしく柔順におとなしく見えるのがよい事がある。こういふのは女子供を相手にして居る方が便利を得る。男性の中にも男性もあり、又女性に類するもあり、否な殆ど女性と選ぶなきのもある。柔かいのは柔かいのとして見て行ても妨げない。

以上は皆男學生のことについてゞあるが、女學生の方ではどうかといふに之れ一層注意すべきである。女學生は皆割合に年が若い、又物心も充分について居らぬ。近頃男學生と交際をするといふのに十五六、七八といふのも隨分ある、こういふのは小説を見て面白いことに思うて或男とつきあひ初めて有頂天になることがある。併し分別がないのであつて少しく經つと變らねばならぬ樣になつて來る、幾人かの男と交際して後に隨分立場に困しむ樣になつて居るのもある。かういふのは成る丈け取締るべきである。

男にしても女にしても最早や學生時期を過ぎた後は婚姻に先つて多少の交際あるもよい、婚姻のことは二

人丈の間のことで親にも關係のないといふ事は決してあり得べからざることであるが、さう不都合の生ずる恐がなければどれ丈けか交際して置く方がよい、隨分交際して結婚後に不和の多いのもあるが是れ其人の責である、最早や自ら其責を負ふべきである。たゞ學生の間は男女交際を奬勵せざるに若くはない。或者は交際の爲めに益して居るといふがさういふものは制しても自然に出來るわけである、さういふものが都合よいというて一般を推すことは出來ぬ。

素より男女學生の交際といふことは我國丈けで問題となつて居る譯ではない、色情に關することを早くより知らすのはよいか、わるいかといふことは他の國々でも問題になつて居る。子供にバイブルを讀まさぬものがある、其理由は之を讀ますと手淫を促すといふのである。バイブルの始めから男女の交際のことがあるからさういふ弊害を醸すのを憂へて居るのである。獨逸では十六七になつても男女の關係に就て知る所なく、子供の生るゝのを鶴が子供を置いてゆくのであると信じ、子供が生るゝと今日鶴が置いて行たというて居るものがある。是れ嚴格に此類のことを知らしめぬからであつて其得失についてはいろ／＼の議論がある。こういふことではいかぬからもつと早く知らす方がよいといふのもあるが、知らしたとて何の益もない、後に自然と明かになるのであるといふものもある。こういふことは議論をすると直ぐに一方に偏しやうとするのである。たゞ其弊のあらはるゝ場合に成る丈け之を制する樣にして行けばそれでよいのである。男女學生の交際についても其理毫も異る所ないのである。（文責在記者）

暗示の社會に及ぼす影響（中）

文學士　福來友吉

既に論じたる通り觀念は力である、併ながら此力は觀念に向つて三昧に入つて始めて實現するのである、觀念三昧に入りさへすれば各々の觀念は夫れ相當に其力を實現するものである、それであるからして今一人に一定の觀念を與へて、さうして此觀念が彼の精神に於て三昧の對象となつた場合には此觀念は其固有の力を實現して、彼の精神身體に變動を與ふるものである、此の如く三昧の對象として受取らるゝやうに與へられ

たる觀念を暗示といふのである、例へば基督が病人を捉へてお前の病ひは最早治る、斯く言はれたならば忽にしてその病ひが治つたといふ話である、又釋迦牟尼佛が恐ろしき腫物の爲に非常に苦んで居る所の大惡人の阿闍世王といふ人に說法されたら忽ちにして其身體の苦痛が消えて仕舞つたといふ話がある、是は全く此二大偉人が言はれたる所の言葉が、此言葉を與へられたる所の人の精神中に入込んで、さうして其人が此言葉に對して三昧狀態に入つた結果として此の如き實現力を現はしたのである、催眠術を人に罹けて置いて、汝の手がもう動かぬと斯う言つたならば忽ち手が動かぬやうになる、眼が見えぬやうになると斯う言へば忽にして眼が見えぬやうになる、斯ういふことを皆暗示といふのである

さうして此暗示といふものが如何程實現するかといふに、其程度は次の三つの條件に依つて變化するのである。第一は暗示者が暗示を與ふる技術の巧拙といふことである、同じ暗示であつてもその物を上手に與ふることゝ下手に與ふることに依つて大變利き目が違ふ、言換へて見れば與へ方に依つて其暗示が與へられたる人の三昧の對象となることがあり、ならないことがある、お前の病ひは治るのであると斯う言ふことを、十分なる確信と、十分嚴格なる態度と、確然たる語調を以て言ひ聽かしたならば隨分治ることがあるけれどもが、心に確信なく言葉に力なく、輕卒に與へたならば却て病人は一笑に附し去つて少しも其の觀念を三昧の對象とすることがないのである、是は全く暗示といふものを與ふることの巧拙に在るのである、第二は被暗示者の暗示者に對する信仰の程度といふことである、是は大變な關係がある、既にも申したる通り同じ藥でも藪醫者の藥は利き目がなく、大家の盛つた藥は利き目があるといふのは其藥の利き目に違ふのではない、詰り藪醫者などは病人から信仰を受けて居ない、之に反して博士とか何とかいふ大家といふものは病人から十分の信仰を得て居る、それで藥が早く利く、即ち暗示の力は暗示を與へられたる人が暗示者を信仰するとせぬとに依つて定まる、基督や釋迦が暗示で人の病を治すなどゝいふのは全くあれ程の人物であるからして、人の信用を絕對的に惹起した結果であると考へます、第三は被暗示者の精神狀態に依

つて定めるのである、同じ事を言つて聞かせるも其人の精神狀態に依つて利くことがある、利かぬことがある、例へば衣食住も滿足、社會に立つて居ることも滿足て、何等の苦悶もない所の人に宗教を說いた所が存外說教といふものは身に浸まぬのである、けれども何か自分に思ふやうにならぬことがあつて、失望落膽して居る時に當つて宗教の說教をしたならば、非常に其宗教の說教といふものは彼に力を與へて彼の精神を動かすことが出來る、全く是は平生は氣が高いものであるから、こちらの言つたことを十分受取らいのである、それが今失望落膽して救ふ者がない時にはこちらの言ふことを聞くのである、即ち被暗示者の精神の持ち方に依つて暗示の利くことゝ利かないことがある、

催眠術

などでも同じ人が同じ人に催眠術を罹けるときにも、矢張り利くことゝ利かないとがある、唯催眠術を面白半分に罹けて見た時にはなかなか罹からぬものであるが、愈々其人が病氣でもして困て、どうしても催眠術を施して貰はなければならぬと云つて十分催眠術に身を任して來ると容易に罹るとがある、是は全く平生は高慢であつて、催眠術といふものに對して十分の信仰を持たない結果である、それであるから同じ暗示であつても其受ける人の精神の持ち方に依つて働くことゝ働かぬことがある先づ大體此三つの條件に依つて變化するのである、彼の催眠といふものは畢竟するに彼暗示者が暗示を最も能く受取る所の精神狀態の一つに過ぎないのである。

右のやうな譯でありますからして暗示といふものが吾人の精神、身體の上に如何程大なる影響を及ぼすかといふことは略ぼ明かであると考へます、果して然らば暗示といふものが社會の上に及ぼす影響の大なることも推して知ることが出來る筈である、なぜと云つたならば元來社會といふものは多數人間の集つた所なのである、社會現象といふとは畢竟ずるに多數の人の精神に於ける現象に過ぎないのである、所が一個人の上に暗示が働く以上は其一個人が澤山集つたのが社會であるからして、社會の上にも暗示の働くといふのは別段不思議とするに足らぬとである、詰り社會に於ける暗示といふものは一個人の暗示が社會の澤山の人に弘がつたといふ丈けに過ぎないので、理窟から言つて見たならば一個人の暗示も社會に對する暗示も異なる所はないのである、けれども先づ便利の爲めに私は社會

一般の上に廣く行はれる所の暗示を名けて社會暗示といふのであります、

社會暗示

といふものゝ實例はこれはまだ私は十分研究して居ないことであるからして、面白い實例を擧げることは出來ないのであるが、個人の暗示をば研究する傍らチョイ／＼是まで記憶して居つた所の幾つかを擧げて、如何程社會暗示といふものゝ影響があるかといふことを述べる積りであります。

先づ何人も熟知する所の一例を擧げたならば

藤村操の話

てある、青年者藤村操といふものは如何なる苦悶の爲めに精神が亂れたのであるか知らぬけれども、世の中の人の記憶する通り巖頭の感と稱する一文を遺して華嚴の瀧底に沈んで仕舞つたのである、自殺としては借金の爲めに首の廻らぬやうになるとか、或は想ふ意中の人と夫婦になることが出來ないなどゝいふ怨を遺して死んだよりも甚だ表面上立派なる自殺である此事柄が一度び世間に喧傳せらるゝや否や他の青年者も之に倣ふ者が頻々として出て來たものである、是は全く一藤村の自殺が暗示となつて他の青年者を動かしたものと云はなければならぬのである、通常之を自殺の傳染といふものである、自殺の傳染といふことは社會學者の屢々統計上から論ずることて、隨分外國などにも多いことであるが、藤村操の自殺あつて此方幾人となく青年者の華嚴の瀧に死ぬものを出したといふのは即ち自殺の傳染の中の一例と云つて宜からうと信ずるのてあります、それであるからして一人の自殺者あつた場合、殊に其自殺が社會の注目を惹くやうなことてあつた場合に於ては、是が社會暗示として他の人を同樣なる自殺に導く所の暗示となることがあるのであるからして、當局者は此傳染を豫防する爲め相當の手段を執らなければならぬのである、例へば其方法といふのは外ではないが、自殺の事實を隱蔽して社會に發表せぬやうにするとか、若し已むを得ずしてそれを發表した場合には其不心得あることを論じて他の人の之に倣はざるやうに戒むるといふのが其一方法と考へる、然るに之に反して其自殺をば社會に向つて發表するのみならず、更に之を潤色賞揚するやうなことがあるに至つては、其傳染からして社會の青年者を誤まらせることは愈々多からうと考へるのである、藤村操の場合に於ては或新聞雑誌の如きは盛に之を修飾して天下に發

表し、青年哲學者などゝいふ名前を附けて彼をば大に賞揚したのである、自殺傳染が意外に多かつたといふのは其一部分の責任は新聞雜誌が修飾賞揚したることに歸するであらうと考へる、或新聞の如きは他人の自殺を眞似するやうな馬鹿はないからして如何程之を言論しても差支ないと云つて自分の言論を辯護して居つた、併ながら是は精神の作用を理解せざる所の愚論であると考へる、一體

◎模◎擬◎性

といふものは暗示の原理から起つたる所の精神の根本的性質である、實に人の行爲の大部分といふ者は他人の模擬から起る者であるそれであるからして人は何か其心に感じたる他人の行動を見た場合に於ては、如何なる者であつても之を模擬せんとする傾向を持つて居るのである、思想意思の固定せざる小兒、青年等に於ては殊に其傾がある、故に青年者殊に苦悶ある所の青年者といふものは他人の自殺を模擬するの傾向を持つて居るのである、勿論其青年者はあの人が既に此通り死んだのである、自分も之に倣ふて死んで見やうなどゝいふやうな冷かな意思の作用に依つて自殺を模擬するやうな馬鹿は恐くなからうと思ふ、此點に於ては私は某新聞の論と一致して居るのである、併ながら模擬といふものは必ずしも右の如き冷かなる意思の作用ばかりから起るものでないといふことに注意せねばならぬのである、精神には無意的模擬と言つて意志の決定を經ずして、現はる模擬がある。此無意的模擬といふものが大變社會暗示の勢力に大なる關係を持つて居るのである、寧ろ數の上から言つたならば有意的模擬即ち冷かなる意思の作用に依つて自覺的に現はるゝ模擬よりも多いであらうと信ずるのであります、殊に小兒、青年などの生活に於てはさうなのである、他人の自殺の暗示に依つて自殺しやうといふ誘惑的傾向が彼の精神を襲ひ來つて、さうして意思の力に依つて到底之を制止することの出來ないといふことは隨分青年家に多いことである、ゼームスといふ心理學者が次のやうなことを言つて居る「自分が大學に通學して居る頃或一人の學生が學校の二階の上り口の窓からして投身して命の危さまで怪我したことがあつた、所が私の友人のもう一人の書生が毎日自分の部屋から出入する際右の窓の側を通行して居つたのであるが、一日突然として自分もあの學生のやうに此處からして投身しやうといふ恐ろしき誘惑を感じたのである、併し其學生はカソリック宗旨の

信徒てあつたからして、此事を其監督者に告げて相談した所が、其時に機智に富んで居る所の監督者は宜しい、投身せねばならぬならば仕方がないから早く投身せよ」と言つた所が、是きりで其學生の投身したいといふ誘惑は止つて仕舞つたのである、實に此監督者は病的精神を治療する方法を知つて居つた者である」、と斯ふ言つて居る。是は全く他人の自殺に暗示されて發動した所の自殺の模擬的慾望である、さうして此模擬といふとが當人の意思に反對して强迫的に發作したといふことは明かである、即ち自分の意思に反對して居ればこそ其事に付て監督者に相談したのである、固より自分の意思に依つて極めたことならば監督者に相談する必要もないが、どうかしてそれを免れたいと思ふけれども、其誘惑が出て來て抑へ切れぬ所から監督者に相談した所が、うまく監督者が救つて吳れたのである、此誘惑は無意的模擬であります、此の如き模擬といふものは青年者に甚だ多いことであつて、社會の自殺傳染の現象として現はれることである、私が一人の自殺が他の人の自殺に影響するといふのは全く斯ういふ理窟から云ふことである、成程世の中に冷かなる心を以て他人の自殺を眞似するやうな馬鹿はなからうけれども、如何に意思に依つて抵抗せんとするも抵抗すべからざる誘惑的模擬の作用が起るとであるから、青年者の自殺などを賞め立てゝ世の中に書現はすといふのは隨意注意せねばならぬことゝ思ふのであります

又此暗示に因る自殺の傳染として更に論ずべきは、彼の能くある**首縊松**であるとか川の神の招きなどゝいふ現象である、地方に行く時には能くあることである、この川で昔から能く人が死ぬとか、或は此松の木で能く人が首縊つて死ぬなどゝ云つて、さういふものが能くあることである、是等は矢張り自殺の誘惑的傳染であつて、時としては世の中に生きて居れないやうな耻でも曝して、それが爲めに死ぬやうな者も中にはあるだらうけれども、又中には唯單に此川で誰某が死んだ、此松で誰某が首を縊つて死んだといふことが心に浮ぶや否や、其觀念が暗示となつて其人が思はず識らず川に身を投げさしたり、首を縊らしたりする現象を惹起すのであります、例へば茲に一つの松の木がある、其處へ誰かゞ何か世の中に立てないやうな事をして、或は又色情の爲めに狂人になつて其松で首を縊つたとするさうして其處で

首を縊つたといふことが一時世間に弘まつて、彼處で誰某が首を縊つたといふことが評判になつて世間一般に弘まるといふと、其評判が暗示となつて隨分其松で他の人を首縊らせるのである、世間では何か其松に一種の幽靈でも居つて其人を招くなどといふけれども、決してさういふ譯ではない、幽靈の爲めではない、全く其松で首を縊つたといふ評判が暗示となつて人をして身を誤まらせるのである、是は高島君の心理學講話にあつた話で、一寸面白い。それはこふである。昔水道橋に首縊松といふものがあつて度々其松で首縊りがあつていけない所から其枝をば切下ろして仕舞つたことがある、所が又其隣枝に首を縊る者があるので其枝をも切つて仕舞つたが、又其次の枝に行つて首を縊るといふので、とう〳〵一本の木をまるで坊主にして仕舞つたのである、さうすると又其隣の松の木に行つて首を縊る者があつて役人も大に處置に困つたといふことてある。是は全く暗示現象である、最初何人かゞ此一つの松で首を縊ることがあれば、此事が世間の噂となつて人の心を刺戟する、さうすると何か世の中に不如意の事があつて悲觀的精神となつた人が此噂を聞いて首縊りのことを精神に想ひ浮べる、最初は單純に精神に想ひ浮べただけであらうけれども、其精神に想ひ浮べて居る中にヒョットした加減で此觀念が三昧の對象となつて竟に其人をして何もかもスッカリ忘却して首縊りの行ひを得さしむる本となることがある、此の如き有樣で先づ第二の人が同一の松で首を縊つたとするといふと、更にそこで又松の木の噂が高くなつて來る、あの松の木はどうしても首縊松で何か昔死んだ人の幽靈でも居つて人を呼ぶのであらうといふ迷信的の解釋でも附くといふと、益々世の中が此松に付て不思議を懷く、不思議を懷けば懷く程其觀念が暗示として力が強くなつて來る、さういふ鹽梅で段々と同じ松で首を縊つて死ぬやうになつて來るのである、それてあるから其松で首を縊る者の中には世の中をつまらぬと思つて首を縊る者もあるであらうけれども、餘り世の中の評判が強くなつて來るといふと終ひには別段心に不平といふやうなものもなくても、丁度私が前にゼームスの話を申上げたアノ書生のやうなもので死ぬといふことは惡いと知りつつも暗示の爲めに誘惑されて不本意ながら死ぬといふやうなことがあるのである、もうさうなつて來ると其誘惑が非常に強い力を持つて來て、到底それに抵抗することが出來なくなつて來るの

てある、尙ほ是等は珍しくないのであるが、更に甚しくなつて來るといふと、右の誘惑的暗示といふものが原動力となつて種々雜多の

幻覺

までも喚起するに至ることがある、さうして其幻覺が當人を誘惑して自殺に至らしめるやうなことがある、例へば是まで能く人が身を投げて死ぬといふ其川の側を通行する人が男子であるとしたならば、非常なる美人が水中に現はれて來て或は音樂を奏し或は手招きするといふやうなことが幻視に現はれて其男を水の中に引込む、又女子であつたならば非常なる美男子が現はれて其女を手招きするといふやうな幻覺が起つて其人を水中に引入れるのである、然らばどういふ理由に依つて其暗示が斯ういふ幻覺までも惹起して人を水の中に呼込むかといふに、其説明は此處では致しませぬ、其説明は別問題として兎角さういふことがある、だからして今は其説明は略して單に斯ういふ事實だけを擧げたいと思ふ、私が幼少の頃母方の祖父より聞いた話であるが、祖父が幼少の頃、飛彈國吉城郡高原村（祖父の里）に昔より能く人の投身する所として言傳へられて居つた（川名は失念せり）川があつた、或時一人の男が用事あつて其村から一里程隔つて居る船津といふ町に行つたことがある、其家を出る時は別段異狀はなかつたのであるけれども、其途中より顏附が常と變り、途中にて知人から挨拶されてもそれに耳を傾けず傍目も觸らずして一心不亂に道を歩んで行つたのである、さうして既に町に到つて用事を終るや否や又一心不亂に歸り道に就いて、さうして既にして右の川端に到るや如何なる心を生ぜしか知らぬが、衣服も脱がす其儘水の中に飛込んで仕舞つたのである、斯くて一命も旣に危い所を他人に見附かつて助かつたのである、後に至つてどういふ譯であの河の中に飛込んだか、其時の心持はどうであつたかと人に問はれた時に、彼の答ふるのには、船津に行かんとする途中右の川の傍らを通り掛けた所が、何者とも知らず水中から聲があつて私を呼留めてお前を長いこと待つて居る、早く玆に來れと言つたである、其時彼が答へて、今は用事あつて船津に行く途中であるからお前の傍に行くことは出來ぬと言ふと、水中の聲が然らば用事を終つて一刻も早く來れといふことが聞へたのである、此言葉を聽くや否や、彼の精神は全く此言葉の誘惑に依つて占領されたのである、即ち彼の精神は此誘引的の言葉に向つ

て三昧の狀態に入つて、用事を終るや否や出來るだけ速に水に入らねばならぬといふことを考へ、家族のこと、生命のこと、朋友のことに付ては毛頭も心に思ひ浮ばなかつた、此の如き譯で彼は船津に到つて用事を終るや否や直ちに投身した次第だといふ話である、此事があつて以來、右の川にはどうしても川の神でも居つて人を呼込むに相違ないといふことで、其後身を投げた者が大に增加したといふ話である

此の如く總て人が自分の一命を失ふなどゝいふやうなことは尋常一樣の話で出來るものでない、然るに一旦松で首を縊るとか、川に身を投げるとかして、誰かゞ死んでそれから評判が立つといふと、それが暗示となつて其所で人が一命を失ふ者が多いといふ所から考へて見ると、如何に暗示といふものが社會の上に甚しき影響を及ぼすものであるかといふことは略ぼ分らうと思ふ

（次號完結）

電車の聯絡輸送問題

文學士　樋口秀雄

東京市内交通機關の主力たる電氣鐵道を營業とせる三大會社に於て、乘客の聯絡輸送を開始せむの議當時事者間に起れりと聞く、電車の賃錢共通は市民の便益たるは勿論、同時に電鐵營業者の市民に對する責務にして、又一層多數の乘客を吸收し得るが上に、競爭の必要上、市の交通上には無用なる、若くは必要少き線路の增設より來るべき煩と費用とを節約し得る點に於て、却て當業者の利益たるべきは吾人の信ずる所なり。尤も當業者の利益如何に關しては、屢異論を聞く所なるを以て、之に關する意見を先づ開陳すること議論の順序なれども、當業者間に既に此議ある今日、その必要を見ざるが故に姑く之を措き、實行難の中心なりと傳へらるゝ賃錢分配及之に對する切符制に就て論ぜんとす。

此問題に關して硏究するに當り第一に決定せざるべからざるは共通（切符）制に依るか聯絡（切符）制に依るかの問題なりとす。爰に共通（切符）制と稱するは三會社（現在にては）が協同して同一の切符を發行し乘客が何れか一會社の線路のみを利用せし場合と、二會社の線路を利用せし場合と、三會社の線路を凡て利用せし場合とを問はず、各會社の收入を擧げて共同の收益金と見做して之を三社に分配する方法を云ひ、

聯絡(切符)制とは、之に反して、各社各その專用切符を發賣し、乘客が他會社の線に移乘せんとするに當りて之に聯絡切符を交付する方法を云ふなり。されば共通制は各會社はその獨特の收益即ち自己の線路內にて乘降せる乘客より得たる賃錢も、三社中の二社のみに屬すべき收益も、併せて共同の收益として計上するものにして、聯絡制は此等の部分的特權を保留して、之に對する報酬を得しむるものと云ふ可し。

當眼の電車聯絡輸送の場合に於て、共通制を採用するより來るべき利便は切符發賣及び使用の簡易なる點にあり、然れども、之に反して、その賃錢分配の公平なる方法を見出づる事は極めて困難なり。勿論乘客に取りては降車の際に於て、特に乘客雜沓の場合に於ては共通制は聯絡制に比して利便多かるは明なれど、たとひ市內の共通機關としてその通路を使用する以上、公共的性質を帶べる電車鐵道なりとは云へ、元來營利を目的とせる私設會社の營業なるが故に、その營業者の利便の爲には多少の不便は之を忍ぶを以て當然とす、而して營業者の側より觀察するときは、切符發賣の手數の如きは、云ふに足らざる所にして、自己の獨特の收益權を保留するを以て主眼とせざる可からず。然るに共通制は此獨特の權利を認めざるが故に、その分配法によりて之を回復補償するの途を講ぜんとするは當然なり。是に於てか或は線路の長短に應じて、此共同の收益を分配せんと主張するもあるべく、或は交通頻繁の程度に基くべきを主張するもあるべく、或は投資の多少に準ぜんとするもあるべし。此の如くんば分配率の何に準據すべきかは到底定むるに由なく、協議の成立は企求す可からざるなり。假りに分配を均一にすとせんか、賃銀取得の原則に背反すべく、案分法により分配せんか、その分配率の根據を求むること能はず。又各社の獨特の收益權を認めて共通切符と共に專用の切符を發賣せしめんか、乘客は切符購賣の初に於て豫めその降車の場所を一定せざる可からざる不便あり。加之電車線路の分布を詳細に知らざる以上は、萬一の不便を慮りて共通切符を求むべきを以て、實際に於て專用切符は無効に歸すべし。故に少くとも當眼の問題に對しては、共通制を採るは啻に不便なるのみならず、又實に不可能なるべし。

然らば聯絡制を採用せば、其收益分配及切符發賣法は如何にして公平と便宜とを庶幾するを得べきか。

新聞紙上に傳ふるが如くんば、市街鐵道の當事者は、

聯絡切符の賃錢は線路の長短に比例して分配すべきを主張し、爲めに他會社との協議纏まり難しと稱す。想ふに市街鐵道側が此分配案を主張する所以は

一、賃銀に對する一般の思想に妨げらるゝ事。即ち賃銀なるものは勞働者はその仕事に要する費用に對しての報酬なり。線路の長き街鐵は爲めに大資本を投じ、大なる費額を要するを以て、聯絡輸送てふ同一仕事に對しても亦之に應ずる利益即報酬の分配に與るを至當とすること。

二、線路の長きものは、聯絡切符所有者に對しても、長き里程の運般に任ぜざる可からず。たとひ一般には然らずとも、此の如きもの高數なるべしとする事。

三、現在の賃錢ならば長程の乘客ありとも平均上より償ふ所あれど、聯絡切符によりてその半額又は三分の一を得るのみにては收支償はざる患ありとすること。

等の思想が重なる理由なるべく、勿論實際には種々の意見存ずべけれど、論ずる所は此等三點に歸着せざるを得ざる可し。然れども此の如き主張は共通制に對しては（猶ほ此外にも自己の獨用線路内に乘降する乘客の數勢多かるべきをも加へて）尤もなる議論なれども、聯絡制に對しても同一の主張を爲すとせば、是れ暴論のみ、唯利主義のみ。此問題に關しては賃錢均一は現在に於て既に各社の根本主義たるを忘却するを許さず。苟も均一制を採用する上は、各社が乘客に對して要求し得る賃錢は、その運般の里程の長短若はその費用の大小等に關して多少高下の差別あるを得ざるなり。而して此點に於ては、同一制の各會社が聯絡制によりて聯絡輸送を爲す場合に在りても亦同一にして、運般距離の大小、費用の多少を根據として、聯絡切符の賃錢分配に對して權利の大小を生ず可き毫末の理由を有せざるなり。今煩を厭ひて一々反駁せずと雖、左の八條の理由によりて熟考せば明瞭ならむ。

一、賃錢均一制の實行は、多數乘客の乘距離の長短が相補うて、各會社の勞力及費用に對する報酬を充分に與ふることを證す。

二、均一制は一般の賃銀と異り、乘客一人の一回の乘車を單位として要求する賃錢なり。故に

三、均一制の各會社の聯絡輸送は、資本合同の場合と等しなみに論ずべきに非ずして、聯絡輸送の乘客の數を以てする協力なり。

四、聯絡輸送の賃錢の分配は此數に應ずる分配の外、何等の主張を容るゝを許さず。

五、長線路の電車が必しも聯絡輸送の乘客に就て、乘車距離の長程を分擔せず。

（以上事理の上より見たる街鐵主張の否定）

六、多くの場合に於て何れの會社が長程の輸送任務を負擔するかは不定なり。且つ

七、聯絡輸送其ものを賛する上は、他會社と分配すべき一定賃錢に對して、各會社の勞力及費用を分擔する割合は、專用切符の一定なる賃錢に對する分擔と同一の割合なり。

八、一般に云へば聯絡輸送による各會社の利益と損失とは相互的對等と見るべくして、其單に輕重を定め難し。

（以上事實上よりせる街鐵主張の否定）

加之市街鐵道の如き、線路の布設區域廣くして、市の最も繁華なる場所を通過する東京電車線に交叉すること多き電車に取りては、時間の消費を吝まずして可成目的地に近づかんが爲に、專用切符の場合に於ては街鐵の長距離を乘車する客數を減じて、新客を迎ふべき席數の增加を來し、及び東電線に近くして街鐵に沿へる地方の乘客を收容するによりて、更に利益の分配に與るを得べし。若し不幸にして事實上の利益が萬一吾人の見の如くなる能はずとするも、事理の上より考究する時は、街鐵側の主張の謂れなきことは爭ふ可からず。

他に又一說あり。線路に優劣を附して利益分配法の根據と爲すべしと說くもの之なり。去月十九日の讀賣新聞の紙上に於て市內交通機關に就て硏究せる某氏の說なりとて、聯絡輸送の賃錢分配に關する一案を載せたり。某氏の何人なりやは知らず、紙上の文字の如くんば某氏の案は些か粗漏を免がれず。同案によれば、乘客數の多少によりて線路の優劣を判じ、此優劣によりて賃錢の分配とすべしと云ふにあり、而して此乘客數を算するは發賣切符に依らずして受取切符を以てす。其理由とする所は乘車線は利用線にして、降車線が乘客の目的線なるが故なりと稱す。乘客數を云ふは可なりと雖、受取切符によりて線路の優劣を定めんとするは妄なり。聯絡切符によりて二會社以上の線に乘車するものは、その何れに降車するに關らず、その客はその各會社の乘客にして、その各會社は等しくその客に對して役務（ライスツング）を爲しゝもの也。若しその役務に對する報

酬即ち賃錢の分配に多少を設けんとせば、實際には不可能なれ共理論上は其の乘車距離の長短によるの外なきなり。然るを何ぞや、乘客の目的線なりとの故を以て、電車線の優劣即ち價値を定め不等の利益を分配せしめんとは、降車線は乘客の目的地を通過する線なるは疑なしと雖、之が爲めに線路の優勝は定め難し。且つ乘客の目的を標準として、利益を目的とする營業者の收益を左右するは、經濟上の原理に背けり。事實上に見るも、例へば新宿より乘車せる客が日本橋に至らんとせば、街鐵によりて尾張町に到り、更に東電によりて日本橋に到るが如き場合頗る多からん。此時に於て論者の所謂目的線(と云ふべくば)は東電なれど、主として乘客の爲に役務を爲すは街鐵なり。而して目的線なりとの故に東電を優れりと爲すに至ては何等の理由ありや。勿論論者は往に便なれば復にも便なりとの理由を呈出すべけれど、同一の乘客が他社の線によりて歸るとせば、若は街鐵のみにより歸るとせば、此乘客の往くさの際の聯絡運輸に對しては街鐵は遂に劣者として爲めに少き收益に甘んぜざるを得じ。是れ不公平の極なり。受取切符の所有の多少は必しも乘客に對する役務の多少にあらず。又優勝線の證明にも非ざるや明白なり。次に此案は假りに合理的なりとするも、三會社線以上の聯絡乘車の場合に於ては如何。中間の會社は何を標準として幾何の利益分配に與り得るか。論者は如何に多數社間にても同一なりと云へど、その沒理なるは更に甚しきものあり。余は斷じて乘客數に應ずる均一分配(即ち比例分配)を以て至當にして且つ公平なるものなるを主張せんと欲す。

さて賃錢分配に於て如上の意義の均一主義を採用すとせば、其切符制は如何にすべきか。此に關しては種々の案あるべし。要は第一に發賣切符の賃錢が何れの會社の手にあるかを明かにし、第二に各會社の當然取得すべき權利の保證を確實にし、第三に最も簡單の方法を擇ぶにあり。此の如き實行の方法に關することは、熟練にして經驗ある當業者に於て固より完全なる成案あるべく、吾人門外漢の説を待つの要なかるべしと雖、試みに上來述べたる所を遺憾なく滿足せしめんが爲に必要なる點を擧ぐれば左の如し。

一、本乘車切符は各會社に於て製造發賣し且つ社名を名記すべし。(故に從來の儘にて可なり。)

二、之と共に聯絡乘車切符を各會社に於て準備すべし、此聯絡乘車切符は、一面には聯絡券なるこ

と及び發行會社の社名を名記し、他面は他の聯絡會社の數に應じて區劃し、且つ此區劃に隨うて割き取り得べき樣に製造するを要す。(手數を厭はずば、毎日の日附を記入するを良とす、又各會社色彩により一見區別し易からしめ、又各區劃面に聯絡會社の社名を記入せば更に便ならん)

三、此聯絡切符は聯絡場所に於て他會社線に移乘せんとするもののみに交付すべし。

四、他會社の本切符(往復及回數の切符)にて乘車せる乘客に對しては、之を自己の會社の本切符所有者と同樣に扱ふ可し。

五、各會社は自己の發賣に係る本切符を所持する聯絡會社に對して、均一賃錢の全額を支拂ふ可し。

六、各會社は自己の發賣せる聯絡切符の全部を所有する他の會社に對しては均一賃錢の二分の一を支拂ふべく、其割き取りたる一部を所有するものに對しては三分の一を支拂ふべし。

(此切符に關する制限は現在の三會社聯絡に對して適用すべきものにして、四會社以上の場合には更に複雜なる手數を要す。然れども聯絡賃錢の均一分配法に至ては如何なる場合にも及ぼすべきものとす。)

右六條の條件中第一より第四までは切符發賣法に關し、第五と第六とは各聯絡會社間の計算法に關す。第一の條件は切符製造の便利と、該切符に對する賃錢の所有者とを明かにするを目的とせり。同一の切符なるときは製造費に於て利益あり、且つ手數に於て簡易なるべしと雖、製造の際に不正行爲を容れ得るの不備あり。又各社に於て豫めその需用高を見込みて購入すとせば、收益金の金利に於て損失あるべく、賣上高によりて後に其賃錢を仕拂ふとせば聯絡切符の所有會社は何處に向て分配を請求すべきやを明かにすること能はず。併らば切符そのものは同一のものを使用し、之に各會社の社印を捺印すとせば此方法は更に利便を加ふべし。第二の條件即ち本切符の外に聯絡切符を發行するは各會社の請求し得べき當然の權利を保留するを目的とす。既に共通制を取らずして、各社に於て切符を發賣すとせば、單一切符を以てしては、中間會社は自己の權利請求に對して一の標識なし。是れ聯絡切符の必要なる所以なり。又連絡切符にして之を割取する能はずは、中間會社又は最終會社は孰れか件の標識なきも

のを生ずべく、計算に於ても二分の一を要求すべきか、三分の一を要求すべきかに就て證劵なきを以て、同じく困難を感ずべし。然るに第二の條件の如くせば、第二の會社のみにて降車するものに對する賃錢は、分割せざる全部の所有を證劵として二分の一を請求し得べきが故に、分配に於て關係會社間の均一を行ふに於て遺算なかる可く、且つ此一部分を紛失せしむる事ありとも、その紛失より來る損失は過失者たるものにのみ歸すべくして、累を發賣會社に及ぼすことなし。第三の條件は發賣會社が、その獨特の權利を保留するが爲に必要なる條件なり。第四は往復及回數劵發賣の爲に離ずべからざる條件にして、此なくば乘客に取りての不便は一方ならざる可し。而して此場合に於ては、他會社發賣の本切符の所有會社は第五に定むる所により、發賣會社に對して全部の賃錢を要求し得るが故に、自己發賣の切符と關る所なし。併しては必しも此法によるを要せず、他會社の本切符を以て賃錢の代りとなし、自己の會社の本切符をその所有者に與ふとも妨ぐる所なし、只かくの如くせば切符の無益なる使用により些少なりとも經費上の損失あるべきは止むを得ざる所とす。第五及び第六の條件は計算上の便利を目的とし、而かも上の四條の條件存ずるが爲に必要なる所にして說明を須ゐずして明なるべし。

右の條件にして充たされ得ば、その他の點に於て如何なる方法を取ると雖、一方には賃錢均一の條件の下に於ては、(換言すれば乘客一人の乘車回數を以てする協同事業としては)普通の賃銀の原則にも合ふことを得て、その賃銀の分配は公平至當なるべく、他方には市民の便益を來すると同時に電車營業者の利益をも亦增加せしむるを得べしと信ず。唯此切符制に於ける缺點は、聯絡切符所有者が第三回の乘換の前に之を紛失せしめたる、若は急に乘換を中止せる場合にあり。此場合にありては第二回に乘車せしめし會社は、乘客の過失より來る責任を受けて、發賣者に對しては三分の一を請求し得るに過ぎずして分配の不公平を免れず。而かもこれ唯一の缺點にして實際に在りては極めて稀有の出來事なるべし。(尤も此制と雖他に缺點なきには非ざれども、そは現今の如く專用切符の場合に於ても、或は共通制の場合に於ても等しく免がれざる所とす。)果して然らば吾人は市民の便益の爲めに、且つは當業者の利益の爲めに、一日も早く聯絡輸送を開始せんことを、その當業者に向て希望し勸告するの不條理なら

ざるべきを信ず。（九月二日）

人類の生存競爭

理學博士　丘淺治郎

世には人類の生存競爭と他の動物の生存競爭とは全く種類の違うた者であると考ふる人がある。又中には高等動物になればなる程生存競爭が緩やかになり、下等動物に見るが如き咬み合ひ殺し合ふやうな殘酷なとはなくなつて了ふもので、今日も尚人類に生存競爭の絶えぬのは未だ人類の不完全なからで、人類が今日よりも進歩さへすれば終には全く生存競爭がなくなるのであるといふやうな說を唱へて居るものもある。所謂社會主義の人などはかゝる意見を有して居るらしく見える。けれども我輩から見ればこれは餘程間違た說であらうと思ふ。でこゝに些か人類の生存競爭と他の動物のそれとを比較論究して見やうと考ふるのである。

動物でも植物でも凡そあらゆる生物は何を見ても生れる子供の數と生存し得る子供の數は異つて居て、生存し得る子供の數は生れた子供の數の一部分しかないのである。其兩者間の割合は各動物によつて甚しく異り、或は百万匹生れて一匹しか生存し得ざるものあり、或は三四匹生れて其中の一匹が生存し得るのもあるが、孰れにしても生物の增殖し行く割合は幾何級數的、鼠算的なのであるから、假令少數の子供しか產まぬものでも皆生存し得れば澤山に增殖することゝなつて、勢ひ生存競爭を免れぬ譯合となるのである。其點よりいへば人間も他の動物と同じく決して生存競爭を免れぬ理窟で、簡單にいへば生存競爭には人類も他の動物も毫も差別なしといふことに歸着して了ふのである。が然し人間の實際の生存競爭の有樣を見れば動物の咬み合ひ殺し合ふといふ狀態とは餘程相違があるやうに見ゆるが、これは何故かといふと、これには一つ動物全體を通じて調べて見て、生存競爭の單位となるものが各動物皆一樣かどうかといふことを確めてかゝらぬと間違つた斷定を下すやうなことになるだらうと思ふ。

凡そ動物の中には團體と團體とを組織して生存して居るものと、個體と個體と單獨に生存して居るものとの區別がある。個體と個體と單獨に生存して居るものゝ種類は素より無數であるが、團體と團體とを組織し

て生存して居るもの丶種類も亦澤山にある。人類は勿論團體的生活をなして居るものであるから、其生存競爭のことを論ずるには必ず他の團體的生存をなして居る動物と比較すべきであつて、若し之を個體的生存をなして居る動物と比較するならば、其競爭の單位が違ふのであるから、全く問題にならぬと思ふのである。

團體を作る動物も其殖える割合は個體的生存の動物と違はぬのであるから、生存競爭の免れぬことは無論であるが、團體と團體との競爭には如何なるものが勝つかといふに、團體として秩序があり、分業が行はる丶しつかりとした鞏固なものが勝つに極まつて居る。であるから團體の中の個體と個體との競爭は猛獸と猛獸との競爭とは譯が違ふ。一團體內の個體と個體との競爭が猛獸同志の如く劇しくなれば其團體は他の團體に對して生存が出來なくなる。であるから團體內の個體と個體との間にも競爭を免れぬとしても、團體として他の團體に對して生存競爭をする必要あるが爲めに、己れの團體の存在を危くするやうなことは決して出來ぬ、團體內に於ける個體間の競爭は己れの屬する團體が他の團體に對して生存し得る範圍內に限らる丶のである。夫れ故に團體を作る個體間の競爭は咬み合ひ殺し合ふやうなことはない。然しながら團體と團體との競爭となれば全く猛獸同志の競爭と異ることがない、即ち强ければ勝ち榮え、弱ければ負け衰ふるより外はないのである。どちらにしても生存競爭の單位と單位とを比ぶれば一方は緩やかで一方は劇しいなど丶いふことは決してあるまいと思ふ。

人類の生存競爭といへば、どの方面にもあることであるが其一番上の單位は現在の所では國と人種とである。之れは歷史の事實を見ても、現在の狀態を見ても明かに證據立て丶居ることで、國と國と、人種と人種との競爭は猛獸同志の咬み合ひ殺し合ひと毫末も異ならぬのである。人種と人種との競爭は隨分複雜であるが、一國一人種の方は普通であつて、多人種が一國をなすことは例外の場合である、同等の權力を有する多人種が一國をなすのは自ら守る目的の爲め丈で、多人種相集まらなければ自分等の生存が危いといふ時のみである。これは今日の狀態を見ても極めて明瞭なることであらう。か丶る場合には外に對しては一國であるが內では人種と人種との軋轢があるものである、一方の人種が非常に少くて殆んど一方の人種に同化せらるるならば格別、否らざれば何時までも兩人種の軋轢が

絶えぬものである。若し自分を守るために他人種と合して一國をなす必要が無くなれば其國は直ちに分れて了ふかも知れぬ、今回露國が日本と戰うて日本に負ければ、其形勢を見て瑞典と那威とは分立せんとする、又假りに露國も獨逸も弱くなつて亡ぶるやうな事があるとすれば墺太利と匈牙利とは結合して居り相もない。又墺太利の内でもボヘミアとか何とか皆離れ／＼になるかも知れぬ。つまり異人種が集りて一國を成すのは周圍の境遇が然らしむるので、敵がぐるりから締めて呉れるから分れないで居るのは恰度桶に輪が嵌まつて居るので木片がばら／＼にならぬと同理である。今日の所では人類の生存競爭の最大團體は國であるが、尚考ふれば人種が生存競爭の單位であつて、異つた人種が一國をなすのは勢止むを得ざるに出てたものである、斯かる國で其人種間の中がよくないのを見ても、人類の生存競爭の根本は人種間の競爭であらうと思ふ。

之を他の動物に比較して見るのに、團體を作つて居るものであるならば其理全く相同じくあつて、團體が單位となつて競爭し、負けて亡び、勝て榮ゆること毫も人類と異なることはない。蟻とか蜂とかの團體をなして居ることは誰も知て居るが獸にも團體をなすものがあり、猿なども種類によりては團體をなして居る。

さうして此等の團體的動物が他の團體と團體同志の爭をするのを見ると全く人類の競爭と違がない樣である。つまり人間の生存競爭の單位たる一國の中で個體と個體とが劇しい生存競爭をするのを見るゝはこれは全く團體生存上の必要より起つたもので、若し完全なる理想的の有樣に進めば個體と個體との關係は恰かも身體の中の臟腑と臟腑との如くなるに違ひない。論より證據、今日蟻や蜂は已にかゝる狀態に進んで居るのである。一團體を作て居る蟻や蜂の個體は已に個體として生存を失ひ、單に團體の一部分としてのみの生存の意義を有して居るのである。自分一個の利益の爲に働くといふやうなことは絶えて無くして、千匹あつても万匹あつても皆其團體の爲めに働いて居るらしい。他のものゝ產んだ子を育てることの懇切なことや、食物を集むるにも自分の食ふ分量以外のものを集むるの熱心なことや、又一身を捨てゝ誠實に團體を護ることなどを見ると、蟻の生活は總て團體の爲めであつて、少しも個體の利益を計るものではない。人間社會はまだ／＼其處まで行かぬのである、團體としては蟻のや

うになれば生存の競爭に勝つ見込が益々多くなる、團體同志の競爭になると、個體間に爭のあるものは恰も身體の内で臓腑が互に相爭ふて居るのと同じ理窟であるから競爭に必ず負ける、各個體が自己一身の存在を忘れて團體の爲にやるものは必ず勝つ。人類が果してかゝる狀態にまで進むものであるや否やは疑問であるが、團體間の競爭に於ても適するものが常に榮え、適せざるものが必ず亡ぶるのであるから、各團體内の個體と個體とは漸々爭はぬやうになつて、恰かも身體の中の胃腑と肺臓とが爭はぬ樣な方面に進み相なものだと思ふ。かく考へ來れば、一團體中の各個體が調和し、其中に爭がなくなつたとしても、之を野獸と比較して人間はエライ、人間は格別だなどゝはいふことは決して出來ぬ。之れは單に猛獸の腹の中の臓腑の相爭はざるに比すべきものである。例へば狼は其腹の中の肺臓と胃腑とが爭はぬので他の動物を捕へ殺すことが出來る樣に一團體内の人間と人間と相調和するので初めて其團體が完全に狼の如き働をなすことが出來るのである。箇樣に個體のものは個體のものと團體のものは團體のものと較べなければ生存競爭の程度を計ることが出來ぬ。動物の生活狀態を論ずるに當て、競爭の單位を異にして居るものを取るのは間違である。社會主義の人は漸々世が進めば生存競爭がなくなる、理想の世に進めば生存競爭がなくなるといふて居る、スペンサーも生物學原理の終りの方に全樣の意味の語を書いた、然しながら過去を顧み、現在を觀じ、未來を察すれば生存競爭のなくなるべき望はない樣に思ふ。否な將來知力の進むに隨ふて益々劇しくなるであらうと思ふ。尤も團體中の個體と個體との爭は或は柔ぐ樣な場合があるかも知れぬが、人類が生殖し、蕃殖する以上はどうしても生存競爭は免れぬことで、團體と團體との爭はなか／＼緩やかにはなるまいと考へらるゝのである。國より以下の團體同志又は個人と個人との關係を考ふると、其上には國といふ一層大きなる生存競爭の單位があるのであるから、其等が劇しい競爭をするといふのは取りも直さず、國といふ生存競爭の單位の存立を危くするので、これは出來ないことであるのみならず、若しあつたならば同僚のものが力を協せて之を止めなければならぬ、であるから團體の中には小團體や、個人の間を制裁するために善惡、又は賞罰等の仕組を生ずるに至るのである。善惡とか賞罰とかの標準は其根本に遡りて考へて見れば皆團體の生存を究

覺の目的として居るものである、其團體全體の生存に都合よきことをしたものは善として賞せられ、都合あしきことをしたものは惡として罰せらるゝ。これが即ち團體の中に道德とか法律とか生じた原因であつて、若し道德とか法律がなければ團體として生存が覺束ないからである。已に團體を組成した以上は野蠻人でも又人間以外の動物でも文句に書いてあると否との別はあるが、必ず道德法律とも見做すべき制裁があるものてある。賞する方の事實は餘り明かにわからぬが罰する方の例は明かなものは澤山あつて、多くの動物では或る一個體が團體の爲に惡いことをした時には大抵生かして置かぬ、こういふ例を調べて書いた人は澤山にある。團體の害になることをしたものは、假令偶然の過失であつても殺して了ふ、野蠻時代の歷史にも同樣のことがある。團體を作りて生存競爭をせざるべからざる以上はかゝる規則を生ずるのは勢の自然で、止むを得ざることゝ思ふ。若し個體と個體とが放れ〳〵になつて生存して居るものならば善惡とか賞罰とかいふことは全く無意味のことで、到底其意義を考へられぬことである。單獨生活の動物では全く善惡賞罰がない、個體別々に生存して居るものは下手なことをして負ければ一匹が死ぬ丈けて、狡猾な事をしても勝てばそれが榮えるのみてある、規約もなければ制裁もない。然し團體のものはさういふ譯に行かぬ、若し個體間に規約がなく制裁がなければ團體全體の生存が出來ぬ。人間社會に道德があり法律があるのは之が爲である。併しながら今一歩進んで蟻や蜂の社會の如く一個體の獨立が全くなくなつて、唯團體の一部としてのみ生存するに至れば法律も入らず、道德も入らず、善惡賞罰を論ずる必要がなくなる、斯くなれば團體同志の間では劇しく相爭ふが、團體內の個體間の爭は全くなくなり、私利私慾を計ることに熱心な人間から見ればたゞたゞ不思議と思はるゝのである。蟻の働くは全く團體の爲めのみであつて、少しも單獨の爲めではない。團體として生存するものは個體としては自由がなく、個體の意志は即ち團體の意志で、全く善惡を論ずる能はざるに至れば團體としての理想に達したものである。人間や猿などは未だ中々かゝる狀態に達しては居らぬから善惡賞罰、道德法律等を廢しては生存は出來ぬのである。已に團體的生活をなして居るものであるから、其個人と個人との間の關係は勿論一個體づゝが單獨に生き死にするものに比すれば相違のあることは分りき

つたことであるが、扨て團體同志で相爭ふとなると、猛獸同志の爭と毫も異ることはない。團體同志爭へば瞞しても勝てば榮え、正直でも負ければ滅ぶること一匹〳〵の場合と全く相同じくある。

然らば國と國とが聯合することがあるのは何故かといふにこれは聯合しなければ自分の生存し得ざる時に限るので、狼でさへも一匹で手に合はぬものに對するときは力を協せる。例へば大きな牛を取るときなどは四五十匹も狼が團結することさへある。人間の聯合同盟などいふものは全く之と同樣である。一匹の兎を見附けたときには互に咬み合ひ殺し合ふてもこれを奪い取らうとする狼共が、大きな牛の如きものには力を協せてかゝる、獨り攻擊の時のみならず。又防禦の時も然りである。これは狼の多く居る國の人が調べたことである。一個〳〵の單位の動物でも、弱いものゝときは互に相爭ひ、强いものゝときは力を協せて防ぐのは狼のみならず、他の動物にもあることであるが、人間亦此例に洩れずである。同盟などは全く生存の必要より起つたもので否らざれば決して起らぬと思ふ。文句にはいろ〳〵立派なことがあるかも知れぬが、其飾りを剝奪して、其正體をあらはして見たならば、同盟の意義も狼の協力と異るまいと思ふ。必要あれば同盟する、必要去れば同盟を止める、過去の歷史之を證明し、現在の事實之を明示し、將來の趨勢亦然らんと思ふ。國と國とか同盟すれば一國では取ることが出來ぬ國を取ることも出來、又一國では防ぐことの出來ぬ國を防ぐことも出來るから同盟する、狼が牛を取ると全理である。

人類社會の競爭の單位は何であるかといへば今の處では國である、一國の中に幾つかの人種があるときは競爭の單位は矢張人種であるが、之れは前にいふた如く例外の場合で、普通は主として一人種が一國をなすのであるから競爭の單位は國であるといふて宜しからうと思ふ。個人と個人との間には道德も出來、法律も出來て、其規約に戻らぬ樣にと務めるが國と國との間には箇樣なものは一切ない。成程國と國との間でも表面には交際上の文句を奇麗にすることは出來やうが、內實を洗つて見ると强いものが勝ち、弱いものが負けるといふ外には何もないのであるから、一向他の動物と違はぬのである。尤も小くて弱い國が大きく强い國に挾まれて獨立して居る場合はあるがこれも矢張生存競爭の結果であつて、よく考ふれば毫も怪むに足らぬ

のである、例へば瑞西の如きものが如何にして生存するかといふに、これは周圍の生存競爭の結果として困難なるか、又は亞細亞や亞弗利加の方に取るべき廣い國がある故此樣なものをとるに足らぬかの爲であつて決して內心から瑞西の獨立を尊重して居る譯ではない。又決して他の國を攻めぬといふ平和主義を看板にして居る國柄を調べて見るのに土地廣く人口少くして他國を取る必要のないもの丶みである。併しそれは何時までも續くものではない、人口稠密となつて形勢が變つて來ると、何時の間にか先の宣言を忘れて他國を攻擊するに至る、これ亦實に止むを得ざるの形勢であらう、人間に對して土地が狹くなればかくなるのは自然である、而して他國と戰爭をして勝てば其人種生活區域が廣くなり負くれば狹くなる。これは何處の歷史を見ても然りである。平和主義を唱ふる國は勿論褒めて置くべきであるが何時までも平和主義であると考ふるのは大間違て他日敵國となるの資格は充分あるものと覺悟しなければならぬ。世の中には我々の見て隨分空論であると思はる丶ものが中々行はれて居る或る雜誌上に今日戰爭のあるのは世の中が進まぬからで、進めば戰爭はなくなるといふ說を見たことがあるが我等の考へでは、人間の增殖し、蕃殖する傾があり、又人間間に相違のある間は何處かに何等かの方法を以て戰爭の行はる丶のは到底免れぬことであらうと思ふ。又平和時代のことを考へて見ても鐵砲を打たり、劒戟を閃かしたりすることがない丈けで、眞綿で首を縊り、榨木で油を絞るやうな仕方の戰爭は何時でもあるだらうと考へる。故に國と國とのある間は其競爭は終に猛獸と猛獸とのそれと少しも異ることはない。又ある雜誌を見た所が「國と國との間には法律も道德もないから如何なる手段をも遠慮なく用ゐて唯勝つことを務めるがよいといふ人があるが之は大間違である、現に今日日本は正義の爲に戰ひ、露國は眞僞かまはぬ國であるから、世界は皆日本に同情を表して居るではないか、正義は實に最强の武器である」と書いてあつたが、吾輩から見るとこれこそ間違つた議論と思ふ。若し同情といふものが言葉丈であるならば何の役にも立たず、決して弱國をして勝たしめる如き效力はない、假に先年英國とトランスバールと戰ふた時に世界中でトランスバールを擧め立てたと想像しても決して其ために彼の國が英國に勝ち得たらうと思はれぬ、又眞の同情であるならば、それは是非とも自分にとつて利益がある

から真の利益がないならば決して喜んだり、同情を表したりすることはあるまいと思ふのである。動物に觀ても甲と乙とが爭ふときに其爲に利益を得る所の丙は必ず喜ぶが國と國との間も全く其通りで甲乙二國の戰ふて居る間に利益を占め得べき位置に立つ第三者の國が大に喜ぶのは勿論である、一國の勝利が自國にも其利益を及ぼす時にあらざれば決して之を喜ぶべき筈がないのである。一國が負けて弱つたのを喜ぶのは即ち自分の敵國たる資格のある國が弱つたから之を喜ぶのである。今度の戰爭でも露國の負けたことを喜ぶ國は勿論多いであらうが、日本の勝利を利害得失に關せずして喜ぶものは恐らく日本一國丈であらうと思ふ。今日諸外國から我國に寄せて呉る同情に對しては大に其厚意を謝せなければならぬが其同情なるものが眞に如何なる價値を有するものであるかは今後諸外國が我に對する所行によつて漸々明瞭になるであらう。

かく考へ來れば人間の生存競爭に於ても國と國との間ては唯自己の力の外には賴るべきものはないのであるから、他の動物の生存競爭と全く同一のものであつて、孰れが緩やかだとか、孰れが劇しいとかいふことは出來ず、又高等動物の競爭が下等動物程殘酷でないといふことも出來ぬ事と思ふ。人類の生存競爭では總て他の事情が同じとすれば一國內の個體同志が、道德法律を重んじて協力一致するものが、勝つ理屈である、生存競爭が劇しくなればなる程個人の力を合せることが必要となり、其點の優れた團體が他の團體に勝つことになる譯故、國內の者は同心協力、一致和同して道德や法律などに戻るものが少き樣な仕組を立てるより外に競爭に勝つの法がないと思ふ。素より此議論は國の大いさも仝じく、人の數も仝じく、人民の知力の程度同じく其他の總ての事情も仝じいものと見ての議論であるから、實際の複雜極りない國と國との間に此簡單な理屈のみを押し立てるといふことは出來ぬが、人間でも生存競爭は他の團體動物と仝じく、團體が生存競爭の單位であることを忘れぬのが必要で、其反對に考ふる人が多數になつたらば國の存立が六つかしいといふ樣なことも隨分あらうと思ふのである。

「進化論講話」の著者、丘理學博士の談話を筆記せるもの、文責は全く記者にあり。



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と勢力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず、

英獨兩國の海軍力を論ず

「ロバート、マクレー氏」

七月發行の「ビ、ナインチーンス、センチユリー誌」に掲載せられたるロバート、マクレー氏の英獨海軍力の比較は識者の一讀すべき價値あり。爲れども其所論十頁餘に亘りて一々之を飜譯するの紙幅なし。故にこゝに其要旨のみを摘載せり。

英國の頼む所は偏へに其艦隊にあり、是れ素より其國の位置及び從來の歷史に照してしかあるべき筈なり。故に若し他國と戰端を開くことあらんか、敵國の艦隊を一擊の下に破碎すること恰かも東鄕大將のバルチツク艦隊に於けるが如くならざるべからず。若し然らずして敵國艦隊を殄滅し能はざらんか、彼は陸に於て大兵の襲ふ所となるを免れざるべし。今世界に於て强大なる陸軍及び相當に强き海軍を有する國を擧ぐれば佛、獨、伊、日の四國なり、以上の中佛、伊、日の三國は總て英國と厚誼的關係にあり。露國は艦隊を失へたるも未だ陸軍力を有して且つ印度に害意あり、而して一方獨逸を見るに數百万の陸軍に加ふるに、非常に擴張しつゝある海軍力を有し、今や獨國内の如何なる平和論者も他日英國と戰端を開くことなかるべきを斷言し得るものなき有樣となれり。夫れ故に英國の將來を考ふるものは必ず英、獨の衝突を思はざるを得ざるに至りぬ。是れ最早や机上の空論にあらずして、活ける實際の問題となれり。

凡そ一國家の發展せんとするや概ね人口超過より起ることは殆んど原則とする所なり。是れ已に日本の場合に於て證明せられたることなるが獨逸に於ては一層其甚しきを見る。日本の人口增加は一年五十万餘に過ぎざるも獨逸は其二倍即ち年々百万の增加をなしつゝあり、而して獨逸の現有する殖民地は素より此等の增加せる人口を收容するに足らず、是れ獨逸皇帝及び其國民の先覺者が「我等の將來は水上にあり」と絕叫したる所以なり。ビユーロー伯亦嘗て揚言して我等は商業及び政治に於て他國の制肘を受るを欲せず、我等は一層偉大なる獨逸を建設せざるべからずと斷じぬ。一層偉大なる獨逸！、彼等は何處に於て獨逸の擴大を圖らんとするか。今や米國はモンロー主義を持して容易に西半球に侵掠するを許さず、日本は極東に覇を稱して容易に亞細亞の分割をなさしめず。殘る所は僅かに亞弗利加の天地あるのみ、是れ獨逸の乘ずべき所たるに相違なし、獨帝がモロッコ問題に干涉したるが如き確かに其一端を洩らしたるものに過ぎざるなり或は曰く獨逸は最早や擴張すべき餘地なし、

軍備の如きも漫りに擴張するは愚なりと。然れども獨逸は其海軍の擴張を止めざるなり。何となれば彼は海上に於ける最大權力者に代て自ら其跡を襲はんとするの希望あればなり。最大權力者とは勿論英國を意味す。彼獨逸人は心中大に期する所あり、其海軍を擴張し、以て俄然英國を衝かば我必ず海上の霸王とならんと。かるが故に我英國たるもの決して安閑として之を傍觀すべきにあらず、よく獨逸の行動を察して此れに備ふるの覺悟なかるべからざるなり。

乞ふ觀よ獨逸の海軍力の增大が實に驚くべき度を以て進みつゝあることを。七年前獨逸は十二隻の戰鬪艦、八隻の海岸防禦艦、及び大小三十三隻の巡洋艦を有するに過ぎざりき。然るに年々議會に提出せらるゝ海軍擴張案は實に非常なる艦隊を組織せんとするにあり、此案は素より悉く議院を通過せずと雖も昨年末の調査によるも已に驚くべき勢力に發達せるを見るべし。

已成艦

一等戰鬪艦	十六隻
二等戰鬪艦	四隻
三等戰鬪艦	十二隻
海防艦	十一隻
裝甲巡洋艦	四隻
保護巡洋艦	二十三隻
巡洋艦	二十隻
水雷艇、驅逐艦等	百二十五隻
潜水艇	一隻

建造中

一等戰鬪艦	六隻
裝甲巡洋艦	三隻
保護巡洋艦	三隻

故に實際上の獨逸海軍力は三十八隻の戰鬪艦ありといふも不可なし。而して總て此等の艦隊は本國の海上に浮んで英國の岸を距つること遠からざるなり。殊に注目すべきは此等の艦隊が比較的些少なる石炭を載積する能力より有せざることこれなり、是れ即ち此艦隊が其根據地を離れて遠く航行し能はざるを示すものにして其戰鬪に與るの場所は比較的近距離にあるべきことを暗示するに外ならず。

斯く獨逸海軍力の擴張甚しきを見るに拘らず獨逸人は未だ頻りに海軍力擴張を叫ぶことを止めず、殊に獨帝のモロッコに對する態度は甚しく國民的自尊心を喚起し、皇帝の權勢一層を加へたるより推すに益々海軍擴張案に贊成を表すべきこと必せり。現に英國の權力を抑ふるには益々我海軍を擴張せよと叫びたるものもあるにあらずや、然るに英國は此等の所置に對して比較的冷淡なるは何が故ぞ、英國の實力決して彼等を恐るゝに足らずと信ずるが故か。吾人素より獨逸を驚惧するものにあらず、然れども之を度外視して之に應ずるの策を講ぜずんば終に臍を噛むの禍なしといふべからず、吾人の考ふる所によれば獨逸二戰鬪艦を加ふれば我三戰鬪艦を加ふべし。是れ兩國の禍亂を避くる最上の策略なり、若し彼れ二戰鬪艦を加ふれば我四戰鬪艦を加ふるを得なば更に可なりとせん。然るに不幸にして我英國のなす所茲に出てず、比較的海軍擴張に熱せざるを示すは遺憾なりといふべし。今最近に於ける英獨兩國の新造戰鬪艦數を擧げんに

年	英國	獨逸
一八九九	二	三
一九〇〇	二	二

一九〇一	三	二
一九〇二	二	二
一九〇三	三	二
一九〇四	四	二
一九〇五	二	二
合計	一八	一五

北海に於ける英國艦隊の戰鬪力は素より獨逸艦隊に當るに充分なるべきも其戰鬪や英國に取りて死活の戰鬪なり。若し万一不慮の敗を取ることあらんか、獨逸陸兵はスコツトランド及びエングランドの北方に上陸すべく、吾人は之に對して十分なる防禦を講ずる能はざるべし。夫れ故に吾人は最も愼重の態度を取りて決して〳〵敗れざるの充分なる艦隊を備へざるべからず、幸にして我同盟國たる日本の勝利は支那海に於ける英國艦隊を引上げて本國に備ふるを得べし、然れども吾人は之に滿足し得べきにあらず、益々艦隊擴張に熱せざるべからざるなり。

吾人が獨逸を以て恐るべき國なりとするは彼が水陸兩棲の怪物――陸海軍共に備はれるの國なればなり。

露國が極東に於て大敗を取りたるは獨逸人をして歐洲最强の陸軍國なりとの自負心を高めしめたり。彼れカイゼルは今や一方に歐洲最强の陸軍を擁し、一方に嚴々として擴張し行く海軍を握れり、かゝる時何人も何事をか爲さんとする誘惑に遭遇せざる能はず、況や精力人に過ぎ意氣世を壓するウヰルヘルム二世に於てをや。然るに吾人は一方に於て南亞戰爭以來毫も其陸軍力を發達せしめず、依然とし戰前に於ける不整不備の狀態にあり、而して又他方に於て海軍の擴張に熱せずとすれば吾人豈に一片の杞憂を抱くなくして可ならんや。見よ獨逸が嚴々として海軍力を增六せしむる、決して無意味又は輕侮すべき事業にあらざるを。是れ吾人が玆に些か英獨兩國の海軍力を論じて吾國人を警醒せんとしたる所以なり。



THE ROUGH RIDER'S PIPE OF PEACE.
One end to be taken by Japan, the other by Russia.
—*Jugend* (Munich).

日英新同盟を賛す

「ウヰリアム、マックスウエル氏」

今や日英新同盟は事實となつてあらはれたりと雖も英國が如何に此新同盟を熱望せしかを見るは必ずしも無用にあらざるべし殊に

マックスウエル氏は日本の事情を親しく熟知せる人、其所論一層聞くに足るべきものあり、即ち其大要を記して讀者の參考に供す。

有栖川宮殿下の英國訪問は吾人英國民をして再び日本との新同盟を締結することを希望せしむるに至れり。蓋し今日までの日英同盟は一種の中立同盟にして第三國が戰鬪に加はざる間中立を守らざるべからざるを以て實際の効果甚だ大なりといふべからず。即ち舊同盟は千八百九十四年に於ける日本戰勝の結果を無効ならしめたる露佛獨三國同盟の如きを防守するの外殆んど其効能なしといふべきものなり。

今や實にかゝる効力薄き同盟を抛棄して新たなる効果多き同盟を結ぶべき時に際會せり。日本が一層範圍廣くして一層長久なる同盟を結ばんと希望するは確實なり。予が日本にありしとき、伊藤侯、山縣侯、外務大臣其他知名の政客軍人によりて招待せられたることありしが殆ど皆同盟擴張に贊成を表したりき。日本皇帝陛下の御親任最も厚き伊藤侯は嘗て露國に親み、極東の地を分ちてツアール及びミカドのものたらしめんと計りたりと疑はれたる人なり、而かも予が侯に向て其事を問ふを敢てしたるに侯は只だ極東の騷亂を禦がんとする策略の外毫も他意なかりしを辯じたり。現に有栖川宮殿下の隨行として伊藤侯の子息の交り居ることは侯が英國に對する老練なる策略を見るに足るべし。有栖川宮殿下に至つては皇帝に最も親任せらるゝ助言者たること毫も疑なきなり。而して殿下は素より英國との同盟擴張を熱望し、且つ其件に關する皇帝の使命を帶びて來られたるなり。殿下が予をブラッセルに於て引見せらるゝや又直ちに兩國同盟の强固に向ふべきを祝せられたり。

又一方我英國政治家の態度を見るに同じく同盟の擴張を熱望することに疑なし、兩黨派に於ける首領連ローズベリー卿及びエドワードグレー公並にランスダウン卿及びバルフォル氏——皆日英新同盟に對して滿腔の贊成を表せざるなし、又英國民に至つては其露國を憎むこと根深くして日本に同情を有するは已に政治的策略を超絶せり、故サリスベリー卿の先見の明は實に全英人の感謝する所にして、異教徒との同盟は神聖ならずといふが如き大陸の攻擊は齒牙にかくるに足らざるなり。

奇なるかな世或は日本の勢力を恐れて、之と同盟するは終に亞細亞に於ける西洋の利益を抛棄する者なりとなす者あると。假りに日本の勢力にして薄弱ならんか、貪婪飽くなき露國は其猿臂を伸ばして恣まに東洋の利益を壟斷せんのみ。若し吾人にして日本と同盟することなく、日本をして露佛獨三國干涉の下に屈服せしむれば吾人の東洋に於ける利益は如何にして保たれ得べきか必ずしも識者を待て後知るべきにあらざるなり。遠き將來を慮るは全知十全の道なり、人は稍もすれば目前の利害によりて直ちに去就を決せんとす、危からずとせんや、水平線上帆影の見ゆるを以て一浮袋を携へざるものは中途にして溺るゝことあるを免れず。吾人日本の强大となるを恐れて日本と同盟せざるが如き實に思慮短なるものゝ所謂といはざるべからず。吾人は我國遠き將來の爲めに圖り、日英新同盟に向て滿腔の贊成を表するを禁ずる能はざるなり。

ルーズヴエルトのモンロー主義論

モンロー主義は固より國際法の一部にあらざるも、而かも西半球に關する我が合衆國外交政策の基礎をなすものにして、歐洲の諸國亦た之を是認せざるなし。而して歐洲列國の爾かく之を是認する所以のもの、蓋し吾人が唯だ舊態のまゝに頑然之を墨守することなく、西半球の進歩と變化とに應じて能く之を活用するの道を知ればなり。唯だ頑然墨守する

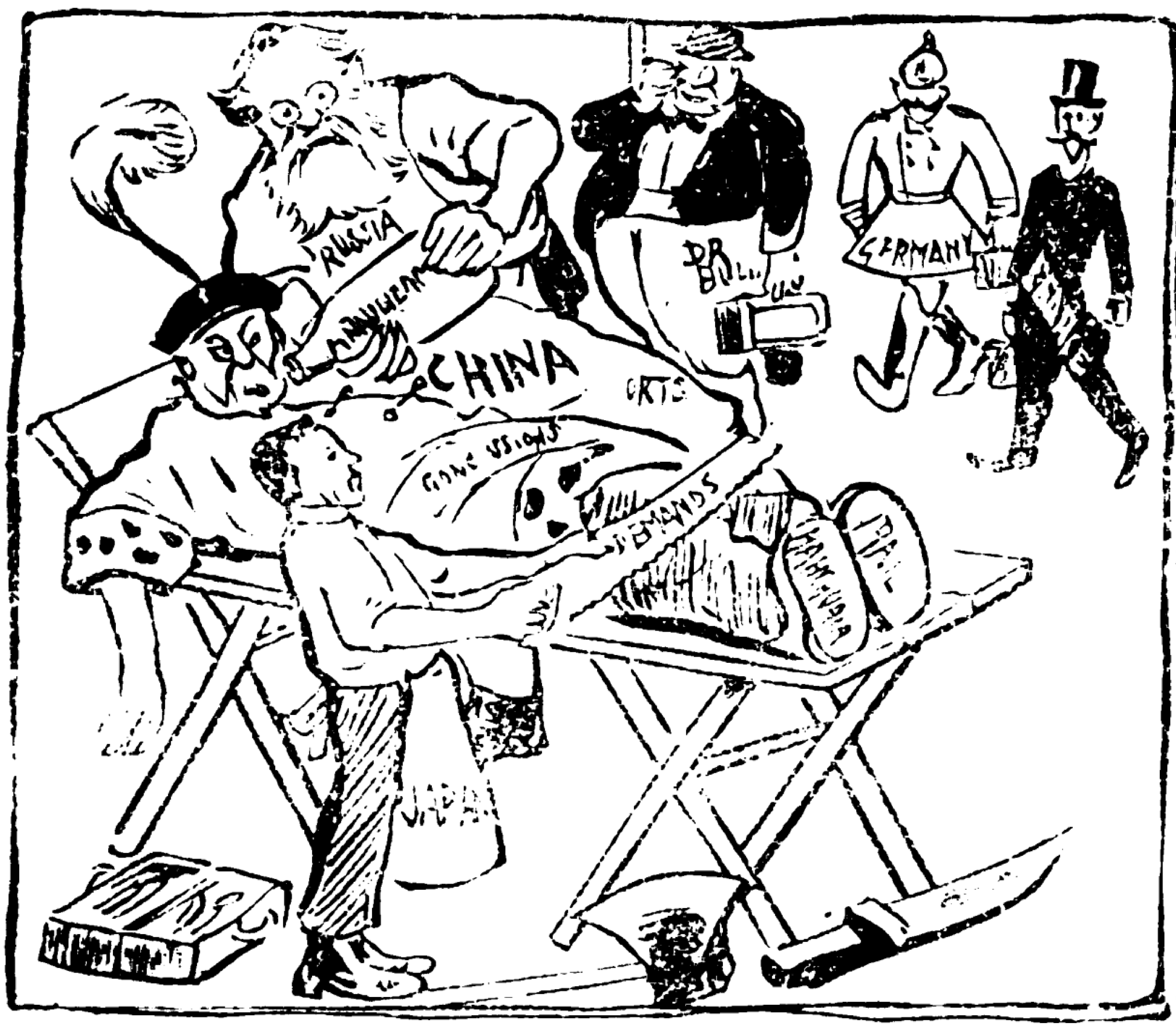
こと、切言せば其の主義を化石し終らしむることは即ち其の主義を消滅し終らしむることにして、個人に在りても政府に在りても亦た常に同じと爲す

若し人あり、或る權利を要求し、而も其の權利を執行するの任務を避けんとすることあらば、洵に言語道斷といはざるべからず。吾人既にモンロー主義を將て我が合衆國の政策と爲すを宣言す、乃ち此の政策より生ずる種々の結果は善惡共に之を受くるの覺悟を要すべく、而じて此等種々の結果は絕えず變改しつゝあるを期せざるべからず。

請ふ吾人をして先づモンロー主義なるものゝ抑も何なるをや觀せしめよ、モンロー主義とは即ち米太陸以外の列國をして米太陸の何地をも占略せしむるを許さゞるを旨とするものにして、其目的とする所、一には雄强なる歐羅巴陸軍國に西半球に新立脚地を占むるを避くるに在り、二には我國の南部に列峙せる諸共和國をして米太陸外の諸强國の爲めに征服若くは抑壓せらるゝことなく、能く安全なる進歩發達を遂ぐるを得せしむるに在り。而して吾人合衆國民の愈々益々優强を加ふるに從ひて、此の主義に對する吾人の擁護は愈々益々重んぜられ、敢て何人も之を侵かし毀はんとせざりしが、而かも此の主義をして世界列國の際だに起ちて犯すべからざるの立脚地を得せしめたるは、實に吾人の之を扶持するに努むるのみならず、更に列國に向ひて此れに對する吾人の義務の重大なるを示すに屆むること寧ろ吾人の權利を主張するよりも一層切なるものありしに因る。

然れども吾人必ず永くモンロー主義に依據せんことを欲すれば即ち三事の明かにせざるべからざるものあり、第一、吾人は決して中米及び南米の諸共和國を侵略する托言藉辭としてモンロー主義を濫用する者に非ざること、第二此等諸共和國が――外國に對する自己の非行より生ずる結果を遁るゝの防護物としてモンロー主義を濫用するを許さゞること、第三、吾人は米太陸外の列國が米太陸内の諸共和國に干涉するを妨ぐるが故に必ず誠意を以て彼等を助け、其の平和及び秩序を保持せしむるに努むべきこと是なり。

第一、南米列國の中には猥りに惡意を以て吾人の意を忖度し種々の疑



HURRAH FOR PEACE!
—Gilbert in the Denver

念を挾む者あり　吾人が彼等の利益を侵害するに便なる如くにモンロー主義を解釋し以て其野心を滿たさんことを計らざるやを念へるを忘るべからず。故に先づ彼等共和國民をして、米太陸に關して正義と秩序とを保てる政府は毫も吾人合衆國民を畏るべきの理なきことを了解せしむるを計るべく、現に彼等諸共和國中には、其の基礎既に鞏固にして秩序あり且つ繁榮盛昌なるに於て優に此の主義の擔保者たるに足るものなきにあらず、而して基礎鞏固にして將來益々發達を遂ぐべきの望ある共和國は、孰れか其の四隣に米太陸外の陸軍國が新領土を拓くを見るを快しとするなかるべく、此かる新現象の西半球に起るあるは實に吾人米國人全體の利益とする所なり。要するに北米合衆國は如何なる場合に際するとも決してモンロー主義を以て侵略的野心を掩ふの假托と爲す者に非ざるを了解せしめざるべからず、若し四隣の諸共和國にして敢て他を累はし或は挑撥激昂する如きことあらざる以上、吾人は又た自護自衛の必要なき限り自ら好みて事を構ふるの愚擧に出づる如きことなかるべく、假し自護自衛の必要上已むなく事を構ふることあるとも、決して領土開拓若くは土地侵略を目的とするにあらず、但だあらゆる手段を盡くして尙ほ避くることを得ざるを察し、乃ち已むを得ず此擧に出てしに外ならざるを諭知せしむるを要す、

　第二、若し中米及び南米諸共和國の孰れかにして外國人に對し敢て非行を加ふることあらんか、例せば或る外國公民の身體に對して危害を加ふる如きことありとせんか、被害者の本國より賠償を迫まり來る時、モンロー主義は斷じて之が處罰を拒むの妄擧に出づることなかるべく、苟も其の處罰的動作にして毫も土地侵畧の形を示さゞる限り、敢て之に干渉を試むることあらざるべし。獨り其の交渉事件が或る契約上の義務不履行に起因する場合に在りては、一層の困難を感ぜざるなきに非ず、固より我が合衆國政府は兩國の公民相互の間に締結せる契約不履行の爲めに兵力を動かし、以て自國民の利益を計ることあらざるか、吾人は更に一切の外國政府も亦た皆な同一意見の下に行動せられんことを望む。然れども見下の狀勢に於て、我が合衆國は外國政府が其の正當なる貸金に對して權利を執行し又た正當なる義務履行を迫まるを妨ぐるが爲めに開戰を敢てするを欲せず、寧ろ其の義務不履行より生ぜし正當の損害を賠償せしめて以て被害者を滿足せしむるを計るを勉むべし。

　余は如何なる理由を以てするにせよ、或る外國政府が米太陸內の共和國に對して義務履行を強ゆるが爲めに永久若くは或る期間其の稅關を占有するを見るを欲せず。若し或る外國政府の敢て之を強行することあらんか、吾人も亦た必要上同一の擧に出でざるべからざるを覺悟せよ。

　第三、我が國力の爲し能ふ限り微弱なる同胞諸共和國を扶助擁護するは、吾人の最大重要事として目する所にして、同時に又た吾人の最大義務たりとす。夫の個人相互の關係を規定する倫理的原理の漸を以て徐々に發達しつゝありしと同じく、各國相互の間にも亦た或る責任を負荷すべき大義務の存すること漸く認められ、同時に倫理的原理の次第に各國相互の關係を規定するに至るべきや疑を容れず。試みに或る不慮の災害の世界何れかの地方に生ぜしと假定せよ。乃ち此の感情の生起する特に著るしきを見るならん、例せば或る一國內に飢饉の生じ若くは惡疫の流行することあらば期せずして世界の諸國より多くの同情及び或る救助の來るあるを見るべきや必す。且つ小邦弱國が或る不幸の境遇より脫せんとして苦心奮闘し而も猶ほ意を遂する能はざるに際しては、或る義心ある強國に向つて援助を乞ふの必ずしも不當ならざること亦た漸く認められ、最近の史乘に徵すれば、此類の例歷々徵すべきあるなり。

　然れども吾人は列國相互に扶助擁護することの必ず或る適當の範圍內

に限られ、是より以外一歩も逸軼するなからんを欲す、若し此かる理想的狀態の充分に現實にせられんことを望むあらば、洵に嗤愚の甚だしきものといふべく、其の結果或は野心國の乘ずる所と爲り、延いて苦々しき擾亂を釀す無きを保せず、豈に戒めざるべけんや。

ウヰルヘルム二世とルーズヴエルト氏

「ポウルトネー・ビゲロー氏」

テオドール・ルーズヴエルト氏と維廉二世とは、一は民主政體の代表者にして一は神權を擁せる帝王たりといへども多くの點に於て甚だしく相ひ類似せるを見、仔細に對比すれば頗る趣味あるを覺ゆ。

此の兩主權者は、年齒約と相ひ同じく、共に身體の强健なるを以て著るし。

此の兩主權者は、其の學校生活に於て共に相ひ同じきを見たり、即ち獨逸皇帝は幼時公立學校に入りて常に獨逸公民の子弟と席を同くして學び、稍と長ずるに及び、更に大學に入りて同級の學生と卓を列れて學びたること、實にルーズヴエルト氏の就學せると異なるなし。



THE JAP—"Sit down and take it easy!"
—May in the Detroit *Journal*.

此の兩主權者は、共に衷心よりして遊戯を愛し、同窓の學友を忘れず、一はボーン大學に、他はハーヴアード大學に、紀念すべき剛毅及び友愛の記錄を遺せり。

此の兩主權者は、共に壯くして好勇の氣風を顯はせしが、而かも決然たる態度の裡、毫も爭鬪を喜ぶの兇態なし。然れども壯時亦た共に頗る溫順、嘗て他の感情を害ふ如き言を發し、又た行爲を加へたること無し。

此の兩主權者は、共に尙武の氣象に富み、苟も好機の投ずべきある每に乃ち軍隊の演習を事とす。特にルーズヴエルト氏は、大學を出づるや否や直ちに紐育州民兵隊に編伍し、尋いで西班牙との戰爭起ろに當り、躬ら騎兵聯隊を編成し、之を帥ゐて奮戰し、以て玖巴の獨立を贏ち得たり。

此の兩主權者は、共に海事に熱心にして、海に關する孰れの事にも非常の趣味を有す。維廉二世は玩具に均しき一小フリゲート艦を艤装してポツゲムの水上を飾り、親ら之を運

轉じ、縱橫に航駛して以て樂みと爲す。蓋し此の小フリゲート艦は、今を距る約八十年前に英國皇室より贈與されたるものに係り、恰も現時の戰鬪艦上に裝載せるヤッケ(櫂を用ゐて漕ぐ快艇)と伯仲に間に在りとすべし。ルーズヴエルト氏は、オイスターベーなる鹹水の邊りに成長し、ロング島の瀨戸海內にヨットと集合場を設けて勝負を樂み又た海軍擴張の喫緊急要事たるを主張するに於て毫も獨逸皇帝に遜る所あるを見ず。

此の兩主權者は、共に其の數代の祖先とは甚だしく人格及び性行を異にし、共に世界の大勢に注目するを怠らず、共に旅行を好み、書籍の上よりは寧ろ實地に就きて智識を獲得するに勉め、共に一帝國一共和國內に踞蹐せずして廣く世界を家とするの念を有つ。

此の兩主權者は、共に辯舌に長じ、優に雄辯家たるの名を値ひすと稱せられ、其有する人望の幾分は確に辯舌——人心を收攬するの力を有する辯舌——よりすといひて可。

獨逸歷代の皇帝中、種々なる事件の硏究に身を委ねしことの多き現皇帝の如きはあらず、又た親ら世界列國の顯著なる人々の名を記することの多き現皇帝の如きはあらず。現時の內外會社に現はれたる雜多の事件中、現獨逸皇帝が各々其の專門の大家に就きて敎示を受け意見を敲かざるものは一も之れ有るなし、試みに卿等の擇ぶ孰れの事件にても列擧せよ、無線電信や、米國のヨットや。バビロンの碑文や、冷藏の植物や、英國の戰艦や、ホーヘンゾルレン家戲曲の結構や、膠州灣の風土に適する兵營の構造や、其他あらゆる事々物々を列擧せよ、帝が一として各々其の專門の大家より敎示を受けて座右の記錄に書き留めざるものなかりしを見ん。而して獨逸皇帝に於て見る所のもの、亦たルーズヴエルト氏に於ても同じく之を見るを謂ふべ也。

或る有力なる外國人の北米合衆國に來る者にして我がルーズヴエルト氏に面晤する後、其の同情ある熱心に對して感謝の意を作こさゞる者なく、而してテオドール●ルーズヴエルト氏が能く複雜なる新生の事實を咀嚼呑化するの能力を有ち、專ら忠實に引照參證して以て正當なる結論を下だすを旨とすること恰も夫の維廉二世と相似たるを言ふは、殆ど公論たるに幾かし。加ふるに此の兩主權者は、或る必要に際して一たび其の心を決するや。乃ち其の祖先の如く頑强に固執して猛進邁前するを常とす。

此の兩主權者は共に其記者たるの性能を有し、共に趣味ある公的問題に就きて臣民に敎示する所あるの重要なるを知了し、共に萬機を綜裁するの傍ら、著者としての名亦た頗る高く、共に簡潔なる文章と的確なる判斷とを以て著はる。時として其の筆にし又た口にする所、外交家の所謂輕擧妄動に逸するを見ることありとはいへ、讀みて惰氣を催ふさしむる如きもの若くは迂濶實際に用無き底の言は共に爲すを屑とせざる所。而して此の輕擧妄動に陷るを免れざることこそ、却て吾人をして此の兩主權者を親み且つ愛するの念を萌さしむる所以なれ、何となれば此の兩主權者が亦た吾人と同じき缺點を有する事は、即ち其の吾人と同じく人類たるを證する所以にして。又た人類として吾人と同一の性能を稟けつゝあるを證する所以なればなり、況や過ちて後直ちに改むるに憚らざる者に對しては、吾人固より其の過ちを遣るゝに吝ならざるに於てをや、實に維廉二世は其の一たび杜國大統領クルーゲル氏に宛てゝ發せし祝電を後ち直ちに取消すに躊躇せず、又たルースヴエルト氏の日記を檢覈すれば、此の似たる事件の記さるゝを見ること罕れならず。

此の兩主權者は共に邁往勇進の氣象に富み、胸裡常に何事かの計畫を絕たず。其の爲さんとする所は、概して內外國人の均しく嘉納稱贊するものなりといふべく、共に臣下たる幾千萬民衆に對ひて、家庭の幸福は

何人もの身邊に在りて其の取るに任かす、特に其の取るの易きに於て皇帝も大統領も將又た一介の匹夫も異なる所なきを誨へて諄々倦まざるを見る。皇帝萬歳、大統領萬歳。

以上二篇近刊の「日本人」より轉載す

露國皇帝と內治改革

「スペクテートル誌」

吾人は我同業者の如く、露國皇帝とゼムストヴオ委員との會見に付て多くの印象を感ぜず。若しニコラス二世にして歐洲政治家の如く決斷を表するの人物たらしめば、彼れが此等の委員を引見したるは、大體に於て有望の兆表たりと謂ふ可し。然れども事實は全く之れに反したりき。二世は頗る躊躇の色を示したる後、に彼等を引見し、而も單に　人として之を引見せずして代表的人物として之れを引見したりき。二世は彼等が露國の警察政府より來れる行政の現制度を非難して毫も忌憚なきこと、恰も共和國に於ける發言に似たるを見て、さまて逆鱗の模樣もなく



THE EUROPEAN CIRCUS.
The well known circus-rider, Oscar, finds that he can handle one horse much better than he did two.
—*Kladderadatsch* (Berlin).

冷靜に其の陳述を聽きたりき。且つ彼れは委員等に向て、主權者は、『自己と合體して露國の不幸を救ひ、且つ自己の要求の爲に存する代議機關』を召集することを得べしと證言したり。故に此の會見は、前途に於ける最も望多き約束の一歩なりと謂ふ可きも、而も二世は決斷の人物に非るを奈何にせむ。彼れは彼れの父が曾て爲せし如く、或る能力の缺乏を自覺せり。此の能力は彼れ自ら之れを知るが故に、彼れは自己の決斷に依賴する能はずして、屢々無遠慮に彼れに勸告するを常とせる補弼者の最後の意見に依賴せり。而して此の補弼者は人格上の尊敬を二世に表するのみならず、彼等の利害と皇帝の利害とは同一のものなるが如くに皇帝に感ぜしむるなり。例へば將軍トレポツフ、ポベドノスチエツフ、諸大公、及び保守黨の重もなる首領の如きは、皇帝が人民の忠言を受けたるを以て、帝位の自由を減損したりと爲し、大に皇帝に不平を訴ふ可し。然れども彼等は恐らくは皇帝をして其の人民に與へたる證言を撤去せしむるを得ざる可し。何となればリネウイッチの統率したる軍隊は數日ならずして敗報を傳ふるの機會あるべ

きを以てなり。又首府に於ける露國官吏の一群は、其の執行を命ぜられたる野蠻的强壓手段に對して反抗の會合を開きたりき。但だ彼等は皇帝の諮詢の價値を減少せむが爲に、大に議會の權力を制限し、若しくは警察權を擴張して、議會の發言に干渉せしめ、其れをして殆ど無効なるに至らしむ可し。是れ決して空想に非ず、蓋し其の意向の如何を問はず、皇帝は代議院がセントペータースボルクに開設せらるゝの時に於て、自己の位地が如何なる狀態に置かるゝかを明白に理會せざればなり。顧ふに其の代議院なるものは、第一に言論の自由と彈劾權の無干渉を要求す可く、而して一旦之れを許與するに於ては、其の代議院は直ちに一種のパーリアメントなる可し。即ち或は輿論の援助なきが爲に何等の勢力なき議會となるか、然らずむば、輿論の全勢力を集中して其の言動は侮蔑す可からざる强固なる一議會となるべし。階級の代表機關は、曾て佛國革命時代に存したるものより有効なるものたるを得ざる可く、即ち斯くの如き機關は、或る投票、若くは人民の或る反抗に依て直ちに一掃せらる可く、而して貴族、商人、僧侶及び農夫に依て選擧せられたる代議士は、露國民の信任を得たる若くは之れを得ざる代議院の中に包含せらる可し。前者の場合に於ては、露國の人民は、代議の主義を以て人民の不幸を除くに必要なる原素と爲すまでに進まざるが故に、之れに依りて何事をも遂行する能はざる可く、隨つて指導なきの革命は進行し、恐らくは血を流がすに至らざれば、止まざる可し。後者の場合に於ては、議會は組織的と爲る可く、而して成文憲法の發布するまでは、實際に於ては統御を甘むすべし。皇帝は此等の情勢を視るの眼力なく、彼れは唯々議會が彼れ自身と一致して、カーライルの所謂る音樂的諧調ある投票を現はし、專制を制限するよりも寧ろ之れを强固ならしむべしと望めり。

然るに總ての歴史は彼れの希望に反對せり。二個の勢力の中、其の一は結局他の一に優越せざる可からず。而して若し議會の背後に人民の援助あり、其の議會にして人民の援助を基礎とするに於ては、專制主義は終に存立するに由なからむ。ロマノッフ家が此の理由を領解するまでは、露國に善政府を建設するは到底期す可からず。而して彼等人民の進歩は亦容易に望むことを得ず。

英國の新聞雜誌記者が露國の問題を論ずることあれば、セントペータースボルクの政府は、必らず彼等を目して露國に敵意を含める議論を爲すものとせり、吾人は毫も秘密なる敵意を露國に抱かずして公平に如上の意見を述べたり。吾人は自由人民を指導する强固なる政府の露國に起らむことを望めり。英露の間に於ける領意は、世界の平和に向て思想上の擔保を與へたり。而して世界の平和は、此の兩文明國の孰れかの衰頽及び萎靡に依て既に危うせられたり。露國には强固なる政府の代りに一億五千萬の白人に對して無政府主義を唱ふるものあり。此の無政府主義は、吾人の目には最も恐る可き形象を示しつゝあり。故に露國に於て佛國に於けるボルボン家の沒落に類する事體の現存するが如きを見るは。吾人の甚だ痛心する所なり。露國の智識ある階級は、露國に現存せる總てを嫌へり、寺院も、憲兵も、能力及び人民の信任に乏しき執政者も、實際に適應せざる教理を有する人望ある首領も、財産の私有に反對する社會黨も、戰敗と將校の怯懦に依て殆ど解體しつゝある軍隊も、總て皆露國の悲むべき事體として之れを嫌へり。吾人は信ず、此等の事體は、唯た一の强固なる政府を建設するに依て救濟し得べしと。即ち强固なる政府は、國事一切を指導しつゝある間に、人民の個人的自由、信仰及び言論の自由、其他行爲上の自由を確保すべきを以てなり。惜いかな皇帝はゼムストヴォの委員と會見したる場合に於てすら決斷を示さず、彼れの權力を分與するに躊躇し、若し議會を開設するも、彼れは獨裁統治者たる

べしと思惟せり。勿論斯く思惟することは決して彼れの誤謬に非ず。何となれば彼れは生れて彼れの權力を神授なりと信じ、天は必らず此の權力を保護すべしと豫期し居るを以てなり。然れども是れ實に皇帝の不幸なり。吾人の考ふる所に依れば、露國の連戰連敗は、皇帝をして實際の改革を餘儀なくせしむべし、其の改革は、人民に自由を與へて官府制度を破壞するものたる可し。此の推測は決して實例なき空想より來れるものに非ず。澳國のフランシス、ヂヨセフは、外部の敵に依て智根を刺激せられ、更に少年時代の教育を拋棄し、千八百六十七年以後三十八年間臣民の各種團體に依て信服せられたる温和なる帝政を行ひたりき。澳匈國民は多くの進歩を爲さずと雖も、此の帝政の下に於ては、舊新世界の在らゆる諸國に於けるが如く、生活の幸福と相當の自由を得たりき。然れどもフランシス、ヂヨセフは、青年としては一の專制君主たりしと雖も、必ずしも柔弱なる人物には非ず。而して彼れは適材なる補弼者の永く繼續せむことを望めり。彼れはニコラス二世の如く決して法律上の專制君主に非ず。然れども西歐の諸帝王の相續者としての彼れの自負、即ちフランシス家の決して喪失せざる此自負は、彼れをして個人的勢力の無限なるを誇らしむるに至れり。ニコラス二世は彼れの競爭者の如く戰敗の恐る可き結果を受けざる可からず。然れども吾人は寧ろ彼れが如上の結果を受くると同時に、其の殘餘の力を人民との絕望的鬪爭に役さざる可からず。今や人民は彼れの權力を殺がむが爲に自由を要求しつゝあるに非ずや。彼は善良なる指導者を有せず、且つ彼れは元來高度の冷靜を有せず。澳國皇帝は曾て彼れに劣らざる不幸に遭遇したれども、唯々冷靜の美質を有するが爲に其の不幸を脫却したりき。彼れの位地は彼れの激烈なる敵にすら憐まるゝに至れり。



REVISED.
WITTE—" With these few changes, my dear Komura, we accept your terms."—Sullivant in the New York *American*.

日本の外交を秘密に附したるを難ず

「倫敦タイムス」

此の問題に就きて予は決して始めより日本に秘密を要求するの權利なし

と謂はざりき否日本は秘密を要求するの權利を有す然れども此の權利を主張するは果して日本に取りて策の得たるものなりや否やは予之を疑はざるを得ず予は寧ろ小村男の提議を以て策の得たるものにあらずと信ず日本の講和全權委員等は能く事の漏洩を防ぐべしと思惟したるに似たれども是れ到底不可能なりき又復た斯くの如きは出來得べき事にもあらざるなり現に談判の模樣は一日と雖も外部に洩れざる日はあらざりしに非ずや既に此れ拒ぐべからずとせば日本全權に取て眞の問題たるものは其の報道は正確なるを欲するや將た不正確なるを欲するやに在り加之彼等は談判秘密を主張するが爲に一時の事とは言へ前週までは一道の寛廣なる海峽を通じて日本へ日本へと流れたる米國同情の全潮流をして或るは沮止し或るは他の方向に轉流せしめ或るは全く之を排除し去るに至れり目下ポーツマスに在る新聞代表者は百二十名あらん而して其百餘名は米國新聞通信員ならん彼等の始めて此の地に來るや殆んど一人の例外無く悉く日本贔屓なりき今日は則ち如何ん勿論彼等は全然露國贔屓となれりとは謂ふ可らざるも或る程度までは露國の勢力範圍内に入れりと謂ふも可ならん彼等は固より自己一個としては依然日本に贔屓し而して彼等の新聞及び其の國民も亦依然として日本贔屓せり然れども彼等が自己の新聞社に宛てて發送するを得たる通信の九分九厘は悉く露國側より出でたる報道たるに於て彼等の感情が露國に對して以前よりも餘程懇切となり來れると毫も怪しむに足らざるなり或る日本の大官は之に對し答へて云へり然り之あらん唯々吾人は世界の事の眞相を知るに至るまで甘んじて之を待たん其の時至らは世界は初めて吾人の志を諒とせんと



露國軍事界の内幕

福本日南

從來歐洲列國中陸軍國として有名なるは先づ露獨の兩國を推すべし。而して兵制に於ては何人も皆獨逸を以て其稱首とせざるものなしと雖も、兵數に於て、又勇猛に於て、殊には繼續の意氣に於て到底露軍の敵たるものなかるべしとは、近數十年間歐洲を支配せし觀念なりしなり。夫れ故に日露開戰の噂喧傳せらるゝや歐洲の輿論は殆ど一致し、「海軍こそ日本の特徴とする所なれ、陸軍に於ては到底露國に匹敵すべくもあらず、但し日本陸軍の精錬にして鋭敏なる、又其勇猛にして殊に愛國心に富める、初戰に於ては多少の勝利を得べけんも繼續一年の久しきに亘れば必ず勝敗地を易へ、

日本軍は遂に大陸より追放せらるゝに至るべし」との豫想全歐を支配したりき。何ぞ圖らん、戰鬪一度開くれば、攻城に、野戰に、每戰日本の勝利に歸し、露國が近來無比の大軍を極東に集中したるに拘らず、彼が如き見苦しき敗北を取るに至らんとは。是に到て世界は驚嘆せり。而かも二度喫驚せり。彼等は日本の豫想外に強きに驚き、更に露國の豫想外に弱きに呆れたり。然れども是れ素より凡俗の驚きにして眼あるものは最初より已に斯の如くなるべきを疑はざりしなり。何となれば露國軍事界の內幕を洞觀したるものは露國の軍氣の腐敗せる、近年殆ど其極に達し、此腐敗せる軍氣が露國をして彼が如き失敗に陷らしむべきを豫想し得たりしを以てなり。予は玆に露國の軍氣頹廢せる事情の概略を語らんと欲す。乞ふ戰爭終結したるの故を以て輕々之を看過するなからんことを。

露國の軍氣をして今日の如く廢頹せしめたる第一因は實に人々をして相疑はしめたるにあり。露軍が人々相疑の惡弊を生ずるに至りたる由來や已に久しけれども、黑鳩公の陸軍大臣となりし以來、殊に其甚しきを加へたり、故奈何といふに露國の所謂官僚政治、武斷政治の結果は露國人を驅りて次第〳〵に革命黨に追込み、革命黨の數、年一年よりも增加せり。而して彼等革命黨は、何とかして現在の政府を廢し、並びに現在の政體を廢して、憲政を露國に與へざれば滿足せざらんとす。然るに專政政府の積威のある所は兵力を以てするにあらざれば之を打壞すること能はざるなり。悲しい哉、革命黨は其數こそ澤山あれ、兵器を手にせざるを以て假令、竹槍蓆旗を以て蜂起するも、立處に打破らること必定なり。かるが故に如何にかして軍隊を味方に取り入れんとの事が彼等近來の一大事業となれり。故に彼等の中に遠大の希望を抱くものは成るべく革命黨たることを世上より指目せられざる革命黨の子弟をして陸軍士官とならしめて軍隊中に入れ、此等の士官をして軍中にある間に氣慨あつて當時の政府並びに政體に不滿を抱く所の同僚を求め、以て漸次之を革命黨に引込むことを勗めしむ。夫れ故に露軍將校の間に革命黨が漸々增加しつゝあり。斯く將校を味方としたる次には此等の將校の手によりて其部下なる軍隊を味方に引込むことを勗む。而して一朝機熟して革命の兵を擧ぐる時に當てや此等の軍隊を以て直ちに應ぜしめんとする下地なり。是に於て專政政府は鬼胎を抱き初めたり、若し斯くの如くして革命的精神が軍隊の間

に磅礴せんか、それこそツァーリズムの終焉を告ぐべき時なれ。是非之を防がざるべからずと鋭意之が豫防に取懸りたり。而して此防壓の任に當りたるを前陸軍大臣黒鳩公なりとす。黒鳩公は其防壓の方法として探偵政策を採用せり。即ち自家の信任する士官を各聯隊に配置し、其擧動革命黨に類似するものは誰彼の容赦なく片端より秘密に報告せしむ。夫れ故に各聯隊には必ず大臣より委任せられたる探偵あるあり。之を第一探偵となす。次に各聯隊長に内命して聯隊長の眼鏡を以て部下の將校中に革命黨らしきものあるを認れば直ちに之を陸軍大臣に報告すべきことを訓令せり。爲めに第二の秘密探偵が聯隊中に居る譯合となる。かるが故に一の聯隊中には二種の秘密探偵行はる。何となれば一方には陸軍大臣より入れたる秘密探偵あり、他方には聯隊長自身が使ふ所の秘密探偵あるを以てなり。而して眞正の犯罪人と指目せらるゝ革命黨士官の中にも亦二種あり、其一は Association Revolutionnaire de l'Armée にして其二は Organisation Militare Revolutionnaire なり。此二組は各々手を分ち、又種々の法によりて人々を革命黨に誘引することを勗む。此等を探偵せんとするものなれば、上の二種の秘密探偵は時として同じく革命黨の如き面貌を裝うて探偵せざるべからざることあり、然らざれば眞正の革命黨の消息を探偵するを得べからざればなり。夫れ故に軍隊中には恰かも四種の革命黨あるかの如き觀を呈す。然らば人々相疑はざらんと欲するも得べからざるなり。從て實に滑稽極れる現象を屢々見ることあり。例へば陸軍大臣直轄の探偵士官と聯隊長附屬の探偵士官とは同じく政府内の人なれども各々獨立して探偵に從事するを以て互に相知らざるなり。互に探偵を依囑せられたるものなるを相知らざるなり。夫れ故に大臣直轄の探偵士官より、聯隊長附屬の探偵士官を見れば、何となくクサイ所あり、怪しき所あり、依て直ちに之を陸軍大臣に報告して我聯隊中の某々、某々は革命黨に相違なしと存ずといふ。同じく聯隊長附屬の探偵士官より陸軍大臣直轄の探偵士官を見ても同一の感あり、之れも亦我聯隊長の手を經て之を密告す。夫れ故に陸軍大臣が報告を開き見れば自分が遣したる探偵士官が革命黨なりと訴へられあるを見ること屢々なり、されば其報告は常に眞僞相混じて孰れが孰れなるかの區別に困しむ。此點に於て黒鳩公を見るに餘りに名將なりとも思はれず。凡そ軍にありて第一の禁物たるものは人々相

疑ふといふことなり。一度び人々相疑へば軍の一致は何によりて維持し得べき。夫れ故に兵理に通ずるものは千古の上より軍中には私語せずとさへいふにあらずや。即ちさゝめごとを以て口耳相傳して語るすら軍中に疑惑を生ぜしむる基なりとして之を避くべきことを教へたり。然るに今や四種の胡亂の者軍中にある事なれば人々相疑はざらと欲するも得んやなり。斯の如き軍を提げて强敵の前に立つも、一致の働作をせしめんこと、よし千古の名將たりと雖も難しとする所なり。予は思ふ、今回の戰爭に露軍が常に一致の運動を缺きしは此等軍中相互間の不和が一大原因たりしに相違なしと。

斯の如く軍中に探偵政略の行はるゝ結果として各軍の將校より無辜の罪人を出すこと實に夥し。一例を擧ぐれば革命黨の方もなかく狡猾にして革命黨將校の居る聯隊中に有爲の青年士官ありと見れば之を味方に引き入れんとして百方力を盡す。最初よりしては容易に其目的を告げず、兎も角も之と緣故を結び、相親みて友人となる。扨軍外の革命黨中には種々の機關あり、革命黨の娘にして美人あれば之を誘惑の具に用ふ。即ち軍中の革命黨は今味方に引込まんとする士官を誘ふて或時は一のカッフイに遊び、又一のバールに遊ぶ。忽ち見る、如何にも上品にして貴族の令孃かと見紛ふ如き美人あらはれ、バールならば一舞舞ひ給はずやとい ひ寄り來るを。而して其間には一種いふべからざる戀々の情あるかの如く見ゆ。誘はれたる士官は是等の秘計あることは更に知らず、思ひ掛もなく非常の美人より惚れられたるに恐悅し、天下の好男子は乃公一人なりと大得意となりて傍なる朋輩にも之れ見よがしに踊り、愉快極まつて有頂天となりて歸宅す。之れ革命黨に引込まるゝ門戶にして多くは此種の手段より革命黨に染み込むなり。然るに探偵士官の方にては又鵜の眼鷹の眼を以て士官の遊び場所などに注意し、總ての士官が絶えず出入するカッフイ、バール等には同じく探偵士官も出入するを怠らざるなり。勿論孰れが探偵なるか、孰れが探偵せらるゝものなるやは毫も辨へ知るに由なく、同じく笑ひ興じて戲れ遊ぶなり。而して美人に惚れられたる士官などは寧ろ朋輩に誇つて君等は望んでも出來まい位の大悅氣をふりまきて歸宅す。何ぞ圖らん、翌日此大得意の士官の頭には青天の霹靂とも見るべき官職剝奪の命令忽ち落ち來らんとは。當人は何の趣意にて剝奪せらるゝや殆んど夢の如

き心地すべし。而して甚しきは官職剝奪のみに止らず、牢舎に繋がれ、否らざれば西比利亞行に押付けらる。是れ即ち探偵士官の爲めに告發せられたる結果なり。之に依て禍を蒙る士官は年々歳々實に夥しく、優に數百を以て數ふべし。殊に知らず眞正の革命黨は巧に其行動を誤魔化して容易に發見せられず、其同僚に對し、殊には其部下に向て次第〳〵に革命の福音を擴げつゝありとは。其證據には軍中に革命的文書を入るることは一切嚴禁せらるゝに拘らず、何時如何にして何處より入るか、革命煽動の文書が何れの聯隊にも入り居るなり。之が爲めに軍の革命熱も亦年一年と昂騰す。現に今回の日露戰爭に於ても西比利亞軍中に士官兵卒打ち寄れば沙上に偶語して他年一日彼得堡の政府顚覆の相談をなすもの尠からずとの報告がリネーウッチ將軍の手によりて本國に通知せられたるを見たることあり。又彼のポタンキンの事件の如きも其一例なり。

此他に露軍の大腐敗を招ぎたる一原因あり。即ち露西亞の社會は近年非常の奢侈に傾き、金を使はぬものは男にあらず、立派なる男にあらず、ゼントルマンにあらずといふ有樣なるに歐洲の軍隊中露國の士官程俸給の少きものなし。歐洲第一の薄俸の士官を以て歐洲第一の奢侈の社會に處す、其困難や實に一方ならず。通例少尉の月俸は三十九ルーブル半、住居費として五ルーブル八十三コペック。中尉の俸給は四十一ルーブル、住居費として十六ルーブル、七十コペックを補助す。然るに露國の現狀にては此等の俸給の大部分は着物のみに要せられ、食費としては殘額幾何もなし、故に中少尉の貧乏は非常なり、彼國軍隊の不規律なる中少尉にして屢々小遣を兵士より借るゝとあり、而して兵士より借れたる御禮として時々レストーランにて晩飯の御馳走をせざるべからず。夫れより大尉となれば少しく月俸上るも大概此國の社會にては大尉となる頃妻帶する風習なり、されば大尉となれば妻君に奉ぜざるべからざるに至りて一層の困難を極む。大尉は貧乏の極點なり。さらば飲まず食はずして爪に火を燈すが如く一生月給にて維持せんと欲するも已に頭から其不足なること明かなり、尤も極めて正直なる男は之を以て維持するものあるも、此等の男は薩張駄目なり。有爲の士官にして他日聯隊長ともなり、旅團長ともなり、運よくば師團長ともならんといふ好漢ならば、かゝるみじめなる生活を爲しては駄目なり。矢張り借れられる丈けは借れ、遣へる丈けは遣はざるべからず、而し

て當時の羽振よき將軍及び貴族等の交際社會の立物たる人と交際せざるべからず、此交際をなさず、職を守りて月給で飯を食ふ位の男ならば最早や其前途は知るに足るべく、少佐位は行止りなり。故に八方借の無理算斷をなし盛んに金を遣ふ。かゝる次第なれば金の足らざるは當り前なり。罪惡其本に孕れざらんと欲するも得んや、終に歐洲の社會をして「露國の軍事秘密は一として知られざるなし」といふ噂を立てしむるに至るは此貧乏が作り出す所のものなり。即ち軍事の秘密を外國に賣り、其不義の利益を以て己れの缺乏を補ふなり。從て獨探や、英探や、墺探や、探の多きこと實に夥し、ヒヨットすれば此中に日探も交り居るやも知れざるなり。扨大膽にして亂暴なる連中は此探に落るも比較的正直にして愛國心の本義を思ひ、探まで落ち能はざる者は山程に積りし負債の償却法なし。此等の手合は又夫れ相當に穴埋の方法を案出す、即ち首も廻らぬ負債を荷うて其間を兎や角と切り拔け、聯隊長までなりし時は即ち此負債の償却時なり。一度聯隊長に上れば聯隊經濟とて聯隊に對する被服、糧食其他の費用を一切管轄する任に當る。是れ即ち聯隊長其人の負債の期滿免除の時期なり、如何にして期滿免除になるかといふに兵隊の口をつねり、軍馬の喉をしめ、被服の上前をはね、其他の軍事品の棒先を切り、かくして二三年間聯隊長を勤むる間に辛うじて多年堀り來りたる穴埋めをなす。此等は露國にありては上等の部類なり、品行方正の君子なり。上等のもの斯の如し、其他は推して知るべきにあらずや。近年起りたるコルネル、グリンム事件の如き其最も著しきものにして小說家をして之を書かしむれば最も趣味ある小說となり、作劇家をして之を仕組ましむれば一世の喝采を博すべき戲曲となるべし。其間には將軍あり、宰相あり、外交官あり、美人ありて極めて錯綜したる事件なれば又改めて物語るべし。（文責在記者）

此文の最終に記したる最も興味ある、最も戲曲的なる
コロネル、グリンム事件
は來る十二月の誌上に掲載せらるゝことを約せられたり。

前號の「露國宮廷の內幕」中ビセドノチエフとありしはペブドラソフの誤なり。

御製英譯に就いて 野口氏に答ふ

御送附の中央公論今日落手、野口氏の「御製の英譯」の批評一讀し、失禮ながら同氏日本學力の聊か不足なるに驚き申候、小子の英譯は其前文に斷り置きたる通り、殊更純然たる英詩體を避けたる事に有之、去りとて全くの散文としては少しも興味がなくなる故、丁度其中間を行き而も原作の意味ハ片言も殘さず、又餘計に引延さず、以て聖意を貫徹する事に勉めたる次第にて英文に誇らんとする趣意は少しも無之、就ては目下甚だ多忙中の時間を少々相偸み一應御答致候

八月五日夜巴里に於て

末松青萍

「見等は皆」の御製に“I suppose”「予は想像する」と云ふ様なる文字を入れたるは不都合との野口氏の論なるも、予に於ては此文字若くは之に類似の文字が必要と斷言す、原作に「山田守るらん」とあり、凡そ「らん」と結べる和歌は「なり」「けり」などと大に趣を異にす、且つ此御製に於て「らん」と結べるは殊に其味あるなり、而るを「なり」「けり」同様に直叙體とし想像の意味を皆無にせば甚だ原想を毀損するものと云はざる可からず、是れ小子が「らん」を譯するに苦心の結果此疑問體の文字を加へたる所以なり。

予が「山田」を“lonely farms”（淋しき田畑）と譯したるを野口氏は「淋しき」は無用の文字とし、御自身の考案を示され“Mountain and field”「山及び野」との二物とす、少しも詩的想像なきには驚きたり、山田は山間の田の意にて、此處自然に寂然の意を含めり、但し直譯にすれば「山の田」とするが當然なれども其にては此處少しも詩情を發現し得ざる爲め「寂しき田畑」と譯したるなり、野口氏は猶異議ありや

氏は又曰く。alone「獨り」と云ふ以上は“of hone”「家に殘りて」は無用なりと論ずるも、「獨り」にして「家に在らざる」事もあり、又「家に殘り」ても「一人」にあらざる事あり、此處御製に「翁や一人山田守るらん」とあるは、老翁一人家に殘り留守番を爲し居るならんの御想像にて即ち「獨り」も「家に殘る」も双方共に肝要の思想なりと思ふ、野口氏は何故に of hone を以て無用とせらるゝや

野口氏は又 to the front（直譯「前方」尤も戰鬪方面と解する事も出來れども其には何處かに戰鬪の意味を表する文句なくては漠然と爲ると思ふ可し）とある以上はto do their duty all under arms（皆武器の下に其職を盡す爲め）は不用なりと論ぜるも、是亦其意を解せず、御製に「軍の庭に出果て」とあるは即「皆々君國の爲め

兵器を執り其職を盡さんとして戰場に赴き了り」との意義なる事明なり、故に單に前面に向ひとのみよりも、下句を加へたる方能く事情を盡すなり、而も少しも原意以外のものを蛇足せしにはあらざるなり。

「夢醒めて」の譯に Each time（每に）と加へたるを野口氏は、難ぜらるゝも、是も日本語を能く解せられぬより起れりと思ふ、御製「夢醒めて先てそ思へ」とあるは「夢が醒さへすれば其度每に思ふ」との御趣意なる事明なり、單に「夢が醒て思ふ」と譯しては原意を盡さず、因て故さらに「每に」を加へたるなり、能く味ひ玉へ。

千早振神を翻譯して so stern and just（あの通りなる嚴正公明）と形容詞を付したると難じ、是れ不用なりと野口氏は難ぜらるゝも抑も千早振は「千齒破る」の意にて、鬼神の靈怪力を表したる形容詞なりとは冠辭學者の説なり、今時多くの（冠辭は其意味を失し又理由もなく妄用する者あるも是れ當初の眞意に非らず、故に予は此處に千早振を右の如く形容辭に譯したるなり、（冠辭は無意味の冗語として之を一切抛擲するよりは勝れりと思ふ、故に此譯語不用に非らず、

又同じ御製の譯中に as I dare think「朕は敢て然りと思ふ」と想像的文字を加へたるは、兒等の御製の譯の想像的文字と同一不用と論ぜらるゝも是亦「神の心に叶ふらん」の「らん」を譯したるなり、「らん」と「なり」「けり」の區別を爲さずして國歌を讀みては眞に趣意の索漠を來すのみならず大に意味をも害するなり、

「つはもの丶心」の譯中、We may fe sure（吾等は斯く思ふ）との句を非難せらるゝも、是亦御製に「いや進むらん」と「らん」の結びありて「なり」「けり」にあらず此意を漏さゞらんとせしなり、馬も騎者と共に進むなりと斷言しては、それこそ御製をして少しの餘韻なき者たらしむ故に「らん」の翻譯には予は殊に苦心したるなり、而るに世人は概ね此處に注意せず且つ他の譯者皆此意を譯せる者なきが如し、予は野口氏に忠告す若し和歌を論評せんとせば少し此等の點を研究し玉へ

「いくさ」人の御製中の「如何なる野邊」をwhat unsheltered places「屋根軒の掩もなき如何なる場處」と譯したるは、家屋もなき原野に坐臥する軍人の苦辛を想像し玉ふ御製なれば、此意味に叶はんかとての譯なり、端居とは椽先か何かに假りに坐居する意味なり、故に予は端居の御製を「假りに椽側に坐して月を見るにさへ」との意に譯したるなり、月を詩語中平灰の都合などに因り「ムーン」と云はず羅甸語の「ルーナ」を假用す

る事敢て珍しからず、漢詩に嫦娥など云ふも同類なり、且つ「ルーナル」を月に代用の形容辭に用ふる事、殆んど普通語なれば、何の意味なるやを解せず抔評するは野暮の極と思ふ、

以上は意義に關する諸點に關し大略答辯する次第なり、其他文句が弱いとか小さいとか云ふ樣なる議論數點あるも、是は人々の嗜好もあるべく敢て答駁を要せずと思ふ、

野口氏は曰く「予は極言する末松博士は詩人でない、詩の作者でないのである」と是れ予が甘じて受くる所である、何も極言するには及ばぬ、但し予にして一詩人を以て甘んずる積ならば、當世第一の詩人たる事敢て難きに非らずと信ず、予が閑散の時、興に觸れて折節戯れに吐き出したる詩歌に其道の達人折々舌を卷くと云ふて居るのが笑ふ可しだ、予は決して野口氏の小天地を侵す念慮はないから安心し玉へ、國家の爲め必要あり利益ありと思ふ如き時にこそ予は筆硯口舌を呵して世界の文豪武傑と火花を散して對戰する事もあれ、然らざる時間に於ては予は高山流水、世と相關せざるを無上の快樂とする的の一人なりと知り玉へ、漫言長きに渉る幸に貴社幷に野口氏の寛懷を願ふ

追白

僕の翻譯は之を日本語に再譯して原意を失ふ事なきや、再言すれば自由勝手に自家の意思を以て新作すると異ならざる狀を呈せざる事に力めたり、而して之を爲すには譯文を今樣體に髣髴する位に譯し得らるゝや否やを一々商量したり、試に最初の二首を再び直譯すれば左の如し。

一

四海みな兄弟の義を
結ふなる世なりと
われはおもへるに
如何なればこそ沖津風
ふきすさみては荒浪を
打あげ騷く事にかは

二

兒等は齊して戈とりて
其職分を盡さんと
軍の庭に出はてて
殘る翁や只ひとり
淋しき田畑やまもるらん

勿論譯詩に於ては此想を四句に纏めあること高覧の通

りに候、試に十六譯詩中孰れにても御取りなされ右の如くに再譯して見玉へ、孰れも毫末も原意に戻らざる事を見得べし、勿論語法は幾分の引延あり、是れ原意を保存する爲めには反て必要あるなり、何となれば原語を其儘に複寫すれば

（一）四海皆同胞と思ふ
波風何を以て立ち且つ騷ぐや

（二）諸子皆戰場に赴く
老翁獨り山田を守る

と云ふ如き骨のみの形となり、綾も姿も無くなる可し、漢詩ならば是も可なり、洋詩にては不可なる事御存知の通り、付ては幾分の引延は即ち國語の言廻はし振りを寫したるものと見る可し、夫さへ僕のは實は引延と云ひ得ざる位のものなり、高鑑を煩す。

天才に關する一新說

文學士 片山正雄

世俗多く天才（Genie）と能才（Talent）とを區別するに、或は程度を以てし、或は多數の能才を一身を兼ぬるを以て天才となし、兩者の間に判然たる差別を設けず。然れども斯の如き說は全然誤謬也。天才には種々の程度あり、高下ありと雖も、そは能才と何等の關係を有するものに非らず。例へば數學の能才は人或は生れながらにして之を有し、容易にこの學を習得す可けむも、其能才は創造力（Originalität）と同意義なる天才と何のなす所あらず。其人は之を有するに及ばざる也。之に反して特に秀でたる能才を有せざる天才の人あり、例へばノファーリス、ジャン・パウル等の如し。故に天才は決して能才の最高級にはあらず、全く性質を異にせる所の者也。故に之を比較計量すること能はず。能才は遺傳せられ得べし、一家族の共有財產たることを得べし。（音樂家バッハ一家）天才は之を傳ふ可からず。共通的にあらずして必ず常に個人的也。（音樂家

ヨハン・セバスチアン）

眩惑せられ易き凡庸の頭腦を有する人、殊に婦女子は奇才（Geistreich）と天才（Genial）とを同一視す。婦人は實際天才を識別する能力を有せざる也。たゞ奇拔にして多數の人と異なれるものあれば、則ち以て天才となし、戲曲家と俳優と、藝術家と技術家とを混同す。ニーチエの如きは實に彼等のためには理想的天才也。偉大なる人間は何事に於ても眞面目也。何ぞ奇才を弄するの暇あらむや。奇才あるより能無き者は輕薄の人也。そは何事に於ても深厚なる興味を有せざれば也。彼等は唯奇矯なる思想と言語とを以て人目を眩耀すれば足れり。其眞に事物の核心に中らむ事よりも、寧ろ己れが奇才の、他人の稱嘆を惹かむことを力む。ニーチエの如き、固より斗筲の輩を拔くこと測る可からざるもの有りといへども、其晩年に至りては、奇才を弄するに過ぎ、衒氣人をして嘔吐を催さしむるものあり。眞に惜むべしとなす。

天才に關する研究は在來生物學醫學的にして、此範圍に於ける僅少なる智識を以て、潜越にも至深至難の心理學上の問題を解決するに足れりと信ずるか、若くは形而學的立脚地の高きより下りて、天才を其哲學系統に收めむとす。研究の功果なきは、其方法を誤れるが故のみ。（ロムブロゾーとヘルマンチユルク）

大詩人の人心を洞觀するに妙を得たるや、遙かに凡庸の徒輩に優れるを想ひ見よ。シエークスピア、オイリピデス、ゾラ等の大詩人が描寫せる性格、人物の多趣多樣にして、指數ふ可からざるものあるを見よ。バインリヒ・フォン・クライストは「ペンテジレア」を描きたる後其正反對なる「ケッツェン・フォン・ハイルボルン」を作り、ミケル・アンゲロは「レダ」と「デルフアイ」のジビユルレ(巫女)とを其空想より造り出せり。イムマヌエル・カントとヨセフ・シエルリンクとの如く藝術の才に乏しきものは有らざる可し。而も藝術に關して、至深至眞の言をなしたるは、亦此等の哲學者なりし也。

一人間を認識し、若くは之を表現(描寫)せむためには、之を理解せざる可からず。然れども理解せむが爲めには、此の人と類似する所を有せざる可からず、此の人の如くあらざる可からず。其行爲を模寫し、評價し得むが爲めには、其行爲を生じたる、心理的條件を自己の心中に有せざる可からず。故に一人間を理解することは、この人を自己の中に有すること也。賊善く賊を知り、英雄善く英雄の心事を解す。素朴の人は、

亦等しく素扑の人を解し、矯飾者は亦他人の行爲を以て、矯飾の動機に出づるものとなし、素扑の人よりも善く矯飾者を解す。而して素扑の人は、その到底洞觀する能はざる所也。故に人を理解することは、自ら其人たること也。

果して然りとせば、人は最も善く自己を理解すべき乎。決して然らず。如何なる人も自己をば理解すること能はざる也。何となれば、自己を理解せむがためには、自己の外に出て、自己即ち認識及び意思の主體(Subjekt)を以て、客體(Objekt)即ち對象となさゞる可からざれば也。是れ猶ほ宇宙を理解せむがためには、立脚地を宇宙の外に置くことを要するが如し。而して、宇宙の意義に從へば、斯の如き立脚地を得むことは不可能也。故に自己を理解し得むものは、亦宇宙世界を理解し得む。故に人は自己の至深至奧なる本性を自ら理解すること能はざる也。甲若し理解せられたりとせむか、そは他人例へば乙に依るのみ、自己に依ること無し。他人甲と類似の一點を有し、而も他の點に關して、毫も同じからざる時は、この類似の點は甲の觀察の對象となることを得。即ち甲は自己を乙に於て、若くは乙を自己に於て認識し理解し得べし。故に人を理解することは、其人を兼ぬること也、亦其人にても有ること也。

先きの例に依れば天才とは凡人よりも遙かに多數の人を理解せる人也。ゲーテは如何なる罪惡、犯罪に於ても、自ら其素質を有せざるを覺えざるなく、其生涯の如何なる時期に於ても、之を理解せざるなしと云へり。故に天才は凡人よりも複雜也、豐富也。多數の人間を自己の內に兼ね有す、且つ之を有するの狀強盛にして活氣あり。故に大詩人の描ける人物は皆生氣ありて躍動し、人を動かすこと、現實の人物の如きはこれが爲め也。之に反して詩人の人間を理解すること淺膚にして薄弱ならむか、其創作せる人物は、精神なき傀儡たるに過ぎざるべし。

斯の如き天才の多面的性質は同時性(Simultaneität)と解す可からず。如何なる大天才も同日同時に一切人間の本性を理解する能力を賦せられたる者に非らず。人の有する廣大にして充實せる精神的素質は、其全本性の發展中に漸を追うて發露するもの也。而してそは亦一定の時期を有するもの〻如し。全生涯に於ける此時期の反復は、過去のもの〻反復にあらずして、益々高上せる範圍に於てすること、猶ほ螺旋の同一曲線を

反復すると同時に益々高上するが如し。如何なる人も、其全生涯に於ては、互に類似せる二個の時期を有すれども、其強弱即ち「振幅」(Amplitude)は皆異なれり。然るに天才は最大多數の人間を最高强の程度に於て有するが故に、其人の精神が愈々偉大なれば、此時期の振幅は益々著大なるべし。故に絶倫の人物は其少時より、常に「極端より極端に走る」の故を以て教育者の非難を受くるもの多し。而して此の如き經過は、通例著しく危機に類す。ゲーテが藝術家は屢々「破瓜期」(Pubertät)を有すと謂ひしは、前述の所論と揆を一にす、

天才は斯の如く强盛なる定期性(Periodizität)を有するが故に、其の創作に於ても、豐凶相繼ぎて必ずしも間斷無く活動すること能はざる也。殊に其凶年に於ては、自己の能力を過小視して、何人にも劣れりとなすことあり。即ち喜怒哀樂とも常人に卓絶し、或は絶望して自殺を企て、或は勃興渤起、不朽の大作、數日にして成ることあり。

又偉人の本性のみならず、其事業の質料及び精神も著しく定期的也、ゲーテの時に詩人となり、時に科學者哲學者となり、ニーチェの始め歷史及び文明に興味を集中し、後自然にむかひ、ビエルンソン、モーリス・メーテルリンクの或は神祕に傾き或は天眞を存せる如き、皆之れ也。天才の有する多面的性質が一定の時期を隔てゝ遞次、發露する如く、其面貌の變化亦た常人より頻般也。時としては實に人を異にするかと疑はしむることあり。ゲーテ、ベートーフェン、カント、ショーペンハウエル等の一時代の肖像をとつて、他の時代のものと比較せよ。乃ち吾人は一人間の有する面相の數を以て、其が有する天賦の觀相學的標準となすことを得べし。故に常に全く同一の顔色を有する人は、精神上亦必ず劣等也。之に反して天才の人が其交際談話に於て絶えず、其本性の新方面を露はし來りて、容易に端睨せしめざること、其の多樣なる面相の變化と等しき事實は觀相家の怪まざる所也。

却説吾人の所説に從へば天才シェークスピアの如きは、またフォールスタッフ(「顯理四世」中の人物)の卑劣と、アイアゴ(「オセロ」)の奸佞と、カリバン(「テムペスト」)の野卑とを悉く一身に兼ぬるに非らずんば、斯の如き人物を理解し描寫すること能はざるを以て、余が所説は詩人の道德的品性に累を及ぼすものに非らざる乎と問ふもの有らむ。又斯の如き天才の解釋に從へば、天才の人が無數の厭ふべき情慾本能を有するこ

とは否定すべきにあらず。

然れども、こは不當の非難也。佛の文豪ゾラが强姦の衝動を知ること深うして、而も之を犯さゞりしは、其他なほ幾多の心的性質を有したれば也。强姦者は其情慾の奴隷となり、詩人は其富豐なる素質を以て、其情慾に反抗せり。之れゾラが强姦者を知ること、强姦者の自己を知るに優り、此の如き情慾の誘惑の來らむ時、之を認識することを得たる所以也。即ち斯の如くにして、偉人が有する犯罪の本能は、靈化せられ、ゾラに於ては藝術の對象となり、カントに於ては「極惡」(das Radikal Böse)なる哲學的概念となれり。

人の心中に有するものは、其理解せざるものより、認知せらるゝこと速か也。陰謀は己に類するものを認むるに敏く、博奕を好むものは、他人に於ける同樣の性僻を觀破するに妙を得たり。然れども更に複雜なる人間は、他人を理解すること、他人自らより深し。是れ斯の如き人間は、他人及び其反對を一身に兼ぬるが故也。二個の事物の存在は、常に認知及び、理解の制約にして、意識は必ず對照を豫想す。天下のもの皆白ければ白の意識なからむ。況んや色の概念をや。單調なる音響は人をして速かに睡眠(無意識)に墜らしむ。醒覺せる意識の原因は、即ち二物の存在也。故に曰く一人間を理解するとは、其人及び其反對を一身に兼ぬるの謂也。

色盲は必ず補色(Komplementärfarben)に限る。赤色盲は亦綠色盲なり。黄色を認むること能はざるものにして、青色を知るもの無し。たゞ黄青兩色盲あるのみ。此法則は亦精神上到る處有効にあらざるなし。善く笑ふものは、亦必ず善く泣き、シェークスピアの如く、詭巧と滑脫とを解するものにして、始めてよく、其反對たる野卑鹵莽の趣を感知し理解することを得べし。

千差萬別なる人間の類型を一身に兼ぬること多きに從ひ、人間の一擧一動を看過すること愈々少く、其の感情思想及び意思を洞察すること愈々速かなるべし。故に世態人情に通ぜざる天才なし。天才が凡人の胸憶を觀破するや、實に一瞬時の中に在り。而して間々直ちに遺漏なく之を評隲することを得ること有り。

世人往々或る一種の趣味感覺に於て他人に卓越するものあり。天才も亦然り。ゲーテの星を好愛し、カントの之を崇拜し、ベックリンの海を愛し、ニーチエの山を好むが如き、人各性僻ありて、自然界の事物中殊

に偏好して之を觀取するの能他人に過ぐるものあり。理想的天才は此等萬般の性僻と能力とを一身に兼ぬるが故に、人事の外自然界の萬物に對しても、亦最も親密なる關係を有する人也。即ち天才とは最も多くの事物を最も強く意識する人也。天才の意識は最も明瞭也。普遍、即ち高等なる意識狀態は天才と一致す。

故に同時に普遍性(Universalität)は天才の標識也、特殊天才なるものなし。數學、音樂、若くは將棋の天才あること無くして、たゞ普遍的天才あるのみ。故に天才とは學ぶこと無くして一切を知る人也と云ふ定義を下すことを得べし。この一切を知るとは、固より科學が事實に附與したる理論系統にもあらず、西班牙王位繼承戰爭史にもあらず、はた磁氣學上實驗にも非らざる也。畫家は光學を學ぶこと無くして、晴天及び曇天下の水色を知り、詩人は性格論(カラクテロロギー)を究むること無くして、性格を創作す。蓋し人は天賦高きに從ひ、益々獨立的に冥想す。故に益々多數の事物に個人的關係を有すれば也。

例へば音樂の天才あることを許容する特殊天才論は能才と天才とを混同するもの也。一音樂家にして、眞に偉大ならば、其特殊才能の向へる「其言語」に於ても普遍的なること、詩人及び哲學者と異なること無し。ベートーフェンは即ち斯の如き音樂の天才なりし也。之に反して凡庸なる科學者若くは、藝術家の如く、狹隘なる範圍のうちに蠢動すること有り。ヨハン・シュトラウスの如き是れ也。此の如き人を天才と稱するは吾人の恥とする所也。

故に能才には無限の種類あれども、天才は唯一のみ。この天才は任意の能才を選擇して自家を發揮し得べし。故に一切の天才は必ず共通の性質を有すれども、この能才はたゞ天才の眞髓を發揮すべき媒介物なるのみ。例へば音樂家バッハは哲學者カントと、カル・マリア・フォン・ウェーベルは詩人アイヒェンドルフと、畫家ベックリンは、詩聖ホメールと比することを得べきが如し。

(右は Otto Weininger, Geschlecht und Charakter中の一章の要領を記述せしもの也、本書は其名の示すが如く、男女性格の差違を論したるものにして、理想的男性を以て、天才となし、理想的女性は非天才的なることを證したれども、前後の連絡無くしては、之を解すること難きが故に、余は男女の區別を無視して、たゞ天才其者に關するワイニンゲルが意見の要領を抄出したるのみ。この論若し天才の語が濫用せらるる我が文壇の論客をして、反省する所あらしめば幸甚也)

明治闇黒史（十）

有磯逸郎

○河野廣中等の福島事件（上）

『暫らく顔を見せなかつたが、如何したい。ナニ、騒動を見て歩いた。成程、今度の騒擾は、開拓地拂下事件以來の大事件であつたわい。燒拂といふやつは、舊幕時代に、大鹽平八郎が、大阪の市街を燒いて、持丸長者を脅かした以來、餘り大したやツは無いが、我輩等のやうな半生を闇黑の間に送つた者には、時々、此の藝當が、坐上の問題と爲つたものぢや。現に、我輩の耳に入つてゐる丈けでも、それは隨分あるが、中にも明治初年に、愛宕道旭、外山光輔等の公達が、佐久間象山を殺した熊本の川上玄齋や、大村益次郎を殺した土佐の岡崎恭助等に煽てられ、久留米の古松簡二、秋田の初岡敬二、長州の大樂源太郎柳川の古河十郎等と連絡を通じて、東京市街を燒拂はんとしたやつなどは、關係人の多かつた丈け、隨分目醒ましい計畫であつたやうに聞いとる。中途に、屁のやうに消えたのは、日本國の爲には、此上なき僥倖であつたが、頑固でかたまつた彼奴等には、或は殘念であつたかも知れぬ』

『その後大した計畫は聞かず。聞かぬ筈よ、燒拂なんて野蠻極まつた騒擾は、維新當時の如き變亂時代に然かも川上玄齋や、岡崎恭助のやうな頑固黨の遣る藝當て、頭腦の整つた、秩序時代の人間の遣る事柄ではなからうてはないか。處ろが、明治二十年頃迄は、ちよい〳〵起つて來たから、世の中は不思議なもの。先づ第一番に、明治六年の征韓論破裂後、起つた。何時だか咄したやうぢやつたが、土佐の少年、千屋歸一、宮崎岬等は、政府顛覆の手段として、東京市街の燒拂を企て、僅に增上寺を燒いた丈けで、千屋等が布子一て東京を逃げ出したとは、覺えとるぢやらう。その後北海道の官有物拂下事件の起つた時、人の驥尾を追ふ彌次馬連は、譯も判らずに、ちとばかり燒打騒擾を遣

つたやうぢやつたが、之は、大した騷擾に爲らず、何事もなく濟んだが、我輩等が中心に爲つて、陰謀を企てよつた民權時代には、群馬事件、加波山事件、續いて秩父暴動、八王寺貧民黨の暴動等、茶々無茶な事件をヌキにして、井上馨の條約改正騷擾の時にも、なんだか有志の間に、燒打計畫が有つたとか……否、此件は、餘り我輩は信ぜぬ、といふのは、時の役人共は、風聲鶴唳に驚いたので、實際はそのやうな大陰謀が企てられたとは思はれぬ。最も民論囂々としてゐた時に、良い年をしてゐながら、島本の爺さんは、ひよッくり「靑天霹靂史」のやうなものを出したので、事あれかしと待つてゐた壯士等の間に、這樣な風說も或は行はれたものぢやらうが、片岡健吉、尾崎行雄、中江篤介といつたやうな連中が、中心と爲つてゐた彼の時に、そのやうな危險分子があつとは、如何しても思はれぬではないか、……その後頓と音も沙汰も絕へて、我輩等もお蔭を以て、天下泰平を謳歌してゐたのに、日露戰爭に大捷を博して威名內外に赫々としてゐる明治三十八年の今日、白晝、公然、大臣官邸の燒拂が行はれやうとは流石の我輩も、尻餅搗いて、駭いたわい」

「何んぢや！、日比谷公園の河野廣中等の國民大會が、今度の事件に關係があるだらうと疑つてる？、フフン、お芽出たいとを言つて居る、豫審の結果を待たねば、眞相は判らぬが、我輩の想像では、無論、國民大會などいふものが、關係が無いと信ずる、國民大會の或者は、或は關係はあるか如何か、そこ迄は、我輩の天眼通の及ぶ所でないが、河野といふ男丈は、慥に關係はあるまい。ナニ、我輩は、河野を庇ふのでない！。一體、河野といふ男は、民權勃興當時より、何時も鼻棒に立つて、世間の注目を惹く役割に當つてゐるが、彼の男は、ぱつと場當りを華やかにする丈け、陰謀の、燒拂のと、其樣な根生の定まつた仕事が出來る男ではない。ナニ、我輩は河野を惡口するのではない、河野には、河野の豪い所あり、人の及ばぬ長所はあるが、燒拂などいふとは、彼の男の遣る藝當でない。現に、イの一番に、此の日本に、高等法院が開かれた福島事

件を調べて見ても判かる」

「福島事件かへ、彼の事件は、妙に世間の人氣に投じて、國事犯といへば、猫も、杓子も、福島事件に指を折るやうてあるが、當時機密に參してゐた我輩等より見ると、ほんの片田舍の、百姓一揆て、國事犯の何のと仰山な名稱の食ッつく事件ては無かつたのよ。そりや無名館の古簞笥から出た誓約書は、河野の發頭て、花香恭次郎の筆て成つたものに相違ない。

第一條　我黨は我日本國に在つて壓制政府を顚覆し眞正なる自由政體を確立することを務む
第二條　我黨は前條の目的を達せんが爲め恩愛の繫縄を絶ち生命財産を擲つべし
第三條　我黨は我黨の會議に於て決定したる事件を決行す
第四條　我黨員にして我黨の密事を洩らす者は直に自刄せしむ
第五條　我黨は以上の目的を遂げざれば幾年月を經るも渝らざるべし

右の盟約は、我黨の主義精神にして、即ち之を神明に誓ひ、死を以て之を守るものなり

誓約者は、河野廣中、田母野秀顯、愛澤寧堅、平島松尾、澤田清之助、花香恭次郎、と恁ふ六人の間に出來た誓約書てあるとは、正味間違のない話説ぢや。否、實際は、例の土木補助費支給案が、福島縣會に出た時、窃に河野、田母野、花香、澤田四人の間に結ばれ、後に愛澤、平尾の二人加はり、六人連署の下に成つたものに相違ないが、會津地方に一揆の起つた當時、恩愛の繫縄を絶ちて、直に壓制政府の顚覆を遣らうなどいふとは、河野を初め、夢にも思はなかつたのぢや」

「今から思ふと、明治の陰謀者も、餘程變挺來に爲つて居るわい、實際政府の顚覆を企てようつた大事件も、強窃盜に問はれて、萬解の恨を呑んで、地下に入つた者もあれば、普通の百姓一揆も、堂々と、國事犯に爲つてゐるのもある、歷史といふやつも、內側から見ると、ちやんちやら可笑しく爲る。ホヽ、話説は小說家のやう

な泣言に爲つたが、一體、あの河野の國事犯事件は、三島通庸が描いた空中の蜃氣樓！書記官の村上楯朝等が、秘密探偵の安積戰等の報告に過られた結果、彼のやうな仰々しい事件に爲つたので、今から見ると、詰り三島通庸といふ男の獨相撲であつたのぢや、ハッ〳〵」

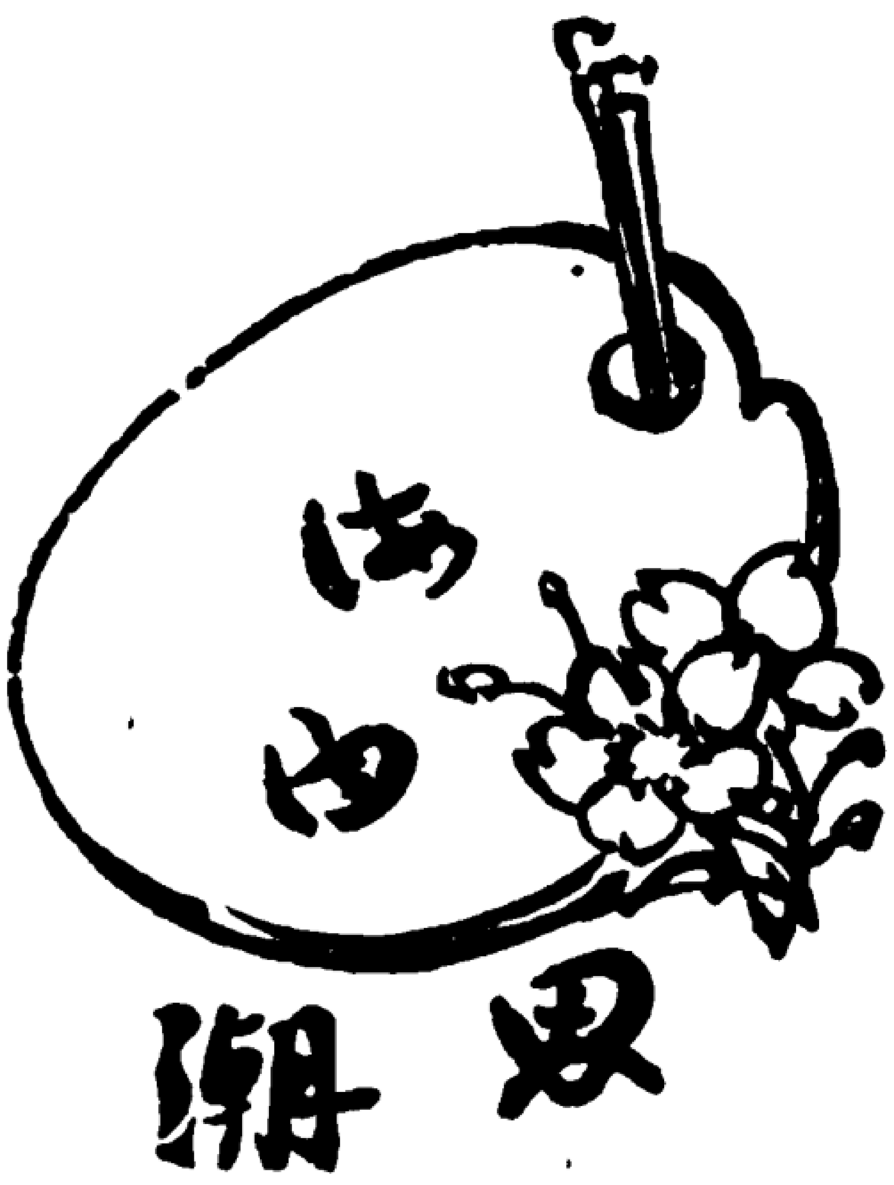
「三島通庸の人物かい、や、此の三島といふ男は、實に、自由民權時代――壓制時代の名物男であつたわい。何れの邦國でも其樣であるが、壓制時代には、種々な人物が、社會の表面に現はれるもの、特に、我國には、封建時代を過ぎて間もない事であるから、地方官の間には、頑固といへは、頑固、亂暴といへば亂暴であるが、一本調子の、風の變はつた人物が、澤山居たやうぢやつた。三島は、特に無遠慮に性格を發揮した男で、片意地で、頑固で、特に、下に對しては、恐るべき勇氣を持つてゐた人物で、一ト度言ひ出したが最期、矢でも鐵砲でも推し徹ふすといふ曲者」といつて仕舞へば、茶々無茶の、我無者のやうに聞こゆるが、**此の茶々無茶の間に、功名心もあれば、慈悲もなり、**なんだか判らぬが、相應に天下を治むる才能もあれば、危險の身に及ぶと知れば、三十六計の奥の手も出す。て、一方から見れば、妙に陰險な、老猾な人物のやうぢやつたが、福島縣令として、福島縣へ遣つて來た三島はその持前の陰柔な方面を發揮せずして、剛情な、我無者の方ばかりさらけ出したものぢやから、堪らなかつたのぢや」

「一方の河野の人物は、如何かといふに、精神の深底は、極めて泰平無事の、佛弄りでも遣つて居れば、良い男であるが、何分にも九州武士に平げられて繼子根生に爲つてゐる、からッ風の、蠻氣に充ちた東北に產れた上に、國會請願運動當時より、今、耶蘇坊主の親分株に爲つてゐる本多庸一と並び稱せられて、嶄然頭角を現はしてゐた男であつたから、民權有志といふ體面から言つても、一地方官の暴壓手段を傍觀された義理でない。最も大井憲太郎のやうに、無暗矢鱈と、過激の言論を以て、壯士を煽動するやうな眞似は仕なかつたが、**民權當時は、若かつた故か、隨分怒りッぽい**

男ぢやつた。左様ぢや、自由黨の組織された頃、若い奴等の間に、斯んな言草が行はれて居つたわい、海南に笑ふ者あり、小西甚之助、中國に泣く者あり、青木茂七郎、東北に怒る者あり、河野廣中、ハツ〳〵、河野は怒りッぽい男に數へられてゐたのぢや。三島は彼のやうな男であつたのに、縣會議長の河野廣中は、斯んな男であつたから、兩者の間に、衝突の起つたのも、無理はあるまい』

『果然!、果然!、三島は着任匆々、土木工事の大計畫を立てゝ、縣令と福島縣會との間に、大衝突が出來した、その土木工事といふのは、斯うぢや、設計は二ッあつたので、一ッは北の方の羽前の國境より、若松を經て、南の下野國境に達する道路で、今一ッは若松を起點として、越後の國境に達する工事で、南北會津、耶麻、河沼、大沼、東蒲原六郡、六十六町、四百九十三村に渉る大工事!、最も之はずつと以前より、會津地方の窮士族連が稱へてゐた設計で、別に三島の新發明でも何でも無いのぢやが、何分にも右のやうな大工事であるから、設計といつても、口で言つてゐるばかり、夢のやうに思つてゐるばかりであつたのに、三島は、縣令と爲つて、福島縣に來るや、誰が入れ智惠したかそれは知らぬが、突然、六郡、六十六町、四百九十幾ヶ村の町村聯合會を起こして、郡長監督の下に、無理往生に作へ上げんとしたのぢや』

『縣令の方針が、着々として進み、遂に六郡の聯合會は、若松で開かれた。帝政黨に加つてゐた士族連は、兩手を擧げて賛成したが、自由黨員は、固より賛成しない。すッた揉んだと騒いだ末に滿十五年以上、六十歳以下の男女は、毎月一日宛、二ヶ年間、此の土木工事の爲に夫役に服すべしといふ決議が成立して、曲りなりにも、三島の意志が通つたのぢや。即ち、鰥寡孤獨癈疾の外は、滿十五年以上、六十歳以下の男女は、猫でも杓子でも、夫役を申し遣つたのよ、そして、若し夫役に出ない者は、男は十五錢、女十錢宛の夫賃を出すべし、といふ事であつたのぢや。如何ぢや、三島時代で無いと、此の明治時代には、見られぬ決議だらうではないか』



小說と學生の墮落

幸田露伴

『時代思潮』

世間には今日の男女學生が小說に耽るの罪を以て學生墮落の根本原因となし學生の墮落を以て責を小說家にありと論ずるものがある。特に教育社會に於て斯の加き論があるのは以てもないことである。コレハおもしろい論で、其の論が正鵠を得て居るならば、即ちそれは教育者の無能を表示して居るのである。モシ單に小說の力のみが其等の教育者が云ふ通りに學生を墮落せしむるものとするならば、それは今日の教育が徒に形式のみありて其中には何等のものも無い空虛なものであるといふ證據である。然るに近頃は警察力法律によりて風紀を維持し學生の墮落を救はんとするが加き之を局外者の見地より觀察するときは實に教育者の意久地なきを慨まざるを得ないのであらう。余は今日の所謂寫實的小說の金看板の下に、宣淫導慾に近きことを記して居る小說を排するは勿論である又予は從來出版物取締厲行論者であるが、學生墮落の原因を小說にのみ歸するは其意を得ないのである。マタ今日の學生墮落を以て學生の腐敗極點とまで悲觀するものあるが、それは當つて居ない、今日の學生を昔の學生に比べたならば餘程着實に成つて居ることは事實である。例へば新聞紙上に於ても學生の放蕩をあまり見ないのは其證據であらう。實際十年前に於ける學生の一部に於ける墮落は非常のものであつた。其擧動と云ひ服裝と謂ひ其精神と云ひ公然遊廓に出入するを誇る位であつて、實に亂暴であつた。然るに今日では一般學生に此の如き行爲を見ないのは實に學生風紀の一變化であらう。併し其の代り今日では女子教育普及の結果、男女學生間の交際が起り、下宿屋制度の不完備の爲め或者は遂に色情の奴隷となり學友の姉妹と其關係を生ずるなどいふこともあるが、現今の社會進步の程度では致方もない事であらう。十年前と今日の學生とを比較して見たならば昔は其の不行狀が陽發したのであつて今日では陰伏したと謂ふに過ぎない。則昔は堂々と亂暴に花柳社會に出入して醜態を演じて居たのが今日ではそんな事の無い代りに陰性に種々の事が起るそれが實色者に溺しないで普通社會男女間に起る爲不道德の者が甚だ高く喚ばれるのである。

又別に二十歲前後の學生が掠奪穿窬を事とするものがあるが、これは一般學生が其様いふ事をするのでは無い、さういふ例外な稀有の事をして學生墮落云々といふのは、論理の當を得て居ないもので、學生に取りては寃といはなければならいでしやう。今の學生はたしかに十數年前の學生よりは大體にては賢くて且つ正しくなつて居る。

大を畏れざる日本の習慣

『日本人』

　我が日本は小を以て大に屈せざるの習慣あり、總じて大を畏れず、軀幹長大なる者に對して『大男總身に智惠が廻はり兼ね』と笑ふ。兒童のお伽噺に、大坊主にして七ツ道具を帶び薙刀を提げて行人を惱ませる辨慶が、短小婦女に似たる牛若丸と鬪ひ負けて其の從者と爲れるの面白く感ぜらるゝあり。人肉を啖ひ、人血を飲み、霹靂の如くなる酒顚童子は、賴光の爲めに退治せられ、三上山を七卷き半し、湖水の龍を呑まんとせる蜈蚣は、俵藤太の爲めに退治せられたり。武藝の試合に此類の談柄頗る多く、要は兇暴なる大漢は溫容なる小男に破らるといふに歸着す。魁偉なる丸橋忠彌の高く由井正雪を指し上げ塀を廻ぐる幾回して投げ付けたる正雪投げられ乍ら忠彌の頭を蹴て之を倒し、己れ身を飜して直立したる、其一例たり。封建時代に接踵續出せる俠客の嘖々として稱揚せらるゝも、亦其の素町人にして時の大名若くは旗下に拮抗し、命を棄つるを辭せざりしが故にして、其の强を挫き弱を扶くるを以て一の美德なりと爲せるなり。其の傳へらるゝ事實の果して眞を得たるや否やは別とし、小を以て大に勝てること尤も多く傳へられ、聽く者皆な之を悅ぶ。豐太閤も短少にして智慧渾身に溢れたりと稱せらる。

　啻に人と人とに於てにあらず、物に於ても亦然り。奈良の大佛の形大を以てして淺草觀音の一寸八分に若かずとせらるゝ、たとへ觀音の實體が楷の把手なるにせよ、世に黃金佛として傳へらるゝが爲めにして、善光寺如來の尊ばるゝも、同じく其の金身なるに因る。家屋に於ても外觀の小にして費用の多きを好み、大厦高樓よりも茶室の意匠を凝らしゝを稱するの傾向あり。日光廟の如き、規模小にして建築の見るに足るなきも、彫刻の妙、裝飾の美、海內第一を以て推さる。斯くて小形にして高價なるものゝ多きと共に、大形にして低價なるを卑むこと、一般の流風に似たり。

　人に於て物に於て然りしと同じく、國に於ても亦た然り。我より開明せる國に對しても毫も屈せず。我より强大なる國に對して屈も寧せず、我は即ち我として自ら守る所ありしは古來曾て替はらず。初め三韓より文物を輸入たりしが、之を輸入するにも、我が屬國よりする貢物の形を以てし、次て支那と交はるや、彼の廣大なるは夙に之を知れるも、隋に使者を遣はすに方り、日出づる國の天子、日沒する國の天子に問ふといふの句調にして、文物技藝、制度典章、多く彼より採り、汲々として模倣を之れ事としながら、猶ほ決して彼の下に屈せず。天智帝は由來唐國最負にして、百事此に則りしが、一旦唐の兵を高麗に加ふるを聞くや、一意專心其の防禦策を講じたり。爾後年代の推移に伴ひ、益々支那の事情に通じ、彼れの種々の點にて我に優るの明かなるも、我は依然對等以上を以て居り、絕えて從來の面目を變ぜんとせず。元の支那全土を征服し、更に西域諸國を征略して、天下能く此に敵する者無きこと略々知られしに、彼れ使を遣はして和好を結ばんとせば、書辭無禮なりとして之を拒み、彼れ幾たびするも我は諾せず、其の竟に兵を以て威壓し來たるに及び、我れ亦た兵を以て逆へ應じたり。彼が艦船は形體頗る大、器具も善く整へるに、我れ則ち輕舟を飛ばして邀へ擊ち、或は敵船に攀ぢ登り、縱橫奔馳して力戰健鬪せり。偶々暴風大に起り、我兵乘じて敵を殲滅したるより、是れ暴風の爲めに幸に勝ちしもの、實は甚だ危かりしなりと言ふ者あるが、よし當時暴風なく、十萬の敵軍安全に上陸し得たりとも、其の到底我を征伏するに堪へざりしは明瞭なり。承久の役に泰時單騎西上して十九萬の兵京都を指したりといふに徵するも、我が全國の兵を擧げて邀擊せば、元兵十萬二十萬を殲滅するに難からざるを見るにあらずや、我の元と戰ふを辭せざりしは決して無謀の擧ならず、我れ小といへども優に彼に當たるべきを確信したるなり。

如何に大なるも畏るゝに足らずとは、自然に我が國人の頭腦に存する所にして、自國の小なるは能く之を知るも、如何なる大國にも屈すべからず、又た屈するの必要なきを確信し、時として我が力の足らざるを顧み、大に準備を整ふることあるも、衷心より大なる者に勝ち難たしと諦むるは全く之れ無し。歐米と交通を餘儀なくされて以來、露國は世界の以て大國と爲し强國と爲して畏れ懼りし者、堂々たる列强猶ほ此と爭ふに躊躇せしに、我は此に對して力の足らざるを感ぜず、準備の整はざりし間は暫らく讓る所ありしかど、五十分一に足らざる版圖を以て彼に拮抗し得ざるが如き念慮を生ぜず、準備の聊か整ふに方りて大に彼と爭ひ、連戰連勝の狀あり。我が兵卒は彼れが兵卒の體格大にして力量强きを知りながら、必ず彼に打勝ち得べしとして突進し、彼の大なる者をして常に敗亡遁竄せしめ、初めより我が日本人の軀幹短小なるも鬪爭に負けずと信じたるの、噴して妄想にあらざるを事實の上に證據立てたり。體の大なるは淸國人も露國人も共に然り、而して我れの小なる體を以て彼等に抵敵するを辭せざりしは、實に大の畏るゝに足らざるを信ぜるのみ。

而して此の事や、今回露國との戰爭に最も著るしく顯はれたり、彼れの戰鬪艦は數に於て我に優さりしも、我は豫め必勝を期し、日本海に於て我が四隻の戰鬪艦及び若干の巡洋艦を以て八隻の戰鬪艦を主力とせる敵艦隊を邀擊して之を破り、次で驅逐艦及び水雷艇約一百隻を縱つて襲擊し、之を全滅に歸せしめたる、實に輕舟を飛ばして大船に斬り入るべしといふ昔時の議論を實行したるなり。昔時の議論は言葉通りに見れば何等の價値なきも、其の精神は尙ほ確かに今日に存續し、小舟を以て大船に勝つべしとの思想は冥々裡に戰勝に與かりて大なる力ありとす。而して是れ海軍にのみ限らず、他の事にも皆な同じく徵すべし。小を以て大と戰ふべしと言ひ傳へ來れば、即ち我國の小を以て大國の間に力を伸べ漸く一頭地を拔きつゝある所以なり。

實業家の一缺點

尾崎行雄

『活動の日本』

(一)日本の商人は大槪世界的智識が缺乏して居る者が多いので、何れの國民が如何なる品を嗜好するか、何れの品が何れの國民の嗜好に適するかなど云ふ事は聊かも御存んじがない、然るに今回の戰捷は世界各國の國民をして日本に對して非常な好奇心を起さした結果、日本の製品とあれば、如何なる品でも買入れぬことはないと云ふ有樣に立至らしめたので需要がだん〳〵殖えて際限がない有樣であるが、偖て其の相手が是等の事情に通ぜず、世界的智識に缺けて居る國民と來て居るなら、どうして海外に販路擴張を望むことが出來るであらうか。

そこで過去、及び現在の、海外の我が商業の有樣を調べて觀ると、常に最も遺憾に感ずるのは、日本の商人が世界的の智識に缺けて居るから、其商品を直接に賣捌くことが出來ず、止むを得ず多くは支那や外國人の手を借りて、始めて外に商品を賣捌かすことである、已に斯樣な風であるから、何處に於ても海外には日本商人の實權がない、そして支那人や外國人が、比較的に世界的智識が富贍である點に於て、日本人が常に支那人其他に一籌を輸せればならぬと云ふのは、洵に殘念な次第ではなからうか。

我商人も海外輸出を盛にしやうと云ふには、或は列國を遍歷し、或は其他の方便によりて、各國の事情を研究し、何れの場所には何品が向く、

何れの國民には何品が適すると云ふやうな、其嗜好や好惡や其他の事情に精通し、之に依て其意匠、製品の善惡等に意を用ひればならぬ、自ら之を知り、自ら工夫を凝さずには、到底完全なる發達は望まれない、以上の理から推して見ても將來の實業に志す青年は、努めて世界的智識を養成するのが發展策の第一の要義であると思ふ。

(二)次ぎに冒險的氣象の缺乏から、商業の發展を遲々たらしむるが第二の原因である、假令世界的智識が備はつたにせよ、勇往邁進、天下を家とし、宇內を窄ましとし、世界到る處に向つて横行濶歩するの氣象がなければ、何事をも爲せぬであらう、輓近各國は盛んに我製品を歡迎することは前に述べた通りであるが之が戰後となつたとて其の需要は恐らく戰時と異なる所はあるまい、否な大に歡迎され、恰も渴するが如く我製品を需要さるゝとは火を見るよりも燎らかな時に當つて我商人が退嬰又た退嬰して、海外に雄飛することが出來なければ、好機一たび去つて復た回らずに了るであらう、これなどもみな現時の我商人殊に將來の實業青年が發奮一番すべき所であると思ふ。

余輩と雖も元來から我國人が冒險的氣象に缺てるとは斷言するのでないので素より我國人て以て、古くから、海外に偉業を樹てたのは、其例が屢指に遑がない程であるけれど、之を歐米人と比較し見ると、遙かに遜色なからざるを得ない殊には婦人はマア暫く恕すべしとして、國人の率先者たらねばならぬところの所謂上流若くは富豪の子弟が、わけて此氣象に乏しいには大に因るではないか、見玉へ歐米殊に英國民の如きは、みな非常に冒險的氣象に富んで居るので、英國をして今日の如く偉大ならしめた所因は、畢竟この氣象の旺盛に歸せざるを得ない、彼等の男女を問はず、この氣象が頗る盛んで在ることは或は虎狩をし、或は北極探險を試み、或は商業の爲めに無人の境を過ぎ、或は植物研究の爲めに未開の地に入るなど、諸方面に試みられる冒險的事業に證明さるゝと同時に、商業的冒險の氣象も亦た豐富である、婦人にしても山を見ては、その高低難易を問はず、登つて見る、川を見ては、廣狹深淺を問はず、下つて見る、海を見ては、其險夷渺茫を問はず、過ぎつて見たいと云ふ氣象は、皆持つてるなどは、我國人の大に學ぶべき所であらう。

新聞記者に必要の特質

竹越與三郎

「成功」

世人は往々新聞記者の資格として文章の巧拙をいふが、若し文章を單に文字の上より云へば巧拙の別もあるが、全體文章とは單に文字の謂でなくその中の思想、觀察力及びそを云ひ表はす方法の上の意味であつて、識見や視察を除いて單に文字上の文章の巧拙は論ずるに足りない、故に文章が書けるから新聞記者たり得ると思ふは大なる誤りである。新聞記者たらんが爲めに如何にして思想、觀察力を養ふべきかと云へば元來之は第一は天分であるが第二の修養方法は先づ讀書、研究、注意及び實際の經驗等より得來るより外はない

第二の種類に屬するのは議論、文章、識見を以く一世を指導するものではなく、社會の事實を最も迅速に感得し若くは聞取し若くは目擊して之を讀者に報道するの種類である、同じく記者ではあるが是は通信記者とも稱すべき類に屬して居る。此種類の大成功者はタイムスを代表して巴里に居たブロウイッツ氏などである、此人は初めは佛國の田舍新聞記者であつたが後にはチール、ガンベッタの爲めに見込まれて有名なる記

者となり遂はタイムスの通信記者と爲つたのである、世人は此ブ氏が功としてはベルリンに於ける列國會議の議決を尤も速く聞き取りて列國の君主が未だ批準せざる前にタイムスに發表したる著名の事件を記憶するのみであるが、實は氏の驚くべき手腕は之のみでなく、其の筆に依りてタイムスに出づる歐洲外交上の形勢は實に能く列國の機微を穿ちて殆んど列國の外交を動かすの力があつて、巴里に置けるタイムスの支局は宛然一つの大使館の如き勢力であつた、是等は通信記者が如何なる點まで成功し得るかを示せるものであるが、獨りブロウイッツ氏のみでなく、今日の有力なる新聞の通信記者には此流の人が尠くない爲に紙面を飾つて居る次には政治以外に社會的の事實に就ての通信者である、此種の新聞記者として最も成功したるは、一昨年死せしフヒガロの記者などであらう、此人は巴里の有ゆる出來事に就て通信して居たのであるが。同一の事柄も此記者の眼と筆とを經れば特別なる感覺を讀者に與ふるとの點よりして非常に持囃されて居たのである。各社とも此類の記者の多きことは必要である。次は現に吾人の目擊する軍事通信記者である、此類の記者は大砲の響、刀劍の光、千軍萬馬の進退に特別の興味を有して居り、又進軍の困難、道路の險惡を犯す冒險の氣性に富んで居なければならぬ、我國にては今は記者は他の記者と多く區別しては居ないけれども今後にしては必ず區別し置くべきものである。以上この第二種の記者の三種類を通して如何なる性格を必要とするかといふに、耳の速きこと、目の速きこと、感覺の速きことである。詳言すれば五官の外に一種の新聞記者官といふべき感覺がなければならぬ。之は耳より來るか目より來るか判らないが兎に角五官以外の感覺であると思ふ、世人は耳の速いこと又は目の速いことを重んずるけれども同時にその耳目にて感じ得し事柄が果して眞か否かを批評し辨別して之を取捨するの力が必要である。

此新聞記者官なる感覺は一つは天分なると同時に又多くの經驗を積むを要する。

以上述べし外に新聞記者なる位置は極めて困難のものであつて吾々の經驗に依れば、新聞記者たるの道は即ち難ふるの道である、之に堪へて名節を維持するの勇氣が必要である。其外に種々の資格を要するけれども、畢竟するに機敏にして彈力ある腦髓を持てる勇氣ある人てあければなけらなば新聞記者として何れの類に屬するも成功は出來ないと思ふ、要するに新聞記者も或點迄は製造せられ得るが、それ以上は生ずるものである、故に己れの天分を見て果して之に合ふや否やを確然と見定めし上でなければ漫然と新聞記者に爲る事に出來ぬのである、若し爲れば必ず失敗に歸し終るのである。

實は大臣議會新聞記者は三者相合して今日の國民を治る大勢力である、斯の如きの新聞を作らんとする新聞記者は必ず天分と修養とに依る可きである、故に此地位を望むの人は大に自ら敬重すべき事と思ふ。

戰後經營の大方針

【實業の日本】

顧みて熟ら〳〵戰費を察するに、開戰以來前後二回の議會に於て協贊を經たる軍事費は十三億五千六百萬圓にして、之に加ふる過般緊急勅令を以て募集したる外債三億圓を計算する時は實に十六億五千六百萬圓なりとす、此内拂込未濟のもの内債五千萬圓、外債二億五百萬圓ありと雖も、軍隊の引揚、軍人下賜金等所謂跡始末に要する金額を計上する時は、却て不足を生ずべく、更に公債を募集せざるを得ざるべし、況んや

大連旅順の經營、韓國に對する施設、軍備擴張費等戰後の經營に要する資金少なからざるをや、開戰以來終局迄の費額二十億圓に上るべきは余輩の疑を容れざる所なり、此巨費の内既に國家の負債となれるものに外債八億二千萬圓、內債四億八千萬圓合計十三億圓にして、今後の募債を計算する時は少なくとも十五六億圓を下らざるべし、講和條約成立前には露國より得べき償金の大部分を以て、漸次公債を償却し、之に依て國家は高利の負擔を免がるゝと共に、經濟社會に資金の供給を豐富にすることを期待せしに、外交の失敗は償金を取ると能はず、如何にして此巨額の公債を償還する乎、國民に多大の犧牲を拂はしめたる上、尙ほ且つ此負擔を負はしむるに至ては、國民の不幸も亦憐れむべきにあらずや。國民に既に戰時非常特別税として重税を負擔せり、此特別税中には細民を苦むるものなきにあらず、或は又其課税法の不完全なるが爲め生產業の發達を沮害するものなきにあらず、此等の惡税は戰時なるが故に忍ぶべからざるを忍びしと雖ども、平和克復せる以上は斷じて改廢せざる可からず、非常税を非常ならざる平和の時代に存續するは財政の失態にして、豈に國民の堪ゆる所ならんや。戰時税にして大部分復舊するとせば國債の元利償還は何れより財源を求めんとする乎、內外公債の利子のみにても年々六七千萬圓以上支拂はざるを得ず、財政の困難知るべきなり。然らば如何にして此戰後の經營を爲すべき乎、是れ實に大問題なり。余輩は試みに大方針を述べん。

一　先づ人心を新にするに在り
二　財政行政の大改革を斷行して範を國民に示すべし
三　國民各自發展を計るべし
四　軍用品の生產力を一轉して輸出品の製作に向はしむべし
五　貿易の大擴張を計るべし
六　海外出動を奬勵すべし
七　海陸聯絡の設備を完全にし且つ運賃の低減を計るべし
八　滿韓方向の利源を開拓すべし

佛敎と外人

田淵友彥

『佛敎靑年』

輓近東洋の事情が西洋人に知れるにつれ、我佛敎も其注意を惹く樣になりましたが、何分東西風俗の差異からして佛敎の眞想を知る事は至難の事業であり、幾多の誤解的意見を抱き、或は嫌惡的感情を表はして居るのも、少くない樣であります。しかし此誤解の中には、佛敎側に取り他山の石として、參考になる點も無いのではありません。玆に此等を一括して申しますれば、

第一佛敎は異敎なり、ヒースンなり、偶像を始め木石をも祈禱禮拜す、

第二佛敎　神秘的（エソテリシズム）なり、秘密的覺術と同類にして奇蹟を以て充たさる

第三佛敎は厭世敎なり、何となく物悲しく活氣なく情熱なく冷酷にて、人生の目的は寂滅（ニヒリズム）に在り、即凡ての活動を制止して虛無に歸するに在り、と云ふのが終局であつて、妻子眷族の愛を棄て山奧に分け入ると云ふ風な出世間的敎義であるしてみれば東洋の夢を見て居る樣な國民には最上宗の敎かも知れぬが、われ〳〵西洋の活動的精力盛なる國民には全く不適當である。

以上の三點は最も西洋人間に行はれて居る一般の觀念でありますが、先づ第一の誤解は、西洋の旅行家新聞記者などが日本に來遊し寺院に參詣しますと、數多の善男善女が佛像の前に跪き合掌禮拜し或は口に何や

ら分らぬ言葉を唱へ或は草花等を手向ける所を見、其形式よりして是ぞ眞實の偶像教なり、ヒースンなりと速断するのであります。言語の通ぜぬ外人が他の野蠻國の宗教狀態と同一視するのは無理ならぬ事ながら、無論淺薄の謬見たることは免れ得ませぬ。

第二の誤解は主として亞米利加にある靈智學會の所説より流布したものであります。第三の點に就ては、殘念ながら日本人にも同様の觀念を持て居るものが澤山あります。今日の佛教は葬式を司る者で死ぬる事を目的とする所である、死垂んとせる老翁老婆の参詣する場所で、青年血氣の人の足を入べき所でないといふ思潮が流行して居ります。勿論佛教は無闇に涙を溢ぼさするが能事ではない、即其厭世的無常觀的方面が其眞面目ではありませんか事實は慥に此誤解を生せしむる傾向があります、此點は佛教家の最も注意を要する點であらうと存じます。

此外「皇國」の著を以て有名なるグリッヒスの如きは、日本には男尊女卑の弊到がある、然かし之を救ふは佛教女人済度すべからずと説ける佛教では到底不可能の事であると申して居る。だか一方に西洋婦人の得權も、世人の普通に通じて居る様に新約全書の影響ではなくて、全く法律經濟上より發達したと云ふ西洋學者の説もあるのですから、此點に就ては基督教とて餘り得意がる譯にも參りますい。

又最も甚しきは、佛教は亡國の宗教なりと殘酷な批評を與へて居るのもあります。其言によりますと東洋に於ける亡國の宗教を御覧なさい、先英領となれる印度は佛教の本源地ではないか、次に緬甸は如何、佛領安南は如何、皆佛教國ではありませんかと云ふ風の議論でありますが亡國原因は諸種複雜なる歴史的原因による事を忘却したものであつて、皮想上の推斷より出たるものであります。斯かる論理を許すと假しますれば耶蘇舊教を國教とし之を世界に宣傳した羅馬の大帝國は何が故に亡びたるか、又露西亜と同じく希臘正教に頑固に泥じたる東羅馬帝國は如何、羅馬舊教を崇したる有名なるポーランドの末路は如何にと言ひたくなり、從て基督教は亡國の宗教なりと斷論するも差支なき事となります。天下豈此愚論あらんやと言はればなりますまい、是は極めて平凡な説でありますが俗耳に入り易いのであります。

戸水博士の媾和觀

▲第一、正當に主張して得べき償金を取らざるが如き、失敗の甚敷ものと言はざるべからず、若し夫れ露國的眼光を以て之を看れば、談判は對等……所謂交綏なれば、償金の無きは或は當然なるやも知れざれど顧つて之を戰捷國たる我國側より觀れば、國家の損害之より大なるは非る也。

▲第二、樺太分割の如き、……是れ實に沙汰の限りなり既に軍事的占領を了りたる土地を戰敗國に返還するが如きは有史以來未だ曾て見ざる處にして、殊に況んや兩國境を接し爲めに紛爭の因を出したる事は、歴史の明かに示す處ならずや、▲第三、沿海州の漁業權……、是れ有名無實の甚だしきものなり、如何とならば凡ての漁業之に對する陸上の設備を要す、然るに今回の媾和條件にては、到底得らるべくもなし、若し此等の權利なしに船舶のみを有するも何等の活動をなし得ざるなり、要するに沿海州漁業權の如きは、有名無實のものと言はざるべからざるなり、▲第四、朝鮮境上の撤兵……、亦言ふべくして行はれざるもの、朝鮮は由來事大主義の國、常に露國の大なるを怖れて我國の小なるを侮蔑す、到底撤兵は事實上不可能の事に屬す、▲第五、滿州撤兵……、是れ亦失敗の甚大なるものなり、其表面に於ては正しく對等の撤兵を告明するが如くなるも、露國はニコリスクに兵を駐屯せしめグロデコフを經て哈爾賓に出づるに僅々數日を要するのみ、其便と其利は遠く我國現時の狀と同日の論に非ず故を以て若し我國にして撤兵を實行せんか、僅かに得たる東清鐵道は畢竟無用の長物のみ、北原は遂に露國藥籠の中のものとなるべきや必せり。

少華族

徳田秋聲著

上編　平福百穂畫

實價六拾錢

郵稅八錢

突兀山の如き青年小田垣憲が、靜平湖の如き秋岡子爵家に入來りて幾樣の波瀾を惹起し去るかを看よ。

波瀾の來る偶爾に非ず一波起り萬波聯り起るの狀は眞に一幅人間界の縮圖、著者が事相を寫すに於て特種の妙伎を看るべき處。

編中に現れたる人物十餘人、主、副悉く其箇性面目を發揮して紙に聲あるが如し、眞面目なる江湖青年男女の淸讀に値するもの此篇の如きは鮮し。

東京日本橋通四丁目角　**春陽堂**



詞藻

明月

宮崎湖處子

神の作つた宇宙の中で、日の恩光は恰も嚴父の其の如く、月の恩光は恰も慈母の其の如くである。日の萬物を長成するの恩は感謝するには餘りに大に過るので、人は偏に月の慈愛を感謝して居る。盖は月の慈愛は喜ぶ者と共に喜び、悲む者と共に悲しみ、苦しめる心を慰め、傷める魂を痛はつて、同情溢るるばかりてあるからてある。福なるもの月を見れば愈其の身の福を覺え、禍あるもの月に向へば禍其の身に在るを忘る。あゝ月よ誰か爾の慈光を仰がぬ者があらうか。

九月十三日の晩、今宵は今年の明月に當る。行水を了つて晩餐を濟すと、既う座敷一ぱい淸影が射しこむで居て、尺八の遠音がさして居る。轉ぶやうに自宅を驅け出して、觀月臺に驅け上つた。觀月臺とは此の北豐島の田舍で、觀月の名所と謂はるゝ、田端から巣鴨に走る山手鐵道の線路が、一帶の長堤の

如く中里の窪田を亘る一部分である。勿論是は鐵道會社の有で、外人の漫りに侵入すべき境でないが、復線を布かるべき此の堤の上が、猶ほ單線に止まつて居るので、片側の空地が、何日か此の田舍から東京に出る捷路となつて居るので、夏は納涼、秋は觀月の名所として、都人、里人、此所に出て來て、同一の明月に對して、人樣樣の觀月を爲るのである。

旣に線路に上つて見ると、月は疾く谷中の森を離れて、秋の空に澄んで居る。上野日暮里の一帶の樹立は、淡う輝やく霧煙の背に隱れて、山かの樣に見えて居る。線路の眞中、煉化石を築き立てた二丈有餘の懸崕の下には、水深き野川の流に月影が耀めいてる。反對に西を顧ると、當面の西ヶ原の里の茅舍が、歷々として指點すべくある。線路の兩端は月の光に隱れて見えないのである。

月は昇るに隨がひて光を益した、笛の音も富士前の方面から、段々此所に近づくらしい。

忽ち巣鴨を發した汽車が、轟然大地を震動し、火の子を吹立て丶二人を追ひ散らして田端に走つた。

其後に祝福を受けた家族と見えて、夫妻の間に五六歲の男の子の手を引て、中里の田圃路から出て來て堤に上つた。

『美い月だねえ、今年の樣に明月は珍らしいよ。』

『美い明月ですことねえ。』

『美い明月だねえ、誰か何所てか笛吹てるねえお母さん。』

『月に尺八、添物だねえ、中々巧いや。』

『安宅を吹いていますのねえ、ほら「笛にー、なりたや、しのーぶへーに、ふへーはー、好いもの、笛はーおもひを、くちーうつーし」って、其樣曰ってませう。』

『己にァ何だか分らんが好い節だねえ。』

『お父さん坊にも笛買つて頂戴なあ。』

『何んだ此子も笛に蒙れたのかねえ、好し好し今に東京に往つた時買て來てやる。』

『いゝねえ、お父さんは好い子だねえお母さん。』

『はいゝゝ』

家族の往た後に、書生あがりの、一人は薄く髭を立てた男二人、田端の方から線路傳ひにやつて來た。

『あゝ美い景色た。晝見れあ何でもない處だけど、月は至る所を美化して住むのだ夜霧がパーッと浮いてゝ、上野谷中が茫然としてるところは、全で美い夢見て居る樣だね。あゝ美い、美い景色だ。』

『なるほど美いねえ、神韻標渺といふ所だね。』

『暫らく見よう。』

『好し來た』

笻揮つてー夜霧を拂ひ、淺茅生の上に蹲踞つて、諸同に仰いて月を見て居る。

『月に對ふと種樣な記憶が浮んで來るが、一つ話せる事がある、其れあ僕が嘗てフヰクテの哲學を月を觀じて解いた事です。僕は全體哲學を好まんけれど、フヰクテの主觀的唯心論だけは好てね、そして其

の唯心論といふのはね、心が造物者で、心外の萬有は唯其の影で、客觀された心だちうのだ。何だか髣髴として分つたやうな分らないやうなんで、僕躍起と模索してかゝつたね。其の又模索するところに引力があつてね、哲學の妙味とは是だと思つたが、到底模索し得ないから、愚だと思つて抛て了つて、半年も經つて、丁度其年の中秋、然樣さ今夜の樣に晴れて居て、獨で月を觀て居る中に、不圖其の問題を思ひ與すと忽ち解けたよ。解けて見ると全て詩だね。哲學ぢあないね。彼が哲學なら哲學も尊いものだ。』

『其の妙味を僕にも些分ちたまへ、何だか太牢の滋味の樣な氣がする。』

『其の際の感會はとても口で言へるもんでない。恰も詩句を解く樣なんで、解けば毀れて了のさ。だけど其の論理だけは今でも言ひ得るだ。其れは斯うよ、今僕等が月を見て美と謂つてるけれど、其は僕等が然樣曰ふので、月其物が實際美だか何だか分らないのだ。だから僕等が今月を見てるのも、其實は月其物を見てるではない、僕等が心で美とした月を見てるのさ。解つたらうね。言はゞ僕は月を見ながら月を見ないで、唯僕が心で造つた月、即ち僕自身の心の影を見てるのさ。』

『だから心が造物主で、心外の萬有は心の影とか、客觀された心とか謂ふのだねえ。なるほどねえ。』

『然樣だ。そして此の思想が何れほど此世界を美化するのか君。日月星辰、山川草木、此等の外物が外物でなく、皆吾が思想感情の所作だと思つて見たまへ、人生到處是故鄕どころでなく、此の世界が全て一變して自分の舞臺と化して了つて、戀しくて戀しくて耐らなくなるから。』

『旨い物を取つ捕へたねえ、聞て居てゾク〳〵と血が跳るやうだね。』

「何僕だつても果してフヰクテの精神を得てるか何樣だか知らない、或は是も僕が心の影かも知れん。然し僕は僕の心の影で滿足する。」

「僕も哲學を研究しよう。」

暇があつたら行つて見たまへ僕等詩人には無用だけれど偶にや面白い説もあるよ。あゝ古いことを思ひ出して、思はず下手の長談義をした、さア行かう。」

と二人同時に立あがる途端に、ほろほろと調子を齊ふる尺八の聲音、數步の中に聞えたので驚いた。

「月下吹笛、旨く行つてるな、何時此所に來たらう。」

詩人の影の沒する頃、瑯々と笛吹き出した。ハーモニカも纖弱な音いろを交へて居る。六段を合奏して居る。段々と佳境に入る。巧いもんだ。宛轉活躍、珠玉盤上を迸しるの妙を極めて居る。堪らなくなつて曲譜を唸り出す者もある。樂隊を組んで來たのだ。野川の頭に陣取つてるらしい。

前に往つた家族が今歸つて來た、良人が先に立つて、細君が後から附いて來る。男の子は母の背に月の方向いて眠つてる。可愛い寢顏だ。

其後に天からでも降つたかの樣に、年若い男と女と携へて現はれて居る。語る語る來るのである。女の語で

「前刻から視ると大分月が清えたのねえ」

「然うです然うです。月が美いので何だか別世界を歩く樣な氣がするのさ。」

『月が美いばかりなの。』
『猶一美いものがあります。』
『何あに其れは。』
『當て丶御覽なさい』
『笛?。』
『然う。』
『ぢや、貴下是から一人で笛聞て在らつしやい、妾歸るから』と、突と跳ねて手を離す
『をやあんた何樣したの怒つてるの。』
『だつて妾盈りませんものを。』
『何故?月見に來て笛まで聞くもの、大盈てさあねえ。』
『だからあなた笛を聞いて在らつしやいと曰ふのさ、妾歸るは』と身を翻す。
『御免なさい御免なさい。』と男、女の手を握つて引返し、
『猶一美いのは是ですよ。』と確と女の手を握り締める。女嫣然、
『郎君妾を愛して居て。』
『分つた事を聞くと月が笑ふさうてすよ』
『然樣妾嬉しいわ……斯樣して月夜に笛聞きながら愛を語るのは理想なのねえ。』

『かも知れないねえ。』

『あら厭だ。妾斯樣な小說を見た事があるの、或る天主敎のお坊樣があるの。其お坊樣が非常に男女の結婚を詛つて、其れを罪惡と稱つてるのよ。すると或夜月が非常に奇麗なので、廣い廣い野原に出て、一人て月觀をして居ると、何となく心の中に是までに無い寂しみを感ずるの、だけと何が不足なのか些とも分らなくつて、唯當もなく懷かしいのに悶へて居る時にね、ほら向うから若い男と女と腕を組んで愛を語りつゝ此方に來るの。お坊樣其を見て、平日の頑固とは打て替つて嘆息吐くの。自分の寂寞が獨身の寂寞である事が今ま分つたからなのよ。而して斯樣曰つてるの「斯樣な美しい月夜はね、情郎情婦の住むべき世界なんて、自分の樣な獨身者は陰に引こんで居るべきだ」と哀れですのねえ。今夜も天主敎のお坊さんが何處からか見て居はしないのかねえ。』

『大丈夫其樣な怪しいものは、何處にも居ませんよ。』

『あら怖かあなくてよ、見せたくてよ。』

『何を。』

『患つたいよ斯樣して歩くところをよ。』

『一寸聞て御覽なさい、尺八の音じめが美いよ咽んでますよ。あゝ美い、一縷の怨を長く長く洩て居る。何だらう尺八の陰調に巧く合つてる曲だ。』

『郞君、尺八の事ばかり言つてるのねえ』

「あ御免なさい、さあ歸らう、遲くなるとあんたの體に障るから。」

『障らないわ、もつと歩きたいわ妾。』

『可けません。』

尺八の幽妙の聲音の中に、元來た方に引返して、間もなく光の中に消えて往つた。宛かも美しい幻影の如くであつた。

* * * * * *

午後十時の最終の上列車は疾うに通過した。一時間以前に、道灌山の方面に當つて、瀏亮と響いて居た尺八の音もパッタリ絶えて、野邊一面蟲の鳴音が目に立つばかり聞えて居る。人影は既う一個も見えぬ、皆月を遺して家に歸つて休んだらしい。月は獨り天に殘つて愈亮え、愈美なる光を放つて人間界を照して居るが、既う月見る者は無いのであらうか。

否ある。此の眞夜中に亂髮、寢衣のまゝ、雪の樣な素足ながら、すたすたと線路の上をたどり來る一個の婦人がある。やがて野川の邊まで進んで、枕木の上に佇立て後の方を顧みた。其の月を受けた顏を見ると凄いほど、色の白い面である。而し其の落着いた態度は確と或る決心を表はして居る。彼は若し死ぬ積ではなからうか、彼はやがて枕木の上に座り、月を拜むかの樣に突伏した。其細長い襟頸は正に線路に當つて居るのだ。彼は汽車の通過を待つのぢやないか。若し其儘に眠に落ちたら、曉には何樣な慘事が起るであらうか。十分間ほども經つたと思ふと、彼は突と頭を揚げた。身を起した野川の懸艇の鐵

邊に突立て見下した。彼は終列車の既う過ぎたのに心づいて、身投しようとするのぢやないか。懸崕下は深い淵を成して、月影が大きく崩れて渦まいて居る。彼は其の淵を見つめて居る。今にも飛びこむのではないか、あゝ危ないと思ふ途端、女は風と仰いで月に向つた。一二分も見とれて居たかと思ふと、何憶い出したのか、わつと號んで泣出した。蟲の音も一時途絶えたのである。彼は兩手を顏に推當てゝ、聲ある限り、涙ある限り、泣て泣て泣き盡したところで、袂を以て面を拭き拭き徐々家路に就たのである。あゝ有難い月のお蔭で助かつた。是が月見の終であつた。

月は此所ばかりてはない、遍ねく不幸の家を照して居る。涙乾かぬ疎屋には、あはれ憂き世の恩人として、心細き病の床には、慈しみ深き乳母の如く、故郷を慕ふ配所には、貳心なき舊友の如く、絶望せる牢獄の裡には、天國の救の光の如く臨むのである。嗚呼月よ、誰か爾の慈光を仰がぬものがあらうか。

拾ひぶみ

かの子

昨夕はうれしい逢瀬でございました、あの月の佳かつたこと、今に忘れません、月にかゝつて薄すりと羽衣を毟つて投げたやうな白雲、見渡せば遠くには黒い森、近きは公使館の白堊、ひや〳〵と身に浸む夜風に熱き胸を吹かせて、二人寄り添うての漫ろ歩き、まあ、其心持は、私一生忘れないと思ひます。あのまゝを書に書いて、一枚づゝ持つて居たらと思

へど、私には繪心もございません、せめて貴郎の美しい筆に上して、譜に作つて歌つたらと思ひます。

今日一日は全で夢見るやうで、何もかもめちやめちや、人樣の云ふ言も微かにしか聞えず、目に見るものも物一重隔てた如く、又何か温い雲にでも乘せられたやうに、歩けども足地につかず、机に倚れて居ながら、身の在る處を知らないと云つたやうでございますの、而も心の底の嬉しさ、茫乎として何事も意識しないのに（意識といふ字、貴郎に敎はつたの、こんな時に使つても可いでしやう）只一人でに微笑まれます、今朝もお手水を遣つて鏡に向ふと、誰だか後に人の立つて居て、私の顏を覗き込むやうで、氣がさして仕方がなかつたのでしたが、（まるで狂人のやうね）恐ろしさうに鏡を覗くと、にこ〳〵と私の顏でしやう、あれ、いやだ、と口の内で言つて又覗くと矢張りにこ〳〵と私の顏、自分の顏ながら氣恥かしくて、落着いて見て居られないのです。此時ふと氣が着いたやうに、貴郎が背後に忍んで居らつしやるのではないかと思ふと、急に身が抱き縮められるやうで、火の出るやうに頰から耳が熱くなり、氣がぼッとして遠くなりました、考へて見ると私ほんとうに馬鹿ですことね。

今夜もまた明月、これを書いて居る間も、初中月が射し込んで居ます、それに就いて思ひ出すのですが、今から四年前、姉樣が亡くなつた頃、新らしいお墓へ毎日のやうにお參りして、生きてる人に言をいふやうに色々な話をしました、或る晩方にお隣りから美しい桔梗を貰つたのです、これを姉樣に上げたいと、思ふと、もう矢も楯もたまらず、お母さんが明日にしろと仰しやつたのも肯かないで、無理にお母さんの手を引いてお墓へ參りました、それが丁度美い月の夜、背戸を裏へ爪先上り、野道を一町餘り行くのです、草の露に裾をからげ、私が花を持ち、お母さんが水をさげ、今でも目に見るやうです。

お墓は小高い坊主山の頂きですから、こゝからは一望十里といふのですか、彼方此方の村落が薄墨て

ぼかしたやうに見えます、餘り美い景色ですから、山を見たり、月を仰いだり、お母さんも無言、私もだんまり、暫らく無言て佇んで居ましたが、いつしか姉樣の病氣の時のよなどを考へ出して、何となく悲アしくなりました「お母さん、なぜ姉樣は死んだりなんかするんでせうね」と、私ほろりと涙がこぼれて、さう云ふと、お母樣は横を向いて、何ともいはずに、ほろ／＼と涙が頬を傳ふばかりでした、私は急に悲しさが増して來て、わつと聲を立てゝ泣き出しました。

　此時お母さんが、「お前も大きくなつてから、姉さんのやうにおなりてないよ、親の許さぬ薄情な夫を持つのてはありません」て申しました。其時はまだ十二三の物心もないてのしたから、何事のあるとも氣着きませんてしたが、今の此身に引くらべて、母の言葉を考へ出ずと、嬉しいうちにも戰慄として心細う感じます。

　私の案じるのはこればかりですの、貴郞はそんな薄情な方てはないと思ふけれど、一體取のぼせ易い血すぢなのですから、どうぞ見捨てないで下さいね。此次の樂しい日は何時になるの？私…………
…………（と此から破れて無し）

歌

尾上柴舟選

○　村田愛美

松が枝に朝月あはき山の宿小窓あくれは啼くほととぎす

何となく涙そゞろの野の丘や六つにみちたる鐘もわびしき

秋の野に立ちて彩なき花にゐむさびしみの皇子に歌まゐらせむ

ゆく秋をうらぶれ男の子旅にして關屋の雨のきくにえ堪へぬ

かるかやに桔梗に庵の秋ふけて阿伽井のほとり蟲の音もなき

蔓草に朝露さむき萩小徑鄙唄誦してゆくや妹がり

霜の夜を一里小堤月ふけて小唄にかへる人繪に似たり

秋姫が御輿にもれてさびし野の夕日にやせし亂れ白萩

うつゝなの思燃えては高樓の千人(ちたり)の樂に姫ゑみまさぬ

白銀(しろがね)の小さき冠に天の子が朝の扉による若きほゝゑみ　(人に)

ふとしては果敢なき夢におそれ得て悩みたえせぬわれ愁憂(うれひ)の子

そのかみのふりし昔の彩に香に驕りて立つや五重層塔

七村の美男利八が追分に少女つどひぬおぼろ夜の月

鷄も鳴かず眞晝靜けき山寺や御經ふせては夏の雲見る

この思ひこの日この時天に投げて七彩にほふ虹にとかさむ

夕靄に草やはらかき牧場徑今日も一日を歌にくらさむ

○　長谷白眠

繪日傘に松のこぼれ日ゆらめきぬ君と露ふむ夏草の道

青楓瀧の飛沫にそぼぬれて百合をる人の袖はにじみぬ

朝水にとくや黄金の亂れ髮梢もれくる山の日のせて

宵月は君が書堂の花窓に夢の如くもうすあかりして

楡の葉のちりてはつくる水の輪のさびしう暮るゝ森蔭の池

繪もかゝす草に寝ながら丘の上の梢ぬひゆく夏の雲見る

○　中澤天嶺

古びたる御堂の燭に雨見えて石階(いし)に泌み入るこうろぎの聲

小百合さくみどりの丘の草に寝て白帆小さき夏の海見る

鯛の歌にまひるの夢さめて繪蚊帳すゞしき水の宿かな

雲美じき希望の海の朝ぼらけ片帆あげても君が舟ゆく　（田村愛美君に）

秋姫か賜びし海羽をふり／＼て月に聲よき露野鈴蟲

○　秋田華溪

秋の日の暮れてつめたき夕雲におもひそゞろのわかき歌人

秋花は露にしをれてすゞ蟲の曲に添ふべき月の影なき

あたゝかき君が情にほだされて悶の影の地に長うひく

ともすれば蝶のまなざしなつかしみ露をわけては入る野路かな

○　田中靜潮

落日は森を射貫きて夏の野の草に流れて影長くひく

虹を橋に星を燭に扉を開けて君召さるゝ日召さるゝならば　（栗舟子に）

紅は否粟やろと秋姫がくだしゝ花か野べの桔梗

並井樂子

深山路や凌霄花つるひきて小雨のひるを行く駒の君

瑠璃皿に葡萄盛りくる宿の子の長髪なぶる水樓の風

倚いでゝ月と燈籠と虫と草と女ばかりの萩寺さむき

○　若麻績長風

四千年タイムにくちぬ榮を見よと夕日におごる大金字塔

朧夜や文使らしき京かむろ柳を出でゝ櫻に入りぬ

詩の神の犧牲とならんのうらぶれやキーツに似たる吾がさだめかな

○　西宮白菊

立つ秋の小橋によれば紅色の雲南へ流れてやまず

夜更けてはうつや砧も露にぬれて二十日の月に萩のこぼるゝ

○　佐久間霧江

踏めばゆらく石のきざはし數二百苔の香檜の香寂の香高し　（鹿野山白鳥社に詣でゝ）

古宮の神木に古りたる咀釘小雨降る夜を魔と亂るらむ

○　小谷寒鴉

雨すぎて雲猶重き墓原や魂呼びさます五位鷺の聲

手をとりて夜の露しげき野を二人野をたゞふたりさまよひ泣かば

世にうすきさだめとばかり思ひますか色にもえては散り行く花を

老の目にあふるゝ涙ぬぐひても湧き出づる今日をほまれの日とは

○　塚田夕波

逍遙にをかしき野べの月あかり露に袂の重さも興や

つらき世になさけいのらぬ身ながらもさすが夕べは人の戀しき

旅の秋はかなの我が身なげく夜をわりなや人の運命に泣かる

○　鷲尾美雲

樂堂や月影高き秋の夜をピヤノの音の斷えてはつゞく

月愛づる歌のみ聲も聞ゆかと一夜御門の柳にたちぬ

欄によりて星の清きを數ふれば秋をさゝやく園の竹むら

○　岡田鯨洋

樂の音に暗の戸開けて君を見てみ手取りし時ふと目盲たり

秋風は我が乘る駒の尻吹きて稲子溺るゝ黄金の波

○　安藤安

交る〳〵白帆數へて幼子が磯村つたひ行くよ秋の日

○　丸茂天靈

御嶽(おんたけ)の行者の衣垢染みて木曾路八里を秋の風ふく

○　高瀬淡嶺

舞衣は水の紅葉の紅淺黄秋のみ神に袖引かるゝな

暮の鐘野を渡り來るあと追ひて靜かに秋の迫るを見ずや

乾飯の二升重たき秋の山落葉ふみ行く吾れは旅の子

水際や灯ともし頃の夏の潮ふむ跫音にまたも滿

ち來る　(宮島にて)

○　中澤鼎介

詩も賦せて沈む日よわき野にたてば愁の肩に落葉みだるゝ

枯蔦に夕月暗き草の屋の壁のくづれに蟋蟀鳴く

も夕張山(ゆふばり)の雲に歌やる蝦夷の子が額(ぬか)の花環に秋の日落ちぬ

高うなる鐘に羅馬の秋さびて古塔の蔦に夕日うするゝ

詩の神の寵兒となりて花抱きて共にすまむか椰子しげる島　(長谷白眠君に)

○　村田敏子

水めぐる小村五軒の花卯つ木垣による子の傘小さいかな

葉櫻に寮の灯ゆらぐ宵闇を三たびまできく山ほとゝぎす

薫風に檜笠ふかせて越すや人木曾は旅寢の夢よきところ

夫まつとおぼろ月夜を磯にして數へし帆影十には越えし

怨じてはまたも不才のわづらひに泣く子一人の手をとりたまへ　(師の君へ)

詩の榮とみどりあふるる朝の野や小鳥ひかりの盞しきに啼くよ

▲前號正誤　ふたゝびはかへらぬわれととほく／＼蜩なく野友は幾里を、寒鴉、

▲歌募集　東京小石川區原町百三十三番地尾上柴舟宛の事

蓼の花

繞石選

花蓼やもがさ送れる桟俵　初聲

小砂利とる多摩川沿や蓼の花　同

干してある網の雫や蓼の花　同

岸に着いて砂嚙む舟や蓼の花　同

小屋古き賃取橋や蓼の花　同

花蓼や落せし探る渡し錢　同

花蓼や踏み込んである下駄の跡　四綠

蓼の花芒は風に吹かれけり　圭愛

秋草の庭の花蓼刈りとりぬ　百山

提灯に螽とぶなり蓼の道　圓外
蓼の花水からびたる小川かな　枕石
田の畦の電信柱や蓼の花　英子
足洗ふほどの小川や蓼の花　信一
曳船の綱の長さよ蓼の花　浦亭
朝顔の垣や穂蓼の内隣り　きよ子
野社やいつの土俵に蓼の花　黄村
花蓼に蟹這ふて居る河原かな　美雲子
根上りの蓼に花咲く葎かな　白江
蓼さくや目高の多き裏の川　七三
花蓼や渡頭すたれて石の段　苦風
蓼の穂の小門にせまる野寺かな　瀧北
蓼の穂に西日はれたる出水かな　同
蓼の花ちよろ／＼水の川に落つ　五習
鮒つりのしやがんで居るや蓼の花　同
田の中の水飲む牛や蓼の花　葩人
花蓼に句を多く得し馬上かな　同
花蓼にさかさ日照の續きけり　青龍

蓼の花素立の家の腐れけり　青龍
櫓田のだら／＼水や蓼の花　石羊生
蓼の花四ッ手の網をからげけり　同
花蓼や家鴨飼ふたる篠圍ひ　竹の子
下水堀蓼咲て水澄みにけり　同
犬蓼の花いやしむや杖の先　春坡
花蓼や乾き乾かぬ岸の泥　同
雨ふれば流るゝ溝や蓼の花　碧子
柿うてば柿落ちてけり蓼の中　同
蓼の花螽の脛は弱りけり　五遷
蓼の花秋兒の雛は孵りけり　同
花蓼や青い柿賣る團子茶屋　同
竹林の枝高う穂蓼疎らなり　夕村
下草の穂蓼刈りけり山椒の木　同
花蓼にあした鶺鴒小走りぬ　同
花蓼に打ちふる笠の雫かな　同
純白の家鴨飼ひけり蓼の花　同

選者吟

掛稻や掛稻や花蓼の畦
魚籃(びく)の鮒の飛び出て居るよ蓼の花
歎足らぬ六地藏尊蓼の花
踏切や芒は枯れて蓼の花
右大師道の石立ち蓼の花
花蓼や泥鰌とる子の尻見ゆる

十一月分課題　百舌鳥　十月十八日限
十二月分課題　媒拂　十一月十八日限
應募俳句は東京市本鄕區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事



評論

閣臣の退引

松井柏軒

權勢の地位には永く止まる可らず、功成り名遂げて退くと、何ぞ啻た高士哲人のみに限るべけんや

講和條約の成立には、洵に已むを得ざる事情ありしなるべし、苟くも平正に我が國狀と中外の形勢とを審思するもの之を諒とせざるは莫からん、然れども其の條件の不滿足なりしとは蔽ふ可らず、我が國民が海陸軍の有史以來未曾有の戰捷を獲たるに醉ふて、講和に過大の希望を囑せしと、或は悉く其の當を得ざりしやも知れず、而かも講和條件の不滿足にして、我が要

求の所謂最小限度をすら十分に貫徹し得ざりしは事實也、今の閣臣等も亦吾人と齊しく日本人也、之に不滿足を感ぜしヿ亦恐らくは吾人と同じからん、此の不滿足の情は昂まりて憤激となり、沈みて失望となり、天下相和して今の閣臣に國事を託す可らずと做すに至れり、而して此の結果は、竟に擧國一致を破らずんば止まざらんとす

姑らく閣臣の地位に立ていはゞ、是れ實に心外に耐えざるなるべし、國民多數の憤激と失望とに對しては、大に辯解し議論して其の惑を正さんヿを熱望すべし、然れども戸毎に說き人毎に諭すヿ得て爲す可らず、大に新聞紙の力を藉る亦既に其の機を失せり、假令大に新聞紙の勢力を藉り、戸毎に諭し人毎に說くも、竟に國民の多數を信服せしむるヿは則ち難し、故に要は閣臣自から退引して更らに國民多數の欲する內閣を作り、之をして國民と共に擧國一致以て戰後の經營を爲さしむるに在り、吾人は此の點よりして閣臣が國家のため强ひて自から、引退せんヿを希望す

ナポレオン三世は其の新聞紙多數の主張と國會の希望とに從て一八七〇年の戰役を起し、大に獨逸軍に敗られて其の帝位を失ひ、併せて佛國の敗辱を招きたりき、故に史家多くは國論に盲從するの危險なるをいふ、偉大なる政事家の國論に從はずして寧ろ國論を善良に指導すべきものなるを稱す、今我が國論の多數は實に講和を非として其の破棄を唱ふ、閣臣若し之に從はゞ則ち戰爭を繼續するの外なし、則ち斯の如くせば國民の多數謳歌して閣臣の萬歲を唱ふべし、天下豈之より易きヿあらんや、然るに閣臣が此の易きに就かずして强ひて不滿足なる講和を爲し、自から國民多數の怒りを買ひ、誣譏誹謗を受くるを辭せざりしは、故らに其の難きを擇べる也、閣臣は之を以て幸ひにナポレオン三世の過を犯さゞりしものとして自から慰さむる所あるべし、故に繼ぐに辭職を以てせば、是れ一身を犧牲として國家に殉ぜし也、政事家の美德幾んど之に優さるものなからんとす、後世時務に通ずる歷史家あらば、正に筆を極めて閣臣の智慮ある措置を頌揚するや必せ

り

且つ今の閣臣は、其の名の第二流内閣なりしに拘らず、能く多くの大業を成せり、日英同盟を締せるは其の一也、日露戰役を起せるは其の二也、運籌書策其の宜しきに適ひ、海陸共に連戰連勝して大に日本の聲名を世界に揚げたること其の三也、更らに日英同盟を改訂し擴張したること其の四也、時に及んで日露戰役を終局せしめたること其の五也、凡そ此の一を成すも尙ほ内閣の大事業として後世に名を貽すに足る、况んや其の五を併せ成したるをや、桂氏以下閣臣の名譽たる亦實に偉大なりと謂べし

斯の如くにして尙ほ現位に戀々すべしとする乎、夫れ高木は風に折らる、近時の東京市の紛擾の如き以て閣臣の鑑戒とすべきものならざらんや、桂氏以下宜しく潔く引退して以て益々其の晩節を汚す可らざる也

然れども其の去るは、講和條約の批准交換を終りし後ならざる可らず、之を終らざれば戰局の收拾未だ全しとするを得ざれば也、若し其れ臨時議會の事の如き、戰後經營の難問題の如き、後繼者之に當るべし、必らずしも桂氏等の苦慮を要せず、桂氏等の閣臣は唯だ功成り名遂げしとして退けば可也、

私觀小言

楞陰生

吾人今日の理想

科學の智識を利用して世界の進歩に伴ひ、藝術の趣味を賞翫して人格の優美に志し、社會の革新を目的として終身活動を止めず、宗敎の靈光を渴仰して永久の安心に住る。吾人今日の理想たゞ斯の如きのみ。

第二平和會議

露帝再び第二平和會議を提唱し來る。吾人は其提唱者の露帝たると、ルーズヴエルトたると、將た又其他の何人たるとを問はず、又果してかゝることの直ちに行はるべきや否やを論ぜず。たゞ世界一般の人心が漸く絕對的平和を渴望するの傾向著しきを見て、心中窃

かに喜び禁ずる能はざるを感ず。

須らく毛蟲を取るべし

海老名氏曰く、人世を救濟する、基督敎は根本にして社會主義は枝葉なり、故に我等は迂なるを厭はずして常に其根本に勉めつゝありと。此論を譬ふれば林檎樹を栽培する、先づ其根を養うて其枝葉を後にすべしといふに同じ、誰人か其理の正しきを認めざらん。されど是れ普通の林檎樹についていふべきの言のみ。今若し一の林檎樹あり、其枝葉悉く毛蟲の害する所となり、萎靡凋衰將さに枯死せんとするに、毫も其毛蟲を取ることをなさず、偏へに養根論をのみ唱ふるものあらば、吾人之を林檎樹を愛するものゝ所置といふことを得べきか。彼の社會主義なるものゝ人世終局の理想を齎らすものに非ざる吾人之を知る。而かも今日の自由競爭の害や資本家制度の弊や、是れ悉く簇々たる毛蟲の群となつて社會の窮苦を來しつゝあり。吾人先づ此毛蟲を取て、而して後根本の養育に從ふ、蓋し事の順序を得たるものなるべきを思ふ。

今日の態度を一變せよ

吾人は今日の社會主義者に向て甚だ慊らずとする點あり。そは彼等が坊主憎けりや的筆法を以て制度其者を打破するのみに滿足せず、併せて富豪資本家等をも仇敵と見做すが如き態度に出づること是れなり。見よ、今日社會主義の何たるかを了解せざる多數人民の頭にはたゞ「社會主義は富豪資本家の仇敵なり」てふいとも根深き感情のみ牢として拔くべからざるものあるを。然れども吾人を以て之を觀る、社會主義は啻に勞働者の味方たるのみならず、又實に富豪資本家の安慰を來さんとする「驚嘆すべき救世の敎義」也。若し社會主義を速かに實行せんことを欲せば、社會主義者は宜しく今日の態度を一變し、「社會主義は富豪資本家の仇敵にあらず、人類全體の救世者なり」てふことを世に傳道說敎するを急務なりと信ず。

廿世紀の特徵

十九世紀の最大特徴は一言すれば自然科學の發達にありき。其飛ぶが如き長足の進歩は人力を以て征服し得る自然の範圍を擴張し、玆に物質的生産の額俄然として增大しぬ。然れども人は只其生産の多額なるに驚きて、分配の公平ならざるを顧みざりき。竊かに思ふ、新たなる廿世紀は是れ人文科學發達の時期にして、社會制度の得失利弊を研究するもの益々多く、終に一種の社會主義的制度の確立を見るに至るべきことを。

間の子たるを知れ

人間を以て全くの惡魔なりと見ること勿れ、汝恐らくは悲觀に陷りて遂に自暴自棄に流れん。人間を以て全くの善神なりと見ること勿れ、汝恐らくは樂觀に過ぎて却て齟齬失望に遭はん。所詮人間は魔と神との間の子なり、彼れ慾情を動かせば忽ちに墮して惡魔となること易く、彼れ靈火を照せば直ちに騰りて善神たるも亦難きにあらず。よく此間の消息を呑み込みて人間に對せざれば、終に價値ある何事をもなし能はざるべき

を思ふ。

人間本位に復れ

口を開いて果樹の下に立てるニユートンはよく引力説を發見し、首を傾けて湯釜の前に坐せるワットはよく蒸氣力を發見せり。吾人はこの意味に於て初めて路傍の石を拾うて一生研究の材料とする學者の存在を是認す。然れどもたゞ〱好奇心の故に漫然かゝる研究をなさんとする滔々たる今日の學風、吾人終に其弊の堪へ難きを見る。あゝ何ぞ人生本來の意義を悟了して人間本位に立ち復ることをせざる。

恕の一字

智は鏡の如く明かにして情は炎の如く熱く、意は鐵の如く強くして德は海の如く大いなる、是れ疑もなく吾人の理想的人物なるべし。然れども人に斯の如きの完きを求むる、何人か悉く其資格を備ふるものぞ。只吾人須らく恕の一字を體し、各人の長所美點を採用し、兼て之を賞讃するの雅量なかるべからざるなり。

文藝時觀

稱號を與へよ

美中天

屁のやうな名

△名をうるに急にして、其實を養ふに忠ならざるは青年文士の弊である、名をうるのが別に惡いといふのではないが、實のない屁のやうな名を出したがるといふのは實に不心得の極であると思ふ。

△原稿料は要らぬ、兎に角之を活字に組むで刷つて貰ひたい、と云つて書肆を口說いたり、新聞雜誌に關係のある知己を賴むで揭載して貰ふの榮を得るなどは、意氣地のない骨頂である、それも匿名か何かで、新聞雜誌を自分の草紙にして文を練らうといふのなら可い、けれども、こんな人に限つてさうでない、自分の名の活字に組まれたのを以つて一廉の文士を以つて氣取り、天晴名譽として頗る鼻息が荒い、天下の人は之れに依つて悉く自分の名を覺えて居る筈だと思ふ、焉んぞ知らん、現にそれを讀んだ人も覺えて居らぬ、よしんば、たま／＼覺えて居てくれたにしろ、それは下らぬものを書いた人として、寧ろ輕侮の意味で以つて、然らざれば非道いものを讀ました失敬な奴だといふので以つて、僅かに其人の存在を知つて居るに過ぎぬ。

△重きをなさぬ名を知られて、輕蔑されて、怒られて、何の利益がある、世に割の合はぬ話とは此事である、御本人から云へば御滿足で、即ち主觀的に己れは豪いと思つて、獨りよがりで滿更捨てたものでもないのであらうが、凡て獨りよがりは害がある、健康を害すると醫者が云ふ。

△若し畢生の力を注いで書いて、いざ出版しやうといふ場合に、日頃の祟りは直に効力があつて、あなたのお名前では賣れませんと書店で云ふ、然らば自費でと云つて出版しても、よく下らないものを書く奴が出し

た本だ、と頭から見向きもしてくれるものがない、常に屁のやうな名を出したお蔭に、屁のやうでない、多少は價値のある物を書いたのでも、人は依然くさいものとして近所へも寄り付かぬであらう。

文壇を退け、

△いまだ名を出さぬ人に向つての希望は前に云つたが、既に名を出した人に向つても注文がある、づらりと今の文壇を見渡した處、幾十人あるか幾百人あるか知らぬが、其中で十の指を屈した殘りの人々は、多くは二束三文、吾人の所謂屁のやうな文士である、(吾人の此に云ふ文士とは、先づ主に小説家と詩人だけにして置いて)、吾人は此等の文士が新小説に文藝倶樂部に其他新聞雜誌に掲載したものを見て、何故に新聞雜誌はこんな拙惡な作物を載せるかと思つて憤慨する、一歩進んでは、何故にこんな拙劣極まるものしか書けないのに臆面もなく文壇に籍を置いて居るかと怪む。

△人には各々長所と短所とがある、彼の小文士は、惟ふに自己の短所とする處をやつて居るのであらう、恐らく長所は他にあるであらう、宜しく文壇を辭して自己の長所に向つて其職を求むるが可い。

△吾人は小説家や詩人は必ず其天才を有して居なければならぬものだと思ふ、外の職業とちがつて、平々凡々の詩人作者は、決して社會は要求せぬのである、故に彼の小文士が、假りに詩人小説家たるべき長所を有して居る、換言すれば、それが彼等の凡ての中の長所(ベスト)であるとした處が、天才でない以上は文壇に不必要である、いつその事商家の廣告文の作者にでも爲る方が可い、吾人の注文とは即ちこれで、切に小文士先生方の文壇を退かれんことを希望する。

文士登用試驗

△尤も御自分が道樂でやるのは別問題である。

△併し己れを知れる賢明な人ばかりなら、自ら天才なきを知つて文壇を退きもしやうが、案外に天狗のみのお揃ひであるから困つたものである。玆に一法がある、試に云はう。

△栴檀は二葉よりかんばしとは千古の明言と信ず

る、詩人小説家も其通り、此人は天才があるかないかと云ふことは、其處女作を見れば知れるものである、たとへ多くの缺點があつても、何處にか天才の面影の宿つたのもあり、缺點がなくても後世恐ろしくないのもある、今日迄大文豪といはれ大詩人と稱せられた人々の處女作を見ると、拙いのは拙いなりに、上手なのは勿論、那邊にか侮る可らざるものがあるのを見る、これ爭はれぬ事實である。

△故に現今の大家といはれる某々氏等が委員となつて、年一回全國の文士希望者から其處女作を集め、之を檢して天才のある極めて少數のものに文士といふ稱號を與へる事にしたら可からう。

△或は中には見損ひもあつて、次第に見込のなくなるやうなのもあらう、其時には委員等が協議の上、誰々は文士の資格がないと決議して稱號を剝奪する、若し委員に不公平の恐があれば、時の批評家をして此議に與らしむるも可からう。

△文士の稱號を與へられたものは、茲に初めて新聞雜誌の依囑に應じて書く、新聞雜誌も亦文士の稱號のないものゝ書いたのでは巾が利かず、讀者も喜ばぬから自然文士に依囑するやうになる。

△すると文士なるものは非常に尊敬すべきものになる、從つて其試驗論文とも見るべき處女作に苦心するから文士の爲めにも大なる修養となり、輕々しく屁の如き名を出さゞらん事に努むる、而して實際に於て天才が得られるのである。

△且つたとへ一旦大家と稱せられた人でも、いつも拙いものばかりを出して居ると、これにも辭職を勸告するとにすれば、文士の椅子も甚だ安全でないから、各々其道に忠實になる、さすれば、いやでも上品が出來ずには居らぬ。

△今のやうに駄文士の澤山なのは、我文壇の醜態であるばかりでなく、國家の不經濟である。

△今のやうに文士の有り難からぬ、無勢力なのは、一に駄文士が多いからである。駄文士の多いのは名を賣るに汲々として、其實を養ふにおろそかであるから

てある。之をすべからく吾人の説に從ふが可からう。

文壇消息

▲漱石氏の「一夜」我中央公論誌上に掲げらるゝや、或者は朦朧にして解すべからざるものと云ひ、或者は無意味なる作なりと云へり、而も目ある者は其價値を知れり。土井晩翠氏は我社に書を寄せて、近時文壇の珍品は漱石君の一夜也と云ひ、綱島梁川氏も亦之を激賞して措かず、曰く漱石氏の文名は仄に之を聞きしが、其作を讀みしは一夜を以つて初めとす、其飄逸にしてアイロニカルなる處、他人の容易に企及し得ざる妙あり、文名の一代に高きもの故なきにあらずと

▲島村抱月氏歸朝す、我文壇は氏に向つて多大の望を囑しつゝあり、而も氏の活動せんとするは文壇の何れに於てなりや、主に作者としてなりや、又批評家としてなりや、將又早稻田大學の教授としてなりや、吾人は樗牛以後批評壇の如何にも寂寞なるを歎くもの、願はくば批評家としての抱月氏を迎へしめよ、而して氏の長所も亦こゝにあらんと信ず

▲幸田露伴氏は其門下生の爲めに析賞會といふを設け數十の門生をなして毎月一回其作を出さしめ、叮嚀仔細に之を批評し添削す、其集まる處の文藻甚だ多きにも拘らず、氏は毫も倦む色なし、或は曰ふ、今後露伴氏の門下より出づるもの頗る注目するに價ひすべしと

▲島崎藤村氏は小説『破戒』を起稿中なりしが、今や其八九分を書き了りたれば多分明春發兌の運に至るべしと、こは非常に大作の由なり

▲登張竹風泉鏡花二氏の沈鐘の翻譯は多分本年中に脱稿すべしといふ、文壇の前途亦有望なりといふべし

漫評

人物月旦



(一) 植村正久

八面生

世人は耶蘇教界の大立物として故新島襄氏を推し、この人によりて教徒の勢力が生じたやうに云ふが、其の實新島氏が日本基督教界の品位を下落さしたことも大なる者て、氏が外人に向つて日本國を野蠻劣等國の如く吹聴して、叩頭平身金を貰つて傳道と學校の資本にし、金の爲に耶蘇教徒となる者の生ずる惡風習を起した。内村氏の如きは新島氏を厭ふこと甚しく、同志社の前を通ると唾をひつかける位てあつた。植村氏も新島嫌ひの一人て、外人の力で派手に傳道をすることはしない。新島氏を首領とした同志社、クラーク氏によりて導かれた札幌農學校とは、明治初年て最も有力なる信者製造所てあつたが、前者よりも後者に比較的

誠實なる信者が現はれてゐる。しかし植村正久氏は何方にも關係なく、ブラウンといふ外人より道を聞き、十五歲にして洗禮を受け、其れより終始一貫毫末も敎義に對して疑を起すことなく、學殖日に加はるも、只其の信仰を固くするのみて、別に眼界の廣くなる譯てもない。英國の天主敎信者カーヂナルニユーマンは其の自傳の卷頭に於て、自己が心の幼時より老年に至る迄毫も變ぜず、敎理に對する考も同じといへるが、植村氏も彼れと同樣、十九世紀の思想激變の中にあつて、絕えず讀書を怠らぬ學者が四五十年の前も後も思想に變化がないとは充分變つた頭腦てある。しかし植村氏はニユーマンのやうに嚴格一方てはなくて、滑稽趣味も解してゐる。江戶ッ子てある丈に警句にも富んてゐる。嘗て大隈伯に會つた時、伯が「基督敎的思想も結構だが男女の間の道德は儒敎の方が勝つてゐる。西洋流ては兩性間に間違ひが起つていかん」といふや、氏は微笑して「市谷の監獄を見ると、男囚と女囚と分れて、醜聞もないやうだ」と答へたので流石の大言伯も默つてしまつたさうな、氏は非常な咄辯家て、說敎者になり立ての頃は、目ばかりパチ〳〵させて何をいふのやら薩張分らなかつたさうだが、大進步をしたと

いはれる今日でも、初め二三度は其の說敎は言葉からして分明てない。しかし一たび分り出すと、無限の味があつて、其の訥辯がとても雄辯家海老名、宮川諸氏のと比べ者にならぬ程の價値を生ずる。これ一つは氏が文學の素養があるからて、一時「日本評論」といふ雜誌て雅致ある文章にて、堂々たる文學論をしてゐたことがある。今日の福音新報にも折々趣味深き文章があつて、とても新人や基督敎講壇の企て及びがたいのを見る。嘗て或人が耶蘇敎界の三村、即ち內村植村松村を評して、內村はブランデー、植村は淸酒、松村は濁酒だといつたが、稍當を得てゐる。基督敎界には道念堅固の聖徒も多いが大抵は鐵製や鉛製で、粗野てあるが、植村氏は純銀の如く、雜り氣がなく、又無風流てない。どことなく脫俗的て其の說敎のどことなく、宗敎の靈泉を汲んてゐる趣あるは、他に例なしと斷言する。理其の者は海老名氏の方が勝つてゐやうが、情味が缺乏してゐる。博覽强記亦類稀にして、宗敎書以外に渡つても驚くべき智識あり、八歲にして八犬傳を精讀し、ユーゴーの哀史は一夜で通讀したとは氏自身ていつてゐる。今日文學者て、ダンテだとか、ミルトンだとか西洋通を云ふ人は多いが、大抵鼻先學問て、植村內

村諸氏の如く深く味つてゐる者はあるまい。かゝる學者でありながら、西洋の保護を仰がぬ教會に屬する爲、貧乏甚しく盛夏尚袷を着せしことは嘗て余自身に目撃したことがある。粗衣粗食宗教家中でも稀なる程なれど、身體甚だ强健にて、腕力又人に過ぎ、宗教上の爭て不服なら腕て來いと云つてゐる。かの内村氏の瘦顔細軀なるに對し、氏の豊顔肥滿なるによりても、彼れの情の人にて、煩悶苦煩せるを知り、此れの意志の人にて、泰然自若たる所以を知る。

京都園秀諸家は材料多きに過ぐるが爲め之を次號に讓る。

鬼面魔語

醉美生

○山路愛山氏と木下尙江氏とは僕の崇拜して居る人物であつた。併し僕はたゞ其文章を通してあらはれた思想によつて二人を崇拜して居つたので、其他のことについては毫も知る所なかつたのである。然るに先月二十三四日の兩日、本郷會堂に於て明道會の講演が開かれ、此兩氏の講演を聞き、其風采を見、其態度を察し、其謦咳に接して一層よく兩氏を知り、一層深く兩氏を崇拜することを得たのは僕の非常に愉快とする所である。

○僕の見る所では木下氏は革命家であつて愛山氏は革新家である。木下氏は劇烈愛山氏に優り、愛山氏は偉大木下氏に優る。木下氏の大目的は先づ破壞にある、愛山氏は仝時に破壞し且つ建設することを期する。之を山に譬ふれば木下氏は炎々天空を焦がす噴火山で愛山氏は泰然坤軸を壓する大嶽である。愛山氏は飽くまでも歷史の立場によつて現代を批評し、木下氏は何處までも直覺の命令に從て人心に警告する。愛山氏は半ば學者的であつて木下氏は半ば詩人的である。文筆にあらはれた木下氏を以て、講壇にあらはれた熱烈奔放なる木下氏を想像することが出來るが、文筆にあらはれた穩健摯實な愛山氏を以て、講壇にあらはれた活氣あり豪放なる愛山氏を想像することは出來なかつた。

○玆に最もよく此兩人の性行をあらはしたと思はるゝことがある。愛山氏は嘗て戀愛をむき出しにするのは殺風景である、忍ぶれど色に出でにけり位がよいと書かれた。然れども木下氏は之に大反對で、忍ぶれど色に出でにけりといふのは戀愛の壓抑より生ずる悲劇ではないか、宜しく赤裸々的に告白すべきであるといはれた。彼は穩和の見にして是れは熱烈の叫びである。

○木下氏が兩性問題を論じて今の世は夫の外に戀男あり、妻の外に戀女あつて、一人として心に姦淫せざるものなしと罵り、今の女子教育は悉く下女的教育で、其根本は賢母良妻を作るが爲めにあらず、全く男子と生存競爭せんが爲めなりといひ、勞働問題は力の問題にあらずして賃銀の問題なり、賃銀の廉なる婦人が賃銀の高き男子を追出すは自然の理なりと論じ、斯の如きは實に根本的の誤りである。男は働いて女は子を産むべきものである、良妻ならしめんと欲すれば先づ眞正の戀愛學を敎へよと叫んだのは殆んど革命的詩人の聲であつた。

○愛山氏が本能論と題して、本能は內より發する力で、外より壓する權力に反對するものである。權力と本能と並び進むときは即ち理想的の世で、權力が本能を抑へつけたときは壓制の世で、本能が權力を叩きつけたときは革命の世であるといひ、近世史は平清盛から始まると思ふといひ、佛教と禪宗、朱子學と陽明學は即ち權力と本能との對立なりと論じたのは確かに革新的豫言者の面目をあらはした。

○兩氏未だ春秋に富み、活氣に滿ち、これから花を咲かさうといふ意氣込である。僕等年少後輩のものは斯の如き熱誠なる人物によつて啓發せらるゝことの益々多からんを祈つて居る。

○二十三四日の講演會には此兩氏の外、島田三郎氏、江原素六氏、安部磯雄氏、海老名彈正氏等知名の士が澤山にあつた、而かも皆是れゼントルマン的演說であつて、我等青年の胸に應ふる感情的分子が足らぬ如く思はれた、獨り、愛山、木下の兩氏は場所外れに大きく、ずば拔けてエラク、豫想外に熱烈であつたので實に僕の崇拜熱を一層高めた譯である。依てこゝに些かくだらぬことを書いて思ふことの幾分を洩らした次第である。

○結婚前の戀愛と結婚後の戀愛とを比較して前者は後者より劇しいといふ人があるが是れは間違つた議論と思ふ何となれば前者は顯勢力であつて後者は潜勢力であるから一寸見たばかりでは直ちに斷定を下す譯には行かぬ。譬ふれば彼は山間の溪流である、水聲淙々たりと雖も其力や餘り強くない。此は山上の瀦池である、水面平かなりと雖も一度堤を決すれば滔々山麓を汎濫せしむるに足る。嘘と思召すならこういふことを考へて見たまへ。若し其戀人が死んだときに結婚前と結婚後と孰れが悲痛慘憺の深いかといふことを。

社會

芝公園（上）

二葉生

芝公園の表面

芝公園、十六萬八千五百五十九坪七合五勺の地は、維新後に至るまで三緣山增上寺に屬し、其間增上寺の支院末寺散在して、之れを九ッに區劃され、增上寺の九谷と稱して居たのである。九谷とは即ち三島谷（みしまだに）、三島中谷、神明谷、新谷、天神谷、袋谷、北谷、南中谷、山下谷と稱しつゝあつた。然るに明治六年六月、公園と稱するに至りて、此の稱も廢滅に歸し、更に園內を區劃して一號地より二十五號地までと爲し、漸次舊時の面目を改めて今日の如く成つたのである。

沿革歷史等を調査するときは、古き由緒のある場所

だけに、それだけに叙する處も復尠なからざるも、只だ單に案内的に記するを以て滿足するのでなく、綠幕を降されつゝある公園そのものを、無遠慮ながら赤裸々にして、一面に於ては風俗上の取締を促し、一面に於ては未だ此の公園内に、如何なる魑魅魍魎の跋扈するかを明かし、何處までも公園は公園らしき神聖を保つ計りを講じ度いのである。

こんな事を云ふと、何だ生意氣な、好加減な駄法螺を吹き立てゝ、知つたか振をしても駄目だと蹴散さんとする人もあらむ、駄目とするものは駄目とせよ。蹴散さんとするものは勝手に蹴散させよ。然れど一度この記事を熟讀して愼思默考するときは、必らず思ひ半に過ぐるもの無しとせずだ。徒らに穴なき物に物を挿し、天に向つて唾きする如き物好をして居る暇はないのだ。

公園の全面を覆ふ處の綠幕を切つて落すには、先づ聊か公園の内、即ち幕の内外を飾り居るものを略記する必要があるから、茲に掲ぐる事にした。

丘陵阪路

丸山、觀音山、地藏山、富士見臺、紅葉山、富士見坂、銀杏坂、切通坂、芙蓉洲、松原、川池井水

柳川、櫻川、赤羽川、蓮池、祥蓮池、淺岡飯炊の井、妙龍水、柳の井、鏡の井、櫻の井、鶯の井、文の井、

橋梁

極樂橋、去塵橋、芝園橋、絲橋、柳橋、接蓮橋、小豆橋、向海橋、天神橋、宮本橋、三島橋、

廟宇

東照宮、台徳院靈屋、御文昭院御靈屋、有章院御靈屋、惇信院廟、崇源院殿

寺院

増上寺、黒本尊、威徳院、天光院、雲晴院、月窓院、華養院、源寳院、廣度院、源興院、源流院、常照院、池徳院、花岳院、常行院、臨池學院、天陽院、淨雲院、最勝院、多聞寮、眞乘院、寳松院、淨業院、學頭寮、清光寺、隆崇院、妙定院、寳珠院、大銀院、鑑蓮社、金地院、光寳寺、岳蓮社、光照院、安蓮社、松蓮社、二玄菴、靈武殿、閻王殿、興國殿、瑞蓮院、佛心院、五重塔、開山堂、經藏、鐘樓淨土或は曹洞事務所等

祠堂

稻荷（丸山、瘡守、幸舍、白全、豊所、瘡護）天滿宮二（茅野、松野）車折、熊野、金比羅、琴平、三峰の諸神社、産千代社、辨天、妙見、羅漢堂、呑龍、子聖權現、瑠璃光如來、閻魔王（寳珠院と天陽院の二ケ所に在り）子育地藏、鍬形觀音、疱瘡除不動、勢至菩薩、火消地藏、富士見臺の觀音、阿加井堂、大黑天、摩利支天、秋葉三尺坊、吒枳尼天等（但し瘡守と瘡護、金比羅と琴平は何れも別祀してある）

樓門

三門、大門、裏門、靈門、天神門、二天門、押切門、勅額門、（昔は四

久保へ出る處に涅槃門、赤羽川に出る柵門ありしも今は無し）

雜部

碑石にて有名なるは東宮御慶事の紀念碑、武田竹塘紀功碑、佐瀬得所遺德碑、神樹碑、大乘妙典一字一石塔、佐文山の墓、市川團十郎の墓、涅槃石、曼荼羅石、五重石塔、故後藤伯と小管氏銅像、伊能氏の紀念銅標、佛足石、菩提樹、大久保彥左衞門手植の梅、檜椿、銀杏、貝多羅葉、和宮御手植の梅、白檀、櫻樹、楓樹、花園にては菩香園、丸山花園、薔薇園、割烹店にては紅葉館、三緣亭。福住樓、其外能樂堂、勸工場、大弓爲朝等あり

十景

寛永年間に撰定されたる境內十景なるものあり即ち萬松林、霜楓燈、翠柳井、台靈廟、白蓮池、極樂橋、涅槃巖、垂櫻樹、圓山月、北溪雪、

以上のものを裏みて、此の公園は府下屈指の名を擅にして居るのである。それの歷史を一々調査すると、中々面白きものもあり、荒誕無稽なるもあれど、餘り必要もなき穿鑿であるから總て省き、徐々と緞幕を片ッ端より掻き除け往かん。

御靈屋と增上寺

德川氏の覇權を擅にする時に中つては、增上寺と云へば、其菩提所として全國幾多の寺院中に於て、上野の寛永寺と共に飛ぶ鳥を落すの勢ひを示し、其末寺に至るまで虎の威を狩る狐の如く、增上寺風を吹かして隨分町家を困らしたものである。明治維新は彼等に大打擊を與へて昔日の勢ひは地に落ち、彌陀の光明も漸く薄らぐ、俗僧どもの道樂も所謂無いが意見の總仕舞で、稍や風紀を改めたやうなもの丶、精神的に改悛したのではなく、露兵の退却と同じく是非なくされるのであるから、墮落の程度精神的に昔日に覆輪かけしものがある。

兎に角增上寺の收入は、他の寺院の如く打擊を受ける事は少ないが、殆んど舊時の十分の一にも減じ居るは明かなことゝて、萬事に縮少されてあるは是れ亦た言ふまでも無い。それ等の事は敢て關せず焉であるが、現今では御靈屋拜見が芝公園の一觀覽物となつて宛然見世物視されて、地方人の東京見物は是れを觀るを唯一としてゐる。

この御靈屋といふは德川家の代々を奉祀する處で、此に祀りあるものは

台德院（秀忠）文昭院（家宣）有章院（家繼）惇信院（家重）愼德院（家慶）昭德院（家茂）及清揚院（家光の二子綱重）崇源院（家光の母）靈仙院（家光の長女千代姫）淨德院（綱吉の長子德松）桂昌院（綱吉の母於玉の方）明信院（綱吉の長女鶴姫）天英院（家宣の室照子）月光院（家繼の母輝子）靜寛院宮（家茂に降嫁されし畏れ多くも今上の御妹和宮）

である。其廟所の莊嚴美麗なるは、既に已に人の知る

處であつて、日光のそれに亞いでは芝の御靈屋であるのだ。故に其の莊嚴を觀んとて此に蝟集する田舍道者は、中々多くあるから一靈屋の觀覽料十錢づゝを徴するも、三個の御靈屋に由つて得る處の收入、年分に積算すると相應の額に登る、其料金は無論保存の一部に使用する筈であるが、半以上は何れにか消えてなくなるなどの怪説さへ傳へられて居る。けれども夫等は實際に調査したのでもなく、又調査せんとするも一朝一夕に門外漢の調査され得る事柄でもないから、先づそんな不正事實は無いものとして、只だ怪説が世間に傳へられて居ると云ふとのみに止めて置かう。無暗に尾尻を捉へて攻撃するが、本意でないのだから……。

僧侶と其附近

増上寺は昔時の如き盛況は無いが、尚ほ末寺は其外廓に圍繞して、此處に住居する僧侶は今も澤山ある。維新前のことは扨て措き、明治十年頃までは附近の割烹店、或ひは神明の藝妓、神明社内の揚弓店の如き、僧侶を以て目的の客とし、之れに寄つて生活するもの尤も多くあつた。從つて俗僧どもに關する醜聲は實に夥しいものであつて、點燈すぎて神明社内を散歩すると、恰も冬瓜船の着たやうに、坊主頭を振り立てゝ抹香臭い錢を惜氣もなく撒き散らす、僧侶を認め、甚だしいのは揚弓店の店頭に腰をかけて、首にのみ白粉燕脂を彩どる怪物に戯れて居たものである。而して彼等怪物の金を掴むには、此の坊主を以て最上とし、怪腕を揮ひて生血を吸ひしと聞いて居る。

處で、現今は何うであるか、僧侶も謹慎して斯かる魔窟に立入らざるかと云ふに、決して墮落坊主と怪物との關係には、其間に墻壁を築くことが出來ない。昔日ほど暴露した擧動は甚だ稀れであるが、其附近の待合等に出入するものに注意し見よ、頭こそ五分刈なれ、身に緇衣こそ纏はざれ、服裝態度こそ純然たる書生の如く見ゆれ、墮落坊主の入込みて怪物の餌食となり居るは、一亭に二人三人に下らざるのだ。甚だしきに至りては銘酒店否大弓店より怪物を伴ふて、平氣の平左て手を携へ山内を散歩するもの亦た少なしとせずである。其散歩後の結果は如何に……、結果を得たる後の結果は如何に……。今日の僧侶は必らずしも昔日の僧侶に譲らず、只だ昔日の如く黄金湯に浴さするだけのお布施に乏しきまでゞある。某院の僧某の如き既に六十に垂んとして、お賓頭顱様の如くテラ／＼光る頭を撫でまはし、電氣燈または光る坊さんと綽號され

ながら、本年正に十八と云ふ一寸澁皮の剝けた怪物を擁して丸山あたりを彷徨し、彌生館近傍の魔窟に潜り込むにあらずやと、歎息してわれに話した人もあつた。從つて附近の風紀は大に壞亂さるゝものがある、それは年頃の娘さへあれば、一ヶ月十圓や十五圓の收入を得るに何の雜作もないので、利慾の爲めに貞操を破らせる親達のあるからだ。

園内の風紀と丸山

東照宮の後に一高丘がある、是れぞ人も知る丸山だが、もと此邊は草茫々と生茂りて狸の住居て、月明き夜半丸山より遠音神樂の響いた事もあり、雨蕭々しよぼ降る中を夜廻りの過ぎ往くと間なく、またカチ〱を撃拆の音のみ凄く、提灯の火影も見えぬ事は數々てあつたが、明治十三年二月に、この榛莽荒蕪の地も拓かれて、大小幾筋の道路を設け山上を清潔にして一佳境とした。

此地は坪井博士が古墳なりと絶叫されてから、一層人の注意を惹くところと成つた。博士は此處の瓢形古墳――伊能氏の紀念銅標の建られて在る處――は古くは九百年前なるべく、近くも六百六十餘年以前のものと斷言された。其後丸山古墳の發掘もあつたが結果は博士の説を證明する事を得たりや否やは、この處の記事に關係がないから、まづ傍らへ寄せて置く。處て丸山の上が開拓されて休憩する茶屋も出來たので、晝夜となく四方より遊客が集つて來る、殊に夏の夜などは納凉を兼ねる散歩者も多い。この散歩者の多くなるに伴ふて、それを目的に女郎蜘蛛の綱を八方に張り、一瞥の横目一笑の靨を餌として、アニマル的人種を陥穽せんとする妖怪變化の出沒も盛んになつた。其妖怪には大怪もあれば又小怪もあつて、種類は素より一定しないが、大怪と小怪の軋轢反目は、この附近の如く甚だしい個所は他に其の類を見ないと、消息通の揚言する處である。

妖怪變化の軋轢と云つたところで、大入道と一ツ目小僧が喧嘩するのでは無く、大怪物を警護する男、小怪物を保護する男とが、各々警護と保護とを全ふして、怪物の手腕餘蘊なく振はさしめんとする結果が、彼等の衝突となり、反目となり、相互に其運動を妨げ合ふに至るのである。又其妨害手段が實に奇々妙々て、種々の策略を迎らして居る。それが陰に陽に虛々實々の法を講じ、或る時を平和を裝ひ、或る時は喧嘩を吹きかけるなど、意外千萬なる振舞のあるは驚かざるを

得ざるのだ。
一二の例を擧げて、彼等が舞臺に現はれて怪腕を弄するよりも、黑幕内に在つて齷齪と作戰計畫する警護者や保護者の運動が笑止である。怪腕を揮ふものを俳優とすると、警護者或ひは保護者なるものは狂言作者にあらねば振附方である。舞臺に於て俳優の妙技を擅にするは、蔭に作者あり振附あつて、其技藝を發揮せしむるだけの土臺を與へて居るのだが、彼等も亦た夫れと同一にして、太夫に怪腕を振はしめるやうに、蔭で糸を操るが警護者または保護者であるのだ。故に、甲の太夫あり頻りに妙技を弄して萬客を擒にするを見て、乙の太夫は爲めに影響を蒙らざるを得ざるに至り、之を回復せんと智惠袋を傾け、借金を質に置いて先づ三圓なり五圓なりの資金を工夫し、之れを保護者の手に委するのだ。保護者は其金を受けて神明境内に走しるを常とする。

　神明境内は藝妓の住む處、銘酒屋の在る處、大弓場の在る處、而して彼等の警護者或ひは保護者は多く破落漢で、彼等に依つて得る處の財を神明の魔窟で消費するにあらねば、品川に走り、洲崎に飛び、又は吉原に潜るを例として、魔窟の妖怪に收入を捲き揚げられつゝあるが、そこは蛇の道はへびとやらにて、某は何處の誰れに精神を奪れて居る位は直ちに知れる處から、乙の保護者は甲の保護者の心酔する妖怪に二圓又は三圓なりを摑ませて、其夜は妖怪の許に引附させて置き、甲の太夫を保護する掛引に妨害するのだ。斯くさるゝ時は太夫即ち妖怪は、其尤も禁物である警察官の姿に目を配らねばならず、又他人の保護者の邪魔を切拂はねばならず、前後左右に目を注ぎ氣を配り、戰々競々として孤立するので、所謂お馴染なるもの、外、動物を生擒することが出來ないから、收入は殆んど三分の一にも達しないで、一大打擊を加へられて了ふ、一夜斯くの如きケチが附くと再び全盛を招く事は、到底回復し能はざるに至るが多いと云ふ事である。この手段に懸けられて衰へたのを、彼等の社會では「お獅子を舞された」と云ふ、その意味に至つては些とも解することが出來ない。

　又彼等の間に『ひねれ』と云ふ符牒がある、此の『ひねれ』を實行するには、假令へば乙の太夫が保護者に大勢力があつて、他の甲丙丁戊等の同業者をして、衰運に至らしめるまでに幅をすると、甲丙丁戊等の太夫及び保護者が協同して、乙の太夫及び保護者に喧嘩を

吹きかけ、又は相對喧嘩をして紛擾を惹き起し、肝腎の擒にすべき客を散亂せしめる事があるのだ。尙ほその上にある向きへ密告して乙の太夫及び保護者を警察の力にて拘引さする事もある。警察が彼等の手中に自由にさるゝとは、一應不思議の如くなれども、其間には、一秘密――公然と記さずとも、斯かる消息は世人の首肯する處があらう。併し警察は決して彼等の爲めに偏頗の所業のある筈はないが、彼等の黠智に欺かるゝ例はある。畢竟するに○○に○○の行はれる結果だと聞くが、我等は更に信じない、又信ずべき餘裕を認めない――が行はれるからだとも云ふ。けれども餘り穿ち過ぎた説で、嚴重な規則に取締られて居るものが、然る怪しからざる行爲のあるべき筋はないから、彼等の騷ぐが爲めに自己の秘密が暴露して、警察の耳に入り遂に押へらるゝに至るのであらう。

斯う云ふやうに例を擧げて來ると、澤山あるが只だ繁雜にのみなるから省くとして、彼等が捕へて生血を吸ふ動物は、如何なる種類のものであるかと云ふに、それは素より一定しないけれど、其禁物として忌避するは、鼻の下に髯を蓄へるもの、紋附の羽織を着て何處となくイカツイ男、ぢろり／＼他人の擧動を見るともなく、見ぬともなくして偸み見る人、是等は尤も禁物中の禁物である。縱また彼等の敵でないまでが、意の如く籠絡し得られぬ厄介者も多く、折角窟へ連れ行きても、彼等の勞力に報ゆるだけの懷中がないのが多いからである。然すれば如何なるものを其餌食とし喜ぶか、それは素より一定の標準はない、各自の眼識で鑑定するので、到底門外漢の知り得られる事でないのだ。

扨て其の太夫なるものは、種々の風俗をして居る。廂髮の式部もあれば、又派出を專門に意氣がるもあり、千差萬別であつて、此の土地のは日比谷公園などの如く、自から種類が分れてゐるのでは無いらしいと、斯道に老錬な消息通も言つてゐる程で、丸山を根據として辨天あたりの附近にかけての、そんじよそれは幾度か黨與はあるが、個々別々の運動に歸して居る、併し此邊は冬季の夜などは散歩するものも無いから、從つて妖怪の出沒も跡を潛め、白晝に幾人かの姿を認める位である。櫻花の咲く頃と夏の納涼期を以て彼等怪物の出沒時期とし、其他は多く神明附近より新錢座あたりに陣屋を構へ、爪牙を硏いて居るのだ。

此の公園には尤とも誇るべき一大寶庫があつて如何なる貴紳もペイロ

シヤになる、然れど未だ十分に研究し得たものがないやうだから次號には大きな照覧鏡を懸けて鏡面に映寫しやうと思ふ

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内葉書に限る▲締切は毎月十八日

無宿者

京橋　三百代言

此度の東京市の騷動て、警察や派出所が燒かれて、我市民の保護者たる巡査諸君の居所が無く成た、即ち彼等は官服官帽、帶劍厳がめしく警嚴がめしき宿無してある無宿者てある、宜しく法律に照らして浮浪罪に問ふべき者てあると或人が云た

自轉車乘の挨拶

日本橋　膝栗毛

自轉車に乘た人が途中て、互に挨拶をする位珍妙な者はない、帽子を取り頭を下げる瞬間、相手は既に一間も二間も先に進んで、御禮をすべき當人達は目前に在らずして背後に在りと云ふ譯て、誰へ何しに頭を下げたのか、傍から見ると可笑な者さ

不具の市民

本郷　匍伏生

東京市民は警視廳令に依り道路は左側を通らればならぬ、然るに路は蒲鉾形に中高に成てるから右足て踏む方は高く左足の方は低く成る、そこて自然右の履物を低くか或は左足を長くしなければ歩行に不便だ、併し惜しいかな是點に着目して便利なる履物を賣出す樣な怜悧なる商人もないから、勢ひ市民は知らず〳〵の間に自然の淘汰の理に依り右足は短く左足は長い一種の不具と成て仕舞ふのだ

繪葉書屋喜ばせ

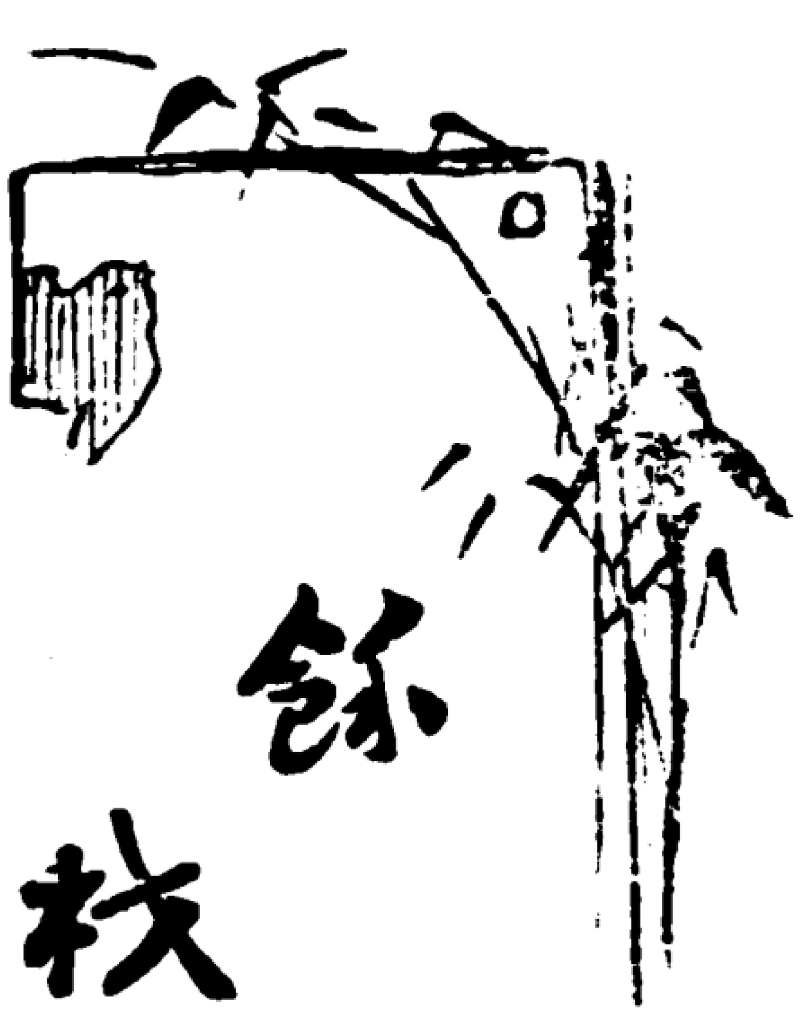
本郷　配達夫

世間の繪葉書を買て夫を使用せずに、生の儘の新らしいのを葉書帳に挾んで置く人がいくらもある、此人達は繪葉書と云ふ一種の葉書の用途を全然忘れて、只美しい繪許り見て喜んでるのだ、こんな方々は、よく紙上一面に文字を書くべき所が少しもない寫眞版の女のなんかを得て嬉しがつてる御目出度い先生方だ

奇なる兼業

神田　小僧

東京の酒屋ては大抵の家て、薪屋も兼業してる樣だ、醬油とか酢とかの樣な類似品なら知らぬ事、思ひ切て飛び離れた、似ても似つかぬ醬と罌ではない、薪と酒はどう云ふ縁て賣り出したかは知らないが、判じ者にもなり兼ぬる位だ



エリザベス女王の臨終

丘　山　生

エッセックス伯は首尾よくカヂズの遠征を果して歸つ

て來ると、女王の寵愛がいや增して深くなつたのを見て、君の御用とはいひ乍ら兎角御傍を離れ勝て、爲に快からぬ彼の敵をして常に君側に奉侍せしめ、動もすると讒謗の的となるといふことを御怨み申上げた。すると女王はこのやさしき嫉妬心に心動かし給ひて、我寵愛の質として失さずに取置けよとて、一の指輪を賜ひ、彼が如何なる不名譽を蒙ることがあつても、又彼女が人より誤られて、如何に酷く彼を遇することがあつても、若し彼が其指輪を女王に送つたならば、彼女は其を御覽になるや否や、直に昔の情愛を思ひ出して、勉めて彼の申開きを聞きもしやうし、又喜んで彼の訴に耳を貸すであらふといふことを誓はれた。

エッセックスは有らゆる不幸困厄の間にも、この貴き賜物をば、其最後の時迄失さずに持つて居たが、彼が鞠問せられ、死刑を宣告せられてから、一つ試して見やうと決し、かの指輪をノッチンガム伯爵夫人に托して、之を女王の許に致すやうにと願つた。けれども伯爵夫人はエッセックスの大敵なる我夫の爲に迫られて、其儘使命を果さなかつた。エリサベスは猶彼女の寵人から今に最後の訴があるだらふと、心待ちに待つてたが、今に其訴のないのを見て、はては彼が人に屈服しない强情な故に歸して、延引に延引を重ね、幾度か心中に苦闘した後、一は可愛さ餘りて惡さ百倍といふ怨心より、一は政略上より、遂に彼の死刑執行狀に記名調印せられた。

ノシチンガム夫人は後に病を獲、漸く其最後に近づいて來てから頗る心を動かして、大に我所業を後悔したが、態〻女王陛下の御出を仰いで、其許を乞ひ、かの一命に係はる大秘密を打明けた。女王は此の事を聞くや大に驚かれ、非常に心を動かされて、病床に橫はつて今死せんとする伯爵夫人を搖り動かし、泣き乍ら、神は許すかも知れぬが、我は決して許さぬと仰られ、大怒りて辭し去られた。

それ以來女王は全く深く癒え難き憂鬱に陷られてしまつた。彼女は有らゆる慰撫を避け、食物すらも斥けて、頑固に動かずに、全く病みに心を奪はれ、生きてるのは全く堪へがたき重荷なりと仰られて、床上に臥されてお出になつた。僅かに語を發せられたが、それは心ならずも深き心の底の悲痛を表はすものであつた。夜となく晝となく彼女は毛氈の上に橫はり、侍女が持ち來りし椅子蒲團によりて、侍醫の切なるすゝめも彼女を寢臺に橫へさせることも出來ず、況んや調合した藥

などを試ることとは出來なかつた。彼女の絶間なき心配は其弱つた身體をやう〳〵衰へさせて、其最後は明かに近づいて來た。王位の繼承者に付て女王の意向を知るために會議は開かれ、掌璽官海軍將官秘書官はそれ〳〵招集された。女王は已は既に王統を維持したのであるから、王の繼承者より外に望なしと、細い弱つた聲に宣はせられた。セシルは更(もつ)と明細に話すやうに女王に願つた。女王は附加(つけくは)へて繼承者には王(キング)を以てしたいと仰られた。これスコツトランドの王を除いて、女王の最近親は外に誰あらふ。やがてカンターベリーの僧正は思ひを神に向け給へとすゝめ、女王はしかせん、神より外思ひを他に移さずと答へられたが、直に其聲は消え、其感覺は失せ、數時間昏睡に陷りて、更らに苦悶苦痛もなくて、靜かに息を引き切られた。時に一千六百三年三月二十四日、御年七十歲在位四十五年であらせられた。

――英國史より――

新刊批評

臺灣統治志

竹越與三郎著　博文館發行

「新日本史」「二千五百年史」の兩著に、絢爛優麗花の如く、虹の如き才筆を揮うて、乾燥無味殆んど砂を嚙むにも似たる所謂歷史家の著述をして顏色なからしめたる竹越三叉氏、筆を歷史的著述に絕つこと玆に十年、吾人常に之を憾みとしき。然るに今や其間濫溜したる學識と抑壓したる精力とを以て、我國最初の殖民地たる臺灣に向て其研究を試み、數多の精確なる材料によりて其統治の得失を議し、題して「臺灣統治志」といふ。菊版四百六十餘頁の大著、章を分つこと二十一、添ふるに附錄二篇を以てす。蓋し近來の好著なり。

今此書の體裁內容を知らしめんが爲めに稍ゝ詳しく一二章の記述順序を擧げんに、第一章「殖民及び殖民國」に於ては冒頭「生物學の原則は何處までも人類を支配す」に筆を起し、海潮と人類の文明との關係至大にして殖民の歷史は此海潮の歷史と終始することを述べ、「殖民地を有する民族は庭園を有する人家にも比すべし」といひて殖民地を有する國家の盛大となる理由五ヶ條を說明し、帝國主義は畢竟殖民政策の別名なることを喝破し、世界競爭の舞臺が太平洋に向ひたる所以に論及し、臺灣は我國最初の殖民地にして其統治の失敗するか成功するかは是れやがて日大人が太平洋の女王たるを得べきや否やを斷ずる一の鐵案なりとの結論に至るまで論理井然一絲亂れざる筆力を窺ふべし。第二章「臺灣に於ける日本の統治」に於ては、武力を以て新領土を取るも統治組織の才なければ終に之を死殿に附し、或は喪失を免れざるを說きて單純なる武力は以て國を建つるに足らずと斷じ、臺灣の統治如何は實に中外の疑惑危懼の焦點たりしに拘らず、今や平和は回復し、秩序は生じ、生產は起り、政府の威信生じ、生々の氣蒸然として盛に、實に我國が最初の殖民地に成功したるを視し、殖民地に選定せらるべき土地、殖民人としての日本人の性質を論じ、道に逢へる少女の一人平然として旅行しつゝある、是れ

臺灣に秩序ある一證左なりと記し、兒玉總督の統治策を擧げ、總督が軍人の專制を廢して民政に重きを置き、土人の風俗に投じて民心を慰撫する所以の道一として講せさるなきを賞して、「軍隊の專制を廢したる一事こそ實に臺灣統治志中に特筆すべき一大事實なるを信ず」と論じ、十年前の臺灣と今日の臺灣との文物開明の差異の大いなるを示し、我臺灣の統治は遙かに佛國殖民地のそれに優りて已に英國のそれに等しからんとするを論じたる、意義明確、毫も曖昧を容さゞる文體を見るべし。

第三章「臺灣統治の法制上の觀察」以下「過去の臺灣」「臺灣の地勢、自然、人種」を記述し、或は財政經濟の點より、或は司法監獄の上より、或は警察機關、阿片專賣、食鹽專賣、樟腦專賣の問題より、或は產業、交通、衞生、敎育、宗敎、慈善の方面より、其他種々の題目を揭げて臺灣統治を縱橫無盡に記述し論議したるもの、苟も國家發展の事蹟を知らんと欲するものゝ必ず一讀せざるべからざるもの也。

若し夫れ其文章に至ては氏從來のそれに比して漸く其絢爛を失ひ、其優麗を去りて平淡達意の域に入り、讀んで往々興味の薄らきたるを惑ずる所あるも、而かも歷史的眞實を傳ふる著述としては却て老成圓熟に進めるを見るべし。著者が其序言に於て暗に之を辭して陰にフラウドを以て任じ、此書を以て「西印度英人殖民志」に擬したりと稱せらるゝも必しも自ら驕るものにあらずと信ず。吾人玆に妄評を試みて一は著者の本書を惠送せられたる優遇に酬ひ、一は江湖好學の士に向て其一讀を推奬するものなり。(定價六十五錢。哲生誠)

へなぶり

朴念仁著
讀賣新聞社發行

凡そ滑稽が多いといふても明治の今日程滑稽の多い時代はあるまい。急激なる維新の大海嘯が全く靜まりきらぬ中に新たなる文明の波濤が滔々として浸入して來る。其文明の波濤に巧みに遊泳せんとして、デシヤバツて來た先生が即ちハカラー、庇髮と名つくるのである。所が文明の潮流といふものはなかなか彼等生若い先生逵の注文通りに來るものではない。だからして一人得意で泳いて居ると逆波に打たれて泡を食うたり大波に揉まれて鹽水を飲んだりする、是に於てハイカラー、庇髮の喜劇が演ぜられてい前古未曾有の大滑稽が生じた。是れ素より明治的滑稽の上乘なる題目であるが、然し滑稽は之に止らぬ、詮じ詰めて見れば明治の社會夫自身が已に一個の滑稽社會であるのだ、川柳先生此弱點につけ込んで大に氣儘のいたづらを恣まにした、然るに玆にへなぶり先生悠然として出て來り、遲れ馳せながら拙者も一つお仲間入りをしたいのだ。拙者の先祖は狂歌と申して大分古い統系のものだが、お恥しいかな先祖には碌なものはなかつた、然し拙者は年も若し、頭もよし、腕もあり、貴君と相並んで滑稽諷刺の壇場に立つことが出來ると自負する、川柳先生御意得たしといふのは此へなぶりである。

我輩の見る所てはまだ川柳程面白いのはない樣てある。これは歷史的に見ても在來川柳程名作がなかつたことも大に影響して居ると思ふ、然し在來の狂歌に比しては大に進步し、且つ面白いものもある

こひころも猥りな歌を難ずれば
　アラよくツてよと空嘯(そらうそ)ぶきぬ

電車から心得がほに飛びおりて
　仰にたふれしハイカラのかほ

本郷座また不如歸(ほとゝぎす)いゝわねえ。
　あなた藤澤?わたし河合よ

行きませう旦那おやすくいかゞです

あれも電車かアゝ情けねえ
門づけの新内とほく夜は更けて
誰がひとり語かアゝつまらねえ

の如きはよい方の部である。併しながら

我輩の都々逸下手とのたまふか
昨夜も寄席にてまれびたりしを
若竹へ下宿のむすめ連れて行き
鋤焼をおごると翌牛肉がつく

の如きは餘り罵倒に失して居ると思ふ。兎に角かゝる滑稽文學は茶漬飯後寐ころんで讀むと面白い。（定價十八錢）

△蕃山拾葉　永嶋忠重編　警醒社書店發行

熊澤蕃山の遺文を抄錄せるものなり。蕃山は德川氏第一流の學者にして其經世の識案より學ぶに足るもの多し、此書文章として見れば左程の明文とも思はれざるも、人物品性を陶冶する上よりいへば甚だ有益なる好著なり。（定價三十錢）

△新撰分類英文佳句雜句集　第二卷　村田、二木二氏編　國屋書店發行

英文學の中より佳句名句を拾ひ集めたるものなり。中には必ずしも集錄する必要なかりしと思はるゝものなきにあらねど又甚だ面白く、居常記憶しおくべき名文句も少からず、英學生の一覽すべきものなり。（定價三十錢）

△火鞭　第一號　火鞭會發行

「科學萬能主義に抗して人類の迷妄を打破し、現代の文明を批評して默移暗遷する時代の思潮に掉す」とは火鞭會告白第一箇條なり。吾人かゝる壯擧を賞し、滿腔の同情を表するを禁ずる能はず、只反抗は動もすれば矯激の筆を弄せしめ、矯激は時に背理の妄を敢てせしむ。是れ時勢に反抗して事を成さんとするものゝ戒めざるべからざる所と信ず、此誌の記者、白湖、厥村、孤劍等皆氣鋭にして意壯なるも其文字妥當を缺き、其文調流暢を缺き、讀んで不快の念を起さしむるもの少からず、我主義に忠實なるものは又我文に忠實ならざる能はず、吾人は此記者等の如き熱誠なる人にして比較的其文に冷淡なるを怪しむもの也。梁川氏の「神火と人火」は其文章識見共に見るべく卷中の白眉なり。（定價八錢）

△出鱈目の記　矢野龍溪著　近事畫報社發行

煙霞を吸ひ、沆瀣を飲む神仙は其咳唾も皆珠玉となる。學、和漢洋を錬れたる龍溪は其デタラメに記したるものも悉く趣味津々たる文章となる。戰時畫報唯一の讀物と呼ばれた、デタラメの記集まつて此書をなす。實によき消閑の好書である。（定價四十五錢）

△小天地　第一號　小天地社發行

詩集「あこがれ」の著者石川啄木此主幹となつて盛岡より發行したる文學雜誌なり、健全なる發達を望む。（定價十二錢）

病間錄　綱島梁川著　金尾文淵堂發行

病間錄は主として著者が兩三年來の宗教上の感想錄を輯めたものて、宗教上の上自覺史とも見るべきものであるとは其序に書かれたことて、これによつて略ゝ本書の性質を知ることが出來やうと思ふ。又編纂の仕方も年月の順序に従てあるのは最もかゝる性質の書にふさわしいことゝ思ふ。

吾人は綱島氏の人格を嘆美し、綱島氏の思想を尊崇し、綱島氏の文章

を激賞するを禁ずる能はざるものである。先月の本誌上で「梁川文集」を評して、明治の文壇に類ひ稀なる好著として世間に推奨したが、此病間錄に至ては今一層強き度を以て世間に推奨せざるを得ないのである。何となれば彼を近松の時代物とすれば此れは其世話物である、彼を小乗とすれば此れは大乗である。綱島氏の本領特質は彼よりも一層よく此れにあらわれて居るからである。氏自らも「梁川文集」を評して「あれは故き人である」といはれた。彼が故き人であるならば此れは即ち新しき人である。

「宗教的眞理の性質」を説いて神は知るべきにあらず、寧ろ感ずべきものである。而して「其感ずといふ意識上の事實はやがて神の存在の唯一の根據なり」と論じたのは實に達見であつて、一面理論的宗教家の迷妄を破すると同時に、一面證明せられざるが故に神はなしといふ科學者の速斷を防ぐに足るのである。「學究と獨斷」に於ては世の所謂學究者流を斥くると同時に又學究者を漫罵して自ら高しとする放言者を罵つて、眞理の求めがたきを論し、精進邁往不退轉の勇者のみよく靈光燦たる眞理の峯高く攀ぢ得べきを説き、カーライルとミルとを對比してミルの眞個の學究的態度の貴くもゆかしきを賞したるは實に今人をして反省せしむる議論と思ふ。併しながら議論をするのは此書の目的ではない。此書は實に氏自ら身讀体達した人生其物の感慨を書き集めたものである。哲學と宗教と最もよく調和した思想を、詩人的天才の筆を揮うて最もよく書きあらはしたのは即ち此書である。哲學よりも更に賢き智識と宗教よりも更に大いなる慰藉を詩歌よりも更に美しき文字を以て記したものは此書である。此書は即ち活ける人間學、血の滴る人生論である。吾人は此書に向て批評するの蠻勇を持たぬ。たゞ須らく熟讀玩味し、反覆沈潜して血と涙とを以て解釋せられた哲人の教訓に學ぶべきだと思ふ。

其「病鵑を傷める」情の温かにして哀れなる。其「秋の力」を讃へたる心の高くして清き。其「心のたどり」の沈々として眞摯約百にも比すべき。「法樂」「法友」の優游として脱俗高僧にも等しき。「悲哀の高調」を彈ずれば胸奥の琴線悉く鳴つて無限の悲哀無限の慰安滔然として湧き。「心響錄」に耳傾くれば心機縱横に馳せて自力他力皆一身に攝して我無限に弱く、我無限に強きを感ずる。其他「煩悶の意義」を説き「恩恵の生活」を賛する、皆情盡し理盡して到底他人の追徒を許さざるものである。

尚體裁について一言すれば四六版四百二十六頁の美本、紙はよし、印刷はよし、綴ぢ方は從來比類のない角綴（かくとじ）で、紙箱にチヤンと入つて飾て置くにも、携帯にも都合よい、是れは一に文淵堂主人の功である。之を要するに吾人は本書を以て精神上の最良の糧として讀書界に推奨するものである。（定價一圓、哲生）

ダルウイン原著

種之起源

丘淺治郎校訂
開成館譯並發行

本書は開成館主人から吾輩に惠送せられたのであるが、此書の發行は實に我讀書界に於ける一大事業、一大功績と認めざるを得ぬ。何にせ總體千頁以上の大著、一日や二日で讀了することが出來ぬ。且つかゝる著書を輕々しく批評するは著者に對して禮を失し、讀者に對して忠ならざるものなることを思ひ、次號の本誌に於て細評を試むる積りである。

（定價三圓、哲生）

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁紙質上等　價金五十錢　郵稅八錢

本書は世人の常に必要を感じて未だ出版せられざりしものなり、その世に行はるる年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照捜索に便利なり　本書は博く世人の需用に應ぜん爲め便利と實用とを主眼としなるべく　普通年表の陷り易き亂雜の弊を避け　其配列には我社は特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず　極めて簡短に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷代中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人　は此書の出版に由りて今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

年表は攻學者に限らす世上實務に從事する人にも必要あり　我國の舊時に於てすら尚各家庭には必ず一部の年代記を藏したり　本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり　敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九百十九番）　反省社

賣捌所　東京堂　上田屋　文明堂　有明館　盛春堂　岡崎屋

帝國文學

第十一卷第九目次（毎月壹回十日發行）

◉猓玀の神話 鳥居龍藏 ◉神經質の文學 片山學士 ◉彼得の母 小山内薫 ◉鐘樓守 吉川英男 ◉誰が罪 橋本青雨 ◉狂乞丐 丸山布峯 ◉亡母のうつしゑを手にして、 浦瀨白雨 ◉湖畔の聲 澤村胡夷 ◉和歌 尾上柴舟 ◉劇評家と俳優 坪内博士 ◉牛のよだれ ◉晩近獨逸小說界の傾向 ◉脚本懸賞募集 十二月末〆切

定價 壹冊金十五錢郵稅金一錢 六冊前金郵稅共金九十錢 十二冊前金郵稅共金壹圓六十五錢

丁酉倫理會 倫理講演集

第三十六輯目次（毎月壹回十五日發行）

講演

◎眞善美を論じて倫理學上の迷見に及ぶ 文學博士 加藤弘之

◎戀情及び結婚制度 隈本有尙

◎ホップスの名著一斑 文學士 野田義夫

◎東洋哲學に於る自我の觀念 文學博士 元良勇次郎

雜錄

◉剛ならんか將柔ならんか○泰西名家談叢○如何にして文部省修身科受驗を準備せむ○無題錄○枕肱餘話應問

定價 壹冊金十二錢郵稅金一錢 六冊前金郵稅共金七十二錢 十二冊前金郵稅共金一圓三十二錢

發行所 東京銀座壹丁目 大阪北久太郎町 大日本圖書株式會社

嚴密なる校訂と三十餘頁の增補とを以て再版出來せり

文學士 朝永三十郎著 （補訂再版發賣）

增訂 哲學辭典

背皮上製全一冊
紙數五百七十頁
定價金貳圓卅錢
小包料金十五錢

『本書初版に對する有力なる諸雜誌の批評二三を揭ぐ』

『哲學雜誌』評

（前略）斯る時機に出づべき辭書は、直接には學語の意義を解釋し、其歷史あるものは其を明かにして、初學者の要求に應ずると共に、間接には學者間の譯語を一定せしむると云ふ重大なる任務を持て居るのである。朝永學士の『哲學辭典』は嚆矢として實に此重大なる任務を以て生れて來たものである。學士は本より謙讓の美德を具へられた人であるが、其れだけ我等文學士の抱負に對して畏敬するのである、（中略）本書は本文四四六頁、前後の索引を合せて實に五百頁以上である、辭書としては可なりの大冊で、大なる勞力の結果と見なければならぬ。而て各學語には獨英佛の原語が附いて居て、又普通に必要なるものは羅句希臘の兩語もあり、其が單簡なる熟語の說明もある。全體に行文明晰難解の處なく、又說明も甚だ親切である、本文の初に邦語の索引、終に獨英佛及び羅希の各語の索引があるので、參考せんとする人には、决して語の搜索に苦しむと云ふ様な事があるまい。次に此書は古今哲學者の學說の大要と生死年月が審かにしてある故に、哲學者の人名辭書をも雜れて居る。前述の如く哲學に關する學科は歷史と離るゝ事の出來ないもので、古來の學者を知ると云ふ事は從つて切要なことであるが、故に、此の書は誠に便利なものと言はなければならぬ。又此書は非常に美裝して出たので、机上を飾るを得べし、此點に於ても亦辭書たるの一特性を失はない。（下略）

『丁酉倫理會講演集』評

著者の序文に曰く『純正哲學、及所謂哲學的科學に關する述作日を追ふて盛なるに係はらず、其學語を說明せる辭典の著作の無きは、著者の窃に以て學海の一大缺陷と信ずる所なり。從來我國に於て斯學に關する二三の辭典なきに非ざるも、そは原譯兩語を對照して譯語の標準を示すを目的とせるものが、或は主として教育に關する學語若くは題目を說明するに止まれるものにして、未だ曾て哲學全豹に亘つて、廣く學語を說明し、普く斯學研鑽の考に資せんとするものにあらず、著者の此辭典を編せるは全く此缺陷を充さんが爲めなり』と。然り、此種の要求は我學界の疾くより抱き居りし所にして、而も未だ滿足せられざりし所なり。是に於てか著者の惠みも亦大なりと云ふべし。世の譯書によりて教育倫理心理哲學宗教を攻究せんとするもの、爾後之によりて一大困難を排除するを得ん。今本書編述の方法を見るに、本書は主としてアイスレルの哲學字書、ボールドヰンの哲學及心理學書及びキルヒネルの哲學字書等を參考とし、一般哲學に關せる事項に就きては、更に諸家の哲學史及び哲學概論を參考せりと云ふ。著者の忠實謹嚴なる、吾人は深く其年頭を懸けて苟且を寶る者に非ざるを信ずるなり。特に邦字術語句、及人名索引、並に歐字索引（英佛、獨、羅馬、希臘）を附して一々之を本文に參照するの頁數を示したる如き、最も著者の苦心を見る。かくて本文四百五十頁に加ふるに、索引約百頁弱、宛然手頭の好辭書となれり。外國語を知りて譯字を知らざるもの譯語を知りて外國語を知らざるもの、但しは又た譯語の意義學者の小傳を知らんと欲するものは、縱橫自在本書によりて用を辨ずるを得べし、吾人の双手を擧げて之を江湖に推薦する所以なり。

『新公論』評

哲學辭典の見るべきもの、此進步せりと稱する明治の學術界にやふやく今日を以て現はれ出たり。從來世人の最も不便を感ぜしところは此書に依て初めて救はれ得たり。此書の特色は

哲學的學語の全体に亘りて廣く蒐集し說明したること。

學語は現に用ひらるゝ外、語學者の異譯を併せ揭げたること。

人名原音に隨へること、而して已に廣く世に行はるゝものは之に從へること。

學語を擧げて其下に獨英佛の原語を挿入せること（出所に依りて素より希臘羅甸等もあり）。

邦字の『學說及人名の索引』と『歐字人名の索引』及『獨英佛希臘羅甸各學語の索引』を別に附せること。

此種の事業、其面倒、其勞苦、尋常に非ず、著者のかくまで完成せるの勞は世人の謝せざるべからざるところとす。印刷製本美にして堅

發兌 東京市日本橋區本石町三丁目（電話本局二三一三番） 寶文館

日本園藝雜誌

每月一回(十五日)發行　定價廿錢郵税一錢五厘

第十七年

中秋の巻

十月十五日發行

執筆家

松村博士　畔柳文學士　服部理學士　牧野富太郎氏

三好博士　城法學士　池田農學士　古宇田工學士

穗積博士　尾上文學士　鈴木農學士　三瀬眞若氏

草野理學士　早田理學士　中村文學士

執筆畫家

三宅克己氏　大下藤治郎氏　淺井忠氏

中村不折氏　庄野宗之介氏

和田英作氏　橋口五葉氏

△『夏の巻』は全部賣切▽

△『新秋の巻』は好評嘖々▽

東京下谷上根岸六十三番地　日本園藝會　電話下谷-一九四五

賣捌所　田中屋　勉强堂　盛文堂　裳華房　服部書店　其他

實業家の座右に不可缺の寶典

毎月六回五、十の日發行第參百號　八月三十日發行

▲法律新聞▼

定價　一部前金六錢五厘　十二部前金七十二錢　二十四部前金一圓四十錢（郵稅共）

本號には定期附錄として本紙大の寫眞版を添ふ其內容●帝國外務省と小村外相●米國ポーツマスと高平公使●霞關の舊露公使館とローゼン氏●ポーツマスの媾和談判會場とウヰツテ氏●東京法政大學の講師並に日清卒業生●富士見町同校前より眺望したる富士山と靖國神社●圓山公園京都御苑京都法政大學の講師及卒業生●ルーズエルト夫人と令孃及其家庭●米國法律大博士男爵金子堅太郎氏●米國新國務卿ルート氏

社說、地代增額に地所明渡に關する裁判例に就て▲株主は自己が重役に選擧する株主總會に於て自己の株式に相當する票決權を有せりや**論說、穗積博士**の辯護士制度ノ進化**富井博士**の民法中法人に關する規定は何種の法人に適用すべきや**梅博士**の法律學は專門に失すべからず等字々皆金玉**史料**は「梟せられし司法卿」今や小倉占領の冒險策に入り漸く佳境に進む「福島事件の大」一題何ぞ奇なる**判決例**は「約束手形金請求事件」に於て株式會社の記載なき商號表示並に副支配人の權限を明知すべく「不動產登記取消請求事件」に於ては無効登記の對抗力を知るべく「競落許可決定抗告事件」に於ては貸借人と競賣不動產との關係を知るに足るべく「競賣許可決定抗告事件」に於ては競賣登記の効力を知るべし**大審院判例摘要、行政裁判所判例**は**例號**の如く最近の判例を摘要す**判例批評**東京控訴院檢事日本大學講師法學士小疇傳君が該博なる刑法學と橡大なる筆力とにより大審院の最近判例を批評したるもの**伯林通信**の本社特派員荻野學士の「萬國法律經濟學會員の遠足」と題するもの萬國學者會に我が特派員が優待せらるゝの狀如何に戰勝國の餘榮を負ふかを描きて遺憾なし其他**雜報**に於て**泉聲石語**雨山居士の清楚々たる雜觀旨遠く趣深し**掏摸の內幕**經寫縱寫菊池女史の**八王子女監視察**一掬同情の涙を濺くの記事**豆南紀行**松岡特派員の第一本號より登載す法律上の點經濟の點兩々相映じ時に前田所長奧宮檢事正の諧謔を弄する邊近來の好文字其他內外の法界近況渋らす所なく石龍子の**講和大使の人相觀**其相貌より其心事を解剖す**小說**惡新聞記者と題し實物に多少の文飾を爲せしもの事實は却て小說の奇よりも奇其他立案書式、實業界訪問、英獨佛判例外國雜誌譯、法令、訓令、文苑等材料豐富趣味津々戰勝國の實業家たるもの一日も缺くべからず

東京府下の講讀者に限り東京府市等視聽公報を附錄とす

發行所　東京日本橋本銀町（特電話本局五百十七番）法律新聞社　全國賣捌

文學雜誌

文藝

●日本一のコツタ雜誌●

年六回（一月、三月、五月、七月、九月、十一月）發行
定價八錢郵稅二錢

●發行所　麻布本村町　大俗社

JAPAN, 1853-1864.

by Sir E. Satow.

前任日本駐劄
現任清國駐劄
英國特命全權公使サトー氏英譯

英譯對照校註

開國史談

和文英文 各一册

和文 定價金三拾錢 郵稅四錢

英文 定價金五拾錢 郵稅四錢

『大阪朝日新聞』評 本書は一名元治夢物語と云ひ嘉永六年米國水師提督ペリーが始めて江戸灣に闖入せし以來、攘夷鎖國の論盛に起り國内騒動したる狀況より、元治元年の闘爭に至るまで十二年間の時事を、當時の人馬場某が見聞に隨ひ通俗文を以て太平記體に記したるものにして**開國當時の事情を知るに足るべき一珍書**なり。本書英譯の部は英國特命全權公使として久しく日本に在りし(現今は北京駐劄)サトー氏の筆になる同氏は我國の事情及び言語文章に精通す、其の**飜譯は極めて丁寧忠實にして一語一句苟くもせず文章亦流暢自在**なり**眞に和文英譯の好模範**といふべし。

『日本人』評 我國人は古代の歴史に委しきも或は現代及び近代の歴史を解せざるもの多し。維新の革命は我が歴史未曾有の大變革にして、獨り其興味あるのみならず、今日我國大發展の跡を辿らんとするもの、夢にも等閑にす可らざるところなり。本書は馬場某なる見聞の人の筆に成りて、疎朴簡明なる記叙の中に却つて歴々として當時の狀態を掬すべきものあり。曩の英國全權公使アーネスト・サトー氏之を譯して『日本』と名づけしを、此度同氏の許を得て原書と共に其英文を再刊したるもの、**當時の歴史を審にすると共に英文を學ぶに兩得ある有益なる著書**といふべし。

THE JAPAN GAZETTE:—A new and cheap edition of Sir Ernest Satow's "Japan1853-1864" has just been issued. It is printed in large type, but on good, thin paper which considerably reduces the bulk. The work is Sir Ernest Satow's standard translation of "Genji Yume Monogatari," and this new issne gives a splendid opportunity of securing their valuable work at a cheap price. The new edition is published by the enterprise of Mr. Watanabe and with the permission and approval of Sir Ernest Satow. The price, in paper covers, is 50 sen. with the Japanese original 80 sen.

THE YOROZU CHOHO:—Our foreign readers will be interested to hear that a new and cheap edition of Sir Ernest Satow's "Japan 1853-1864," a translation of "Genji Yume Monogatari," has just been published by the Naigai Shuppan Kyokwai, Komagome Tokyo. It is well printed on good paper, with a facsimile of Sir. Ernest Satow's letter to the Editor, Mr. Watanabe, permitting him to issue the edition. The price is 50 sen per copy.

出版元 東京市本郷區駒込西片町十番地 内外出版協會

ホトトギス

九卷一號

コノ廣告ヲ書クトキマデ

表紙

吾輩は猫で

貸家

一日句抄

蕪村畫談

老梅居雜話

不平（小說）

玉川の秋

白馬會寸評

挿畫

裏繪

東京市麹町區富士見町

十月十日發行

定價 壹册拾五錢郵稅一錢
郵券代用苦しからず

は不折の圖案にて天馬空を驅るところなり

漱石作は更に稿をついで本號に現はる

ニワカツテ居ルモノ大略左ノ如シ

ある

四方太
碧梧桐
不折
鳴雪
傳四
虛子
半壺
五葉、朱冠、庄野
默語

四丁目八（電話番町七四四八）

俳書堂雜誌部

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること

▲締切は毎月十八日最終便まで

▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論 定價表

	定價	郵税共
一册	金拾貳錢	金拾參錢
六册	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二册	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は郵税六錢を要す

中央公論 廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を東京駒込局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盗取せらるゝ憂なし

一郵券代用の場合は必ず壹割増のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂

神田裏神保町　上田屋

京橋銀座四　東海堂

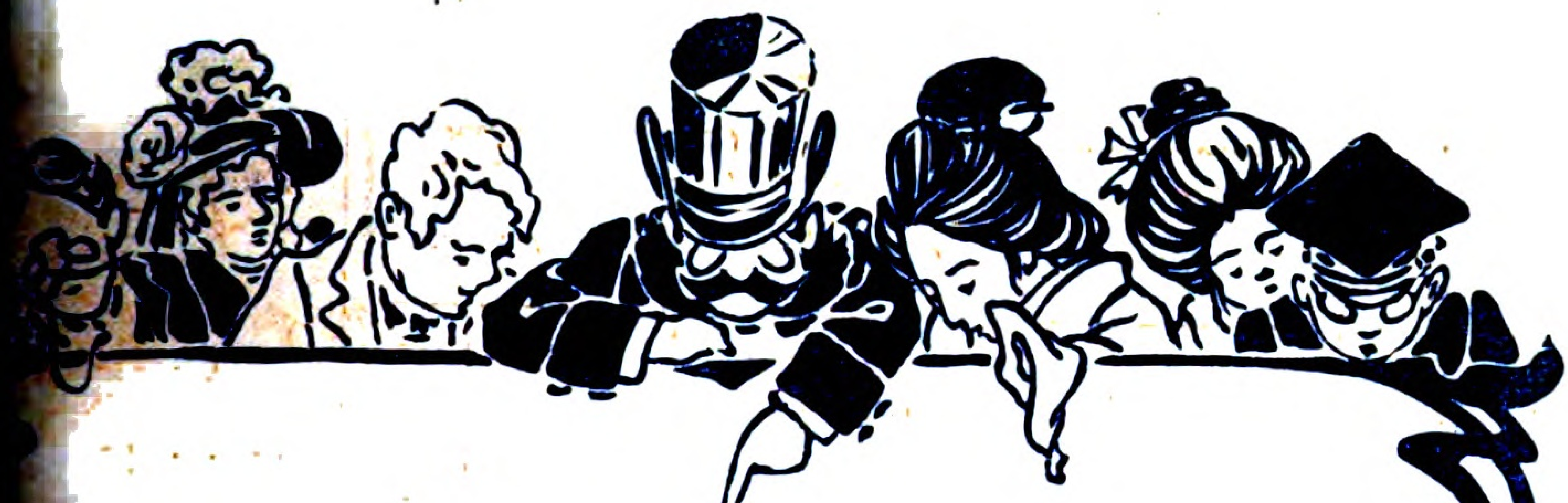
本鄕四丁目　文明堂

明治三十八年九月廿七日印刷
明治三十八年十月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　反省社（電話下谷九一九）

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場



中央公論

No 199

明治十九年創刊

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

明治三十八年十月一日發行（毎月一回）

東京本郷區駒込西片町十番地

發行所 反省社

（電話下谷九一九）

東京牛込區加賀町一丁目

印刷所 秀英舍第一工場

大賣捌所

神田表神保町 東京堂

神田裏神保町 上田屋

京橋銀座四丁目 東海堂

本郷四丁目 文明堂

（定價一部金十二錢）

郵稅一錢

前號概目